

---

# 交差する世界 番外

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交差する世界 番外

### 【Nコード】

N8870U

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

現在並行連載中の「交差する世界」の外伝となります。本編と同じく、作者の趣味が爆発しているので御注意ください。

## ヘルベチア転移編 1

2年目 南東諸島 南500km海上

日本国海上警備機構所属の警備船「漣06」は異常事態に直面していた。既に恒例となつてゐる国境海域の哨戒任務中、突然気象予報にはなかつた嵐に遭遇し、さらに電子機器にも異常を来たしていた。

「全くどうなつてゐるんだ？こんな嵐が起きるなんて聞いてないぞ。おまけに電子機器は皆不調と来た。」

船長の樫村三等警備正が忌々しげに外を眺めながら言った。

「あの、大丈夫なんですか？」

そう心配そうに言うのは、現在この船で研修中のサクラス帝国海軍中尉のマーレス・スレイだ。ただでさえ慣れない船の上なのに、思わぬ事態の遭遇に驚いていた。と言うか恐怖していた。

「嵐が晴れてくれればな。だが、この嵐のせいで磁気も乱れているようだからな。電子機器が動かないのが本当に痛い。GPSどころか無線機もダメと来ているからな。」

そう苦々しく言った時、報告が入る。

「船長！」

「どつした？」

「左舷前方に陸地を発見!!」

「何!? バカ言つな。この付近に島や大陸は無い筈だぞ・・・」

見張りにそう言いつつも、樫村は双眼鏡を向けた。相変わらず外は大嵐で視界が悪い。しかし。

「確かに、陸地だ・・・」

微かではあるが、確かに陸地らしき物が確認できた。

「まさか、また新しい国が!?!」

と彼が呟いた時である。突然船がガクンと揺れた。

「嫌な予感がするぞ・・・」

その予感は当たった。

「船長、舵損傷!! 全く利きません!! 陸地の方へ船が流されています!!」

「何!?!」

同時刻 ヘルベチア共和国セーズ郊外ヘルベチア共和国陸軍第1  
121小隊駐屯地「時告げ砦」

ローマ帝国とヘルベチア共和国の国境地帯の街セーズ、その郊外にあるのが第1121小隊の駐屯地、通称「時告げ砦」だ。広い駐屯地の中で、唯一食堂だけに灯が灯っていた。

「ひどい嵐ね。」

小隊長のフィリシア・ハイデマン大尉が食堂の窓の外を眺めつつ言う。昼間から始まった嵐は一向に収まる気配を見せない。雨風ともに強く、窓ガラスに当り激しい音を立てていた。

「全く忌々しい。朝までには晴れて欲しいな。」

そう言うのは、和宮 梨旺少尉だ。現在起きているのは2人だけだ。この砦に配置されている5人の兵士の内、3人は既に夢の中だった。

「あらあら。」

「だってそうだろ？こう言う時に限って、厄介ごとが起きるんだからな。」

そう彼女が言った途端、外の扉が叩かれる音がした。

「ほらな。」

「私が出るわ。」

フィリシアが扉まで行き、開けた。するとそこには、顔馴染みの街の人々が立っていた。

「夜分遅くにごめんね。」

口を開いたのは、小隊のメンバーと関係が深いナオミであった。彼女は町の住人からも信頼されている好人物だ。その彼女がやってきたのだから、何かが起きているのは一目瞭然だった。

「何か起きたんですか？」

「うん。何か起きた事には間違いないね。ただ、ちょっと私自身信じられないことで。」

「取り敢えず、ここで話すのもなんですから、中へどうぞ。」

フィリシアは、ナオミたちを中へと案内した。

数時間後 セーズ郊外

街の住人の要請により、第1121小隊は緊急出動した。出動先は、郊外の通称ノーマーズランドと呼ばれる地域だ。そこにやってきた1121小隊の面々は、思わぬ光景を目にした。

「どう言うことなの、これ？」

啞然としながらそう言うのは、第1121小隊所属の墨埜谷 暮羽上等兵だ。

「これ、どうみても・・・海だよな？」

暮羽同様唾然としているのは、同じく上等兵の空深 彼方だ。

2人の目の前には、嵐によって高い波飛沫を立てている海が広がっていた。

「どう言うことなんだこれは？」

「わからない。けど、これは夢や幻じゃないわ。ノーマーズランドが消えて、海になった。」

梨旺の言葉にフィリシアが答えるが、彼女も努めて冷静にはしているが、驚いているのに変わりは無かった。

セーズの街は隣国の正統ローマ帝国との国境にあるが、ローマとの間には荒野が続くノーマーズランドと呼ばれる地域があった。セーズからは山を越えていけば辿りつけるのだが、第1121小隊が通報を受けて来てみれば、見慣れた荒野は消え去り、変わりに大海原が現われていた。

「ありえない。こんなこと。」

隊のもう1人のメンバー寒風 乃絵留曹長が皆と同じ感想を漏らす。彼女は隊の中でも秀才であるが、今回のことにはさすがに驚きを隠せなかった。

「一体全体どうなっているんだろうね？」

「とにかく、今の所行方不明になっている人もいないし、一端皆へ

戻りましょう。このことを首都の司令部に報告しないと行けませんし。」

フィリシアはナオミと善後策を協議する。

「私も賛成だ。取り敢えず確認はしたんだ。嵐はもうしばらく続きそうだし、とつとと砦に戻ろう。」

「そうですね。こんな嵐の中にいつまでもいたところで意味ありません。早く砦に戻って、お風呂に入りたいです。」

暮羽が同調する。外套に身を包んでいるとは言え、やはり風と雨が冷たい。

「そうですね。取り敢えず戻って、嵐が止むのを待ちましょうか。」

フィリシアも同意しかけた時、彼方が気づいた。

「待つてください!!!」

「何よ?」

暮羽が怪訝な表情をした。

「静かに……」

彼方はそう言うと、目を閉じて耳をすました。相変わらず風雨と波の音が辺りを包んでいるが、彼女はそんな状況にあって、それらとは違う音を感じ取った。

「聞こえる・・・何か、汽笛のような音がします!」

「「「え!?!」」」

「ダメです船長。全く動きません。」

「漣06」は、舵の故障で操舵不能となり、そのまま未確認の岩礁に座礁してしまった。

「参ったな。まさか本当に座礁するとは。とにかく、汽笛を鳴らし続ける。電子機器はどうだ?」

「未だ復旧せずです。」

部下からの報告に、櫂村船長は舌打ちする。

「チツ! 浸水してないからいいが・・・船を捨てるにしてもこの嵐じゃ脱出も危険だしな。」

荒い波の中で救命艇を出すのは危険であった。もちろん、どうしても船が沈む場合は仕方が無いが、今の所船を捨てる必要は無く、加えてボートを降ろしても岩礁に叩きつけられるのが落ちであろう。

「船長!」

「何だ!?!まさかどこか浸水したか?」

「いいえ、10時方向に灯火を確認!!」

「10時・・・さつき見た陸地の方向だな。車か家の灯か？」

「いいえ、かなり小さな光です。あ！点滅しています。信号のよう  
です！」

「読めるか？」

「ダメです。そこまでは無理です。しかし、発光信号であるのは間違いないようです。」

「うーん。よし。取り敢えずこっちも信号を返しておけ。」

「答えた!!」

彼方が嬉しそうな声を上げる。彼女が聞き取ったほんの僅かな汽笛らしい音。それを信じてフィリシアはその方角に発光信号を行ってみた。すると、暗い海上から確かに光の点滅が帰ってきた。

「返事はしたけど、ダメね。内容までは読めないわ。」

「それにしても、一体誰なんでしょうか？今時海に出ているなんて？」

暮羽が首を傾げた。彼女にとって、海とは生命のない死の世界でしかなかった。そんな海に、こんな嵐の中一体誰が出ているのかさっぱり理解できなかった。

「さあな。取り敢えず、私と彼方がここに残って監視する。フィリシアたちは、一旦砦に戻って救助に必要な資材を取って来てくれ。」

梨旺がそう提案すると、フィリシアも頷いた。

「わかったわ。」

こうして、フィリシアと暮羽、乃絵留とナオミの4人はタケミカヅチで砦へと戻り、残る2人は沖合いの光点を出した物体を監視することとなった。

座礁してから数時間後、嵐は去ったのか急速に雨風共に収まっていた。それと共に電子機器も次々と復旧した。

「ただちに南東管区司令部、自治海軍司令部に救助要請。それから現在位置と大陸発見の報を送れ。やれやれ、どうやら我々が第一発見者のようだな。」

「これからどうするんですか？」

スレイ中尉が訪ねる。

「うーん。迂闊に上陸するのは危険だしな。取り敢えず本国政府の

指示を待とう。もっとも、それを待っている暇はなさそうだがな。」

彼はようやく朝日が差し込み、その姿が見え始めた大陸の方を眺める。そしてその海岸線には、明らかに人の姿が確認できた。時折こちらに信号を送ってくるのがわかる。

「向こうの方から先に乗り込んでくるかもしれない。」

彼の言葉通り、1時間ほどして海岸に現われた多脚戦車から降ろされたボートを、数人が必死に漕いで向かってくるのが確認できた。

「あと少しだ。がんばれよ。」

「」「はい！」「」

急遽調査に加わったオートバイ兵のクラウド中佐の声に、若い3人が反応する。

「それにしても、まさか海に漕ぎ出すことになるとは思わなかった。」

「あと少しよ。」

ボートは目標の船までもう少しと言っ所まで来ていた。

「それにしても、どこの船かしらね？」

「さあな。少なくとも、俺が知る限りあんな旗は使っている国は知らない。」

目標の船には、船首の竿に白地に赤の国旗が掲げられていた。一番年長のクラウスでさえ、そんな旗の国や組織は知らなかった。

と、そこで彼方が気づいた。

「あ！誰かいますよ！」

「何！？」「」

クラウスと梨旺が銃に手をかける。しかし、それは杞憂に終わる。まもなく戦場で白旗を降る人間の姿が確認できたからだ。

「どうやら戦う意志はなさそうね。」

そして、間もなく彼女らの頭上に声が掛けられる。

「おーい！こちらの言葉が分かりますか！？」

それは彼女らにも、明確に理解できる言葉、少なくともヘルベチア語にしか聞こえない言葉だった。それに対してフィリシアが答える。

「はい！わかります！！」

「なら良かった。話し合いがしたいので、船の後ろに回ってください。そこにタラップを降ろしますから。ただ、岩礁にぶつけない様に気をつけてください。」

フィリシアたちは、言われたとおりに船の後ろに回った。確かにそこにはタラップが降ろされていた。一方で、突き出した岩礁も見えるので、クラウスの指揮の元注意して進んだ。そして、無事にタラップの下についた。

「お前たちは先に行け、俺は船を括り付けておく。念のため武器は持っていていけよ。」

「はい！」

「それじゃあ、お先にいきますねクラウスさん。」

「おう、気をつけて行けよ彼方。」

そしてフィリシアを先頭にして、彼方たちはタラップを上がった。

一行が甲板に上がると、そこでは数人の男が彼女らを出迎えた。その中の1人が前に出て敬礼した。

「ようこそ、本船へ。船長の榎村です。」

「ヘルベチア共和国陸軍大尉、フィリシア・ハイデマンです。」

すると、榎村は複雑そうな表情をした。

「どうかされましたか？」

「いえ、なんでも。本船は日本国海上警備機構所属、警備船「漣06」です。皆様を歓迎いたします。」

「ニホンコク？」

「その事に関して説明します。どうぞ、こちらへ。」

そう言つと、榎村は彼女らを案内した。

ヘルペチア転移編 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

## ヘルベチア転移編 2

2日目 ヘルベチア共和国近海 日本海上警備機構警備船「漣06」

「漣06」の船長である榎村三等警備正は、乗り込んだ軍服姿の少女たちと、彼女らの言葉に多少驚きはしたものの、既に彼らが新たな転移者とわかっているだけに、表面上は冷静であった。

彼は挨拶を終えると、彼女らを船内の食堂へと案内した。多人数で話し合える場所はそこ位であったからだ。それに対して、フィリシアは武器の携帯許可を要求し、榎村はそれを認めて合意に達する。

それから間もなくボートを縛り付けたクラウス中佐が合流し、6人のヘルベチアの軍人たちは船長の提案に従い、船内の食堂へと案内された。

船内に入る前から、6人は船に対して並々ならぬ興味を持っていたが、乗り込んで乗員と出会い、船内へと入ったことで、その興味はより大きな物となった。

「これって、イディア文字だよね!？」

彼方が船内の至るところに使われている文字を見ながら言った。イディア文字とは、ヘルベチア共和国内で使われている古代文字のことだ。ただし、名前を書くとき等に使われているが、公用語ではない。読めるのは研究者や宗教関係者位だ。

そのイディア文字がそこら中にあり、自分たちが見慣れたヘルベチア語の文字が全く無ければ、興味を覚えない方がおかしい。

さらに、小隊長のフィリシアが天井を見て言う。

「灯もランプじゃないわね。」

ヘルベチア共和国の灯の主流はランプだ。電灯などは主に軍内部の一部で使われているに過ぎない。

「タケミカツチと同じ雰囲気がある。」

無口な乃絵留がそんなことを口にした。タケミカツチとは、彼女らの小隊に配備されている多脚歩行戦車で、国に10台と残っていない旧時代の遺物である。かつて人類が科学技術によって繁栄を極めた時代の物で、使われている技術はオーバーテクノロジーばかりだ。

そんな戦車を見事復元させたのが乃絵留で、アカデミーにおいて100年に一度の天才と言われた彼女の非凡さを持っていることを、如実に示していると言える。

そして彼女が言ったタケミカツチと同じにおいがあるということ、この船がオーバーテクノロジーで出来ていると言うことを意味する。

「全く訳がわからない。ノーマーズラントが海になったと思ったら、見たことの無い国の船が現われる。一体どうなっているんだ？」

「とにかく、向こうの話を聞いてみましょう。考えるのはそれからでも良いんじゃない？」

梨旺の愚痴めいた疑問に、フィリシアはそう言って宥めた。

「そうだな。」

ヘルベチア軍の6人は、樫村と「漣06」の乗員2人、そしてサクラス帝国のマーレス中尉と相對する形で着席させられた。

「改めまして。本船「漣06」へようこそ。船長の日本海上警備機構樫村明人三等警備正です。」

「副長の森永一義一等警備士です。」

「頸城恵二三等警備士です。」

「サクラス帝国海軍中尉のマーレス・スレイです。」

樫村は42、森永は36、頸城は21、そしてマーレスは26である。

「漣06」側の挨拶が終わると、交代する形でヘルベチア側の挨拶がスタートする。

「ヘルベチア共和国軍、第23通信隊所属のクラウス・コンラート中佐です。」

「同じく、ヘルベチア共和国軍、第1121小隊隊長のフィリシア・ハイデマン大尉です。」

「第1121小隊所属、和宮梨旺少尉です。」

「同じく、第1121小隊所属、墨埜谷 暮羽一等兵です。」

「同じく、第1121小隊所属の空深彼方一等兵です。」

「寒風 乃絵留曹長です……」

こうして一同は挨拶を終えた。ちなみに乃絵留が階級が下の2人よりも後に官姓名を申告したのは、本人が一番最後の位置に座ったからだ。

「それでは、クラウド中佐。早速ですが、ここがどこなのか教えてもらいたい?」

まず檉村が話し合いの口火を切った。

「ここはヘルベチア共和国の国境に程近い街、セーズ郊外です。我々の知る限りでは、ここに海がある筈が無いのですが……」

「では、日本、トリステイン、ロクシアーク連邦、サクラス帝国、ロシア……東ロシア帝国。この中で聞き覚えのある国はありますか?」

「いいえ、ありません。」

クラウドは首を振った。

「では、今年は何年ですか?」

「今年はヘルベチア暦110年ですが？」

その言葉に、榎村らは顔を見合わせる。

「やはり、また別の世界からの転移でしょうか？」

森永が口にした言葉を、榎村が肯定する。

「だろうな。ヘルベチアなんて国地球にはなかったし、マーレス中尉も知らんよな？」

「ええ、聞いたことがありません。もしかしたら、西大陸にあったかもしれないが、自分は存じておりません。」

すると、頸城が発言する。

「多次元宇宙が実証された現在、さらに別世界があってもおかしくありませんよ船長。」

「うーん……」

そんな風に日本側のメンバーが勝手に話を進めるが、もちろんクラウスらにはさっぱり理解できない。

「あの、話を進めたいのですが？」

「ああ、失礼クラウス中佐。」

するとフィリシアが口を開いた。

「一体あなた方は何者なんです？日本と言う国は聞いたことがありますし、あなた方が言っていることの意味もさっぱり理解できません。」

「申し訳ない。それではまず、我が国について地図を用いて説明しましょう。」

檉村は現在世界標準となっている地図を持ってこさせた。最初の転移の半年後の国際会議で各国共通となった転移暦2年の最新版の地図である。

衛星からのデータを元に製図されたそれには日本を中心にその南に浮かぶ小さな王国であるトリステイン、さらに南にあるアルカディア自治区（旧 諸島）、日本から見て西にあるロクシアーヌク連邦とサクラス帝国を擁する2大陸、そして1年前に現われた日本の東側に現われたロシア帝国が描かれている。

もちろん、ヘルベチアは描かれておらず、ヘルベチア人である6人も見たことの無い物だ。

「これが我が国、日本です。そしてこちらの大陸が、今回研修として乗り込んでいるマーレス中尉の故郷サクラス帝国です。我々は国境警備任務のためアルカディア自治区にある南東管区司令部を出港、その後荒天に遭い現在位置で座礁しました。本来なら我々はこの辺りにいるはずです。」

そう言つと、彼は大海原をしめす青い部分を指でグルグルと回した。

「しかし、こんな地図は見たことありません。」

フィリシアが怪訝な目で榎村を見る。

「それはそうでしょうね。昨日まであなた方の国はなかったはずですから。しかし、それを言えば我々も同じなのです。」

「それはどういことですか？」

クラウドが尋ねる。

すると、榎村はかつて自分たちの身の上で起きた転移について話し始めた。最初の転移現象によって、もはや多次元宇宙論の存在は確実なものとなっている。

しかしながら、そのメカニズムは未だ不明であり、いつどのようにして起きるかは全く把握できない。1年前に新しい国が現われたが、その時も忽然とという言葉通りに現われている。

「つまり、私たちも同じように異世界に飛ばされた……」

頭の良い乃絵留が真っ先に理解し、口に出した。

「その可能性が高い。」

しかしそれに対して暮羽が反論した。

「そんなこと信じられないわ！」

すると、梨旺が頷いた。

「私も同意見だ。あなた方が嘘を言っている可能性もあるし、もしかしたら我々ではなくあなた方が現れたと言う可能性もある。何か、確実な証拠が欲しい。我々が異世界に、あなた方のいる世界に現われてしまったと言う確実な証拠が。」

梨旺は軍人としては単なる少尉に過ぎない。しかしながら、彼女にはヘルベチア共和国大公家の娘であり、継承権第一位という姫様としての顔もある。決して無能ではないし、政治などの話にも理解がある。

「それは最もな話ですね。頸城警備士、その点に関して何か意見はあるか？」

「はい。無線が回復すれば確実な物になります。無線が回復し、本国、もしくは南東管区司令部や自治海軍司令部などと連絡が取れれば、我々は元からいた世界に存在し続けていることを証明できます。逆に回復せず、一切の無線連絡が取れない、もしくは取れても我々の知る組織との間に出来なければ我々は少なくとも別の世界にいることになります。」

「なるほど。さすがは船内1のオタクだけあるな。まあ、そう言うわけで我々は本国との無線連絡を試みていますので、今しばらく待つて欲しいとしか言いようが無い。もちろん、我々はあなた方と敵対する意志は全く無いので御安心なく。・・・話続けると咽が渴くな。皆様も何か飲みますか？緑茶、コーヒー、紅茶、ジュースがあります。そうした飲み物はそちらにも存在しますか？」

「ええ、あります。では、私はコーヒーをお願いします。」

「じゃあ、私は紅茶で。」

「私もフィリシアと同じもので。」

「じゃ、私はジュースを。」

「私も。」

「・・・私は緑茶で。」

6人がそれぞれに注文し、さらに「漣06」の4人もそれぞれに飲み物を厨房に注文した。間もなく、まずカップに注がれたコーヒ―と紅茶、さらに湯飲みに注がれた緑茶が出てきた。

ところが、ジュースは缶の物が出されたのだが、それをみた暮羽と彼方は呆然としてしまう。他の4人も驚いている。

「あの、これどうやって飲むんですか？」

暮羽はあれやこれやと缶を開けようと手で持ってあちこち触っているが、彼方は正直に質問した。

「こつやるんです。」

同じく缶ジュースを注文した頸城がプルトップ式の缶を開けるのを見せる。

「すごい！」

彼方が素直に感嘆の声を上げる。

「そこまで褒められる物じゃないよ。」

と言いながら、頸城は少女に褒められて満更でもなさそうだった。

とにかく、一同はそれぞれの飲み物に口をつけ、束の間ではあるが和む。

しかしその時間は本当に束の間であった。間もなく無線室から船員が連絡にやって来た。

「船長、南東管区司令部と自治海軍司令部に連絡がつかしました。電子機器も逐次復旧中です。」

「そうか。で、救援要請はどうなった？」

「はい。近海にて演習中のロシア帝国駆逐艦「スタールイ」と自治海軍所属のフリゲート8号、そして海上自衛隊所属のフリゲート「対馬」が急行中とのこと。この内「スタールイ」が3時間ほどで到着の見込み。」

「ようし、相手にわかるよう救難信号を発進し続ける。それから曳航の受け入れ準備だ。」

「船長、それから日本への連絡も。電子機器が復活したなら、衛星電話が使えます。」

頸城が意見をする。

「おお、そうだった。すぐにそれもやれ！」

こうして「漣06」は動き始めた。

もっとも、客人であるヘルベチア軍の6人は急速に命令が飛ぶ船内の様子を見ているしかなかったのだが。

ヘルペチア転移編 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

### ヘルベチア転移編 3

2日目 ヘルベチア共和国近海・日本国海上警備機構警備船「漣06」

救助船が来るまでまだ時間がある。その間に、樫村船長は乗り込んできたヘルベチアの6人に色々な物を見せて、自分たちが異世界人であることを証明しようとした。

船内には調度品や船員の私物として様々な物品が積まれている。それらを見せてることで、彼らに理解を求めようとしたわけだ。

この方法は上手く行った。何故なら船内にある調度品のほとんどが、彼女らにとって驚きの物ばかりであったからだ。

「この黒い板のような物はなんですか？」

食堂に置かれたプラズマテレビに、フィリシアが興味を持って乗員に質問する。

「それはテレビです。映像を映し出す機械です。」

乗員が電源を入れると、衛星放送が受信されて映像が映し出された。

「「「おお！！」「」」

若い暮羽や彼方が感嘆の声を挙げる。

「では、こっちの箱みたいなのはなんですか？」

「それはCDコンポです。音楽を聴いたりするのに使います。」

「音楽！？どんな音楽ですか？」

今度は音楽に人一倍興味がある彼方が食いついた。彼女、軍隊への入隊理由がそもそも音楽を習うためという一風変わった経歴を持つ。これはヘルベチア共和国において、音楽を習えるのが軍隊からいな物だからだ。

「うーん、そうだね。船員たちが色々持ち込んでいるからな・・・クラシックもあればポップもあるし。ロクシエやサクラスの音楽もあるからね。」

この側コンポの側に置かれたCDをあさりながら、船員が答える。

「その円盤で再生するの？」

乃絵留がCDに目を向けながら、疑問を口にする。

「うん？そうだよ。よくわかったね。」

「タケミカツチにも同じような物があったから。」

「ふーん。それじゃあ、1曲掛けてみようか。」

船員がCDを一枚ケースから出して、コンポにセットして再生した。スピーカーから音楽が流れ始める。

「目と目が逢う、瞬間好きだと気づいた。あなたは今どんな気持ちでいるの。」

流れ始めたのは、アイドルが歌うポップだった。

「うわあ、すごい。」

彼方が目を輝かせる。

「聞いたことも無いメロディ。それにどんな楽器使ってるんだろう?」

「あー、ちょっと音楽についてはあまり知らないからね。俺にはわからないや。多分キーボードとかドラムを使っているんだろうけど。」

「キーボード?ドラム?」

聞き覚えの無い楽器の名前を聞き、彼方が首をかしげる。

「その内多分わかるよ。」

「それで、これ歌っている人はやっぱり軍人なんですか?」

彼方のセリフに、船員はもちろん驚き、啞然としてしまう。どうしてそんな質問を彼女がしたのか理解することができなかった。

「何で軍人が歌を歌うことになるの!？」

「え!?!だって、音楽を習えるのは軍隊だけじゃないんですか?」

「お嬢ちゃんの国じゃそうなのかい？我が国、日本もそうだけどロクシェヤサクラス、ロシアも音楽や歌は軍隊以外でも学べるよ。むしろ、軍隊で学ぶ方が珍しい。そりゃ軍隊はあるけど、規模なんて小さいからね。」

「ええ！？じゃあ軍隊じゃなくても音楽が学べるんですか？一体どうやって？」

「どうやって、まず普通に初歩的なものは学校で習うよ。まあ、それで食っていきこうと思ったら専門の学校へ行くか、何年も自分で練習するだけだね。」

そんな2人の会話を、クラウス、フィリシア、梨旺は興味深げに聞いていた。

「どうやら日本と言う国は、我が国とは全く違うようだな。」

「おまけに技術力も凄いいみたいだな。」

「中佐の言うとおりですね。この船にある物はタケミカツチで見たような、まるで旧時代の話に出てくるような物ばかりです。もしそんな国が我が国の近くに現われたとなれば、大問題です。しかも、彼らの話を聞く限りじゃ、1国だけではないようですし。」

「フィリシアの言うとおりだ。一刻も早く、このことを首都に知らせるべきだ。」

「そうですね。しかし、全員戻ってしまうのも問題です。」

「同感だ。危険だが監視役が必要だ。」

「じゃあ少佐と私、それに暮羽ちゃんを基地に戻って連絡しましょう。梨旺は彼方ちゃんと乃絵留ちゃんと一緒にこの船に残って。」

「わかった。一応聞いておくが、どうしてそんな人選に？」

「梨旺なら交渉とかそういうの得意でしょ？乃絵留ちゃんは機械に強いわ。そして彼方ちゃんは、どんな人とも仲良く出来そうだしね。」

彼女は船員と仲良くお喋りしている彼方を一瞥した。

「そうだな。それじゃあ中佐、そしてフィリシア。よろしく頼みます。」

「梨旺も気をつけるよ。はっきりいって危険がないとは限らんし、それにお前は……」

「おっと中佐、それ以上は無しにしましょう。私は一軍人、和宮梨旺少尉なんですから。」

「ふ……お前らしいな。じゃあ、よろしく頼むぞ。」

「了解！」

この15分後、クラウド、フィリシア、そして暮羽の3人は再びボートを漕いで陸地へと戻って行った。樫村船長は搭載してある内火艇の使用を勧めたが、フィリシアらは敢えてそれを辞退した。

それから3時間ほどの間特に動きはなく、船員もそして乗り込んでいる彼方たちも特にやることはなかった。

梨旺は日本人が自分たちを監禁したりするなどの強硬手段にでも訴えはしないかと警戒していたが、それは結局の所杞憂だった。まあ、さすがに女性であり既に体格的にも大人である彼女に、卑猥な視線を向けて来る者がいないことはなかったが、彼女はそれを無視した。

そんな彼女の気苦労を他所に、部下である彼方と乃絵留の2人は船内食堂で、船員たちに誘われてトランプに熱中していた。

「まったく、お気楽な奴らだ。ま、それがあいつらの持ち味でもあるがな。」

部屋の隅に1人たつ彼女に、ある人物が声を掛けた。サクララス帝国のスレイ中尉だった。

「あなたはあの中に入らないんですか？」

「え？ええ。私は最上位者としての責任がありますから。そう言うあなたはどうなんです？」

「私もちょっと今は入りにくくて・・・コーヒーでもどうですか？」

スレイがコーヒーメーカーを手に持って言う。自分で飲むつもりでいた所で、彼女に勧める。

「じゃあ、一杯下さい。」

スレイは2つのカップにコーヒーを注ぎ、一つを梨旺に渡した。梨旺はそのカップをジッと眺める。

「どうかしました?」

「え!?!いや、別に。」

「……なるほど。警戒は怠っていないと言ったことですか。」

「まあ、誰でもそうなるでしょうね。私も彼らと最初に出会ったばかりの時は驚きの連続でしたし、不信感を持つ人間もそれなりにいましたからね。まあ、それはお互い様なんでしょうが。」

「そう言えば、あなたは日本人では……」

「ええ、サクラス帝国海軍所属です。もともと、出来てから1年半しか経っていない新しい軍隊で、今は日本やロクシエに人を派遣して人材を育てている所です。」

「異世界か……本当に信じられない。」

「最初はそうでしょうが、後で嫌と言うほど認識することとなりますよ。私たちはそうやってこの世界で突然出会い、共生することになったんですから。あなたの国も、いずれ難しい舵取りを行うことになるでしょうね。」

「……」

何か思うところがあるのか、梨旺は黙り込んでしまった。

「和宮少尉？」

「あ、すまない。とっと考え事をしていて。」

「!？」

と、その時船内スピーカーが鳴った。

「漣06」の救援へ一番乗りしたのはロシア海軍の駆逐艦「スタールイ」だった。

「これでようやく離礁出来るな。」

ブリッジからその姿を確認した榎村船長が、双眼鏡を降ろすと呟いた。

「だが、問題はここからか。」

その頃、食堂にいた梨旺や彼方たちも乗員たちに混じって甲板上へと現われていた。

「あれは？」

「双頭鷲の紋章に青い十字の旗。ロシア帝国海軍の駆逐艦ですね。」

近づいてきた艦影を見ながら、スレイが呟いた。

「ニホンの船ではないということですか？」

梨旺の質問に、スレイが頷く。

「ロシア帝国はここから見て遙か北にある国です。しかしながら、その海軍力はあなどれません。旧式ですが、戦艦と空母を多数保有し、ハワイ王国海軍と合わせて数の上では日本の海上自衛隊を圧倒していますから。」

梨旺は彼の言葉を聞いて、理解できない部分も多々あったが、取り合えずそのロシア帝国が凄い国であることは理解できた。

（我が国は、ローマを相手にするよりも厄介なことに巻き込まれたかもしれない。）

一方、部下の彼方は別の意味で驚いていた。

「大きな船ですね。この船よりも大きいですね。」

すると近くの船員が笑った。

「あれくらいで驚いちゃいけないよ嬢ちゃん。あれは駆逐艦で言つて、軍艦では小さい部類にはいるんだ。もっと大きな船だと、この船の60倍近い大きさがあるんだぞ。」

「ええ!？」

海上警備機構の巡視船は全長80mの排水量1200tで、76mm速射砲やCIWS、対潜魚雷を搭載しているが、あくまで主任

務は漁業監視や国境警備であり、遠洋航行能力は高い設計だが大きな船は少ない。

ただ彼方は海も船も今日まで見たことがなかったから、目の前の駆逐艦さえ大きく感じていた。

「あれよりももっと大きな船があるんですか？」

「ああ、日本やロシア、ロクシエもサクラスも持っているぞ。」

「へええ。」

彼女の見ている前で、駆逐艦は停船した。そして艦上で乗員が慌しく動き回っているのが見える。

「ロシア駆逐艦より内火艇が来る。乗員は受け入れの準備をなせ。」

スピーカーから命令が流れると、集まっていた乗員が一斉に動いた。

「それでは、私はこれで。」

スレイも走って行ってしまった。

「皆さんはこちらへ。」

別の船員が3人に言うが、梨旺が質問を口にした。

「あの、私たちはここにはいけませんか？」

「え!?!」

「ですから、あの船から来る人間を見たいのですが?」

「……ちよつとお待ちを。」

船員は一目散にブリッジへと走って行った。

「先輩?」

彼方が怪訝な表情をする。

「お前たちだつて見たいだろ、あの船にどんな人間が乗っているか。」

「……ハイ!」

「……うん。」

5分後、先ほどの船員が戻ってきた。

「いいですよ。船長は是非とも会って欲しいそうです。つきましてくちらへお願いします。」

「了解です。行くぞ、2人とも。」

「「ハイ!!!」」

それからさらに5分ほどして、ロシア駆逐艦から内火艇が来て、数名の男が「漣06」に乗り移った。

「救援感謝いたします。日本国海上警備機構警備船「漣06」船長の榎村三等警備正です。」

榎村船長に敬礼に、カイゼル髭を蓄えた士官が答礼する。

「ロシア帝国海軍、南方派遣部隊司令官の木村昌福少将だ。貴艦の救助要請を受け参った。」

ヘルペチア転移編 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

## ヘルベチア転移編 4

2日目 ヘルベチア共和国近海 日本海上警備機構 警備船「漣06」

やって来た黒を基調とした制服のロシア海軍将官に、榎村船長も答礼する。

「漣06」船長の榎村明人三等警備正です。救援感謝致します。それと、御高名なる木村閣下自らの来訪、心から歓迎致します」

榎村の言葉に、木村少将はカイゼル髭に手をやりながら笑った。

「なあに、高名とは言ってもそれは君たちの世界での私であろう。私は私だ。大した男ではないよ」

「御謙遜を。確かに、あなたはキスカの奇跡を成し遂げた訳ではありませんが、前の世界におけるソビエト海軍相手の戦いで御活躍は、我が日本海上警備機構内にも響いております」

「あんなアカの海軍や陸上砲台に勝利した戦いなど、勝った内に入らんよ。全く、伊藤大将や山口中将の苦勞がわかるよ・・・」

2人が話す様子を見ていた梨旺は、近くにいた森永副長に尋ねた。

「あの2人は一体何を話しているんですか？木村と言う將軍はそんなに有名なんですか？」

「うーん・・・かなりややこしい話になりますけど、あの木村少将

は70年以上前の戦争で活躍した、我が国の海軍司令官の1人なんです。」

「はあ？70年前？」

70年前の人間が生きているなど、信じられなかった。それに加えて、今森永は我が国と言ったが、木村少将は日本とは別の国であるロシア海軍の船に乗っていた。梨旺にしてみれば、全く訳がわからない。

「驚いて当然ですね。さっきの船長との話で、この世界は色々な世界から転移してきた国々の集まりだって言いましたよね。ロシア帝国もその内の一つです。それで、そのロシア帝国と言う国は・・・」

梨旺は森永副長から、より詳しくロシア帝国と日本の関係について聞くことが出来た。

それによれば、ロシア帝国が以前存在していた世界は、日本と同じ世界の70年ほど前の時代（西暦1940年代）であったそうだ。つまり、日本から見れば過去の時代からこの世界に飛ばされてきたそうだ。

そして、ロシア帝国では日本から多くの軍人を傭兵や移民として受け入れており、木村は日本海軍からロシア海軍に移籍した一人だったと言う。

「ただし、ロシア帝国時代は今の日本の過去から来たわけではありません。私たちの暮らしている今の日本の歴史では、ロシア帝国はもっと前に崩壊しています。ですから、我々の過去に良く似た世界からやって来たと言うことなです。ですから、実際には我々の世界

の過去の戦争で活躍した木村將軍と、あそこにいる木村將軍は、似て異なる存在なんです。わかりました？」

「はー。なんとなくは。」

とは言ったが、実際の所梨旺にはほとんど理解できていなかった。そもそもいくつも世界があるということ時代、彼女の脳裏では想像し難いことであった。

「まあ、理解するには時間が掛かるでしょうね。」

「おい副長！」

「おっと、船長が呼んでいますので失礼します。」

檜村に呼ばれて、森永は行ってしまった。

「あの先輩、一体何の話を？」

彼方が聞いてくるが、梨旺はその間に明確な答えを見いだせれなかった。

「何と言えば良いのか、私にもわからん。」

「はあ？」

そんな感じで2人が困惑している所に、声が掛けられる。

「おい！君たち！」

「あ、はい！行くぞ、彼方。乃絵留。」

「はい。」

「うん。」

3人は檜村の所へと出る。

「木村少将。紹介いたします。ヘルベチア共和国軍、第1121小隊の皆さんです。」

すぐに梨旺は木村に向かって敬礼し、彼方と乃絵留もそれに続く。

「第1121小隊所属の和宮梨旺少尉です！」

「同じく、空深彼方一等兵です！」

「・・・寒風乃絵留軍曹です。」

「うむ。木村少将だ。君達が、今回発見された国の軍人が・・・これより我々はこの船の離礁作業に入る。その後の行動はまだ決まっていないが、おそらく貴国政府とコンタクトを取ることとなるだろう。君たちにはその際、是非とも手助けを願いたい。」

「確実なお約束は出来ませんが、善処いたします。」

「よろしく頼むよ。・・・おや？空深一等兵だったな？君はラツパ兵か？」

木村が彼方の腰にぶら下がっている、軍用ラツパを見ながら尋ね

た。

「えー？あ、はい！そうであります！」

「そうかそうか。家の艦のラッパ兵とどっちが上手いかな？」

「え？それは・・・」

「もちろん、彼方に決まっています。」

口をつぐんだ彼方に変わって、梨旺が答えた。

「そうかね・・・それにしても、若いな。今幾つかな？」

「16です。」

「ほう。うちの少年兵と同じ位か・・・がんばりたまえよ。」

「はい！ありがとうございます。」

「うむ。ああ、話を元に戻すが。作業を開始するので、君たちには一旦この船を離れてもらいたい。陸地に戻るなら、家の船から内火艇かカッターを出そう。」

「ありがとうございます、少将閣下。しかしながら、私たちは仲間が戻るまで、あなた方の監視をすることが任務です。離れるわけにはいきません。」

「君は中々芯のある軍人のようだな。よろしい、さすがにこの船は作業を行うのは危険だから、私の艦に移りたまえ。もちろん、君た

ちの任務を妨害する気はないし、客人として遇しよう。」

「お心遣い感謝します。では、そうさせていただきます・・・榎村船長、そう言うわけなので。我々はあちらの船に移ります。短い時間でしたが、お世話になりました。」

「ああ。こっちこそ、楽しかったよ。」

榎村が敬礼をする。すかさず、梨旺たちも答礼した。

「それでは、下の内火艇に乗りたまえ。」

「はい!!!」

2時間後、満潮の時刻に合わせて、ロープで「スタールイ」と繋がれた「漣06」は、「スタールイ」に引っ張られ、何とか離礁した。

直に浸水が無いか確認が取られたが、「漣06」からは若干の浸水があるものの、航行には差し支えなしという報告が「スタールイ」に送られ、同艦の乗員をホツとさせた。

その一連の様子を、梨旺たちは「スタールイ」の甲板上から眺めていた。

「案外早く終わったな。」

「・・・うん。」

「て、彼方はまだ戻ってこないのか？」

「……うん。」

「全く、どこへ行っても気楽な奴だよな、あいつは。」

彼方は木村の案内で、「スタールイ」のラツパ兵と会っている。そのため、今は梨旺と乃絵留しかいなかった。

と、梨旺が言っていた頃、彼方と言えば。

「へえ、じゃあロシアでも軍隊以外で音楽が学べるんですか？」

「ああ、首都のノーヴァ・サントペテルブルクをはじめとして、主要な都市には1校位は音楽学校があるから。」

「いいなあ。」

木村少将から宛がわれた部屋で、「スタールイ」のラツパ兵たちとラツパや音楽に関する話で盛り上がっていた。

「でも、やっぱり今の日本の方がすごいよな。」

日系水兵が言うと、ロシア人水兵も頷く。

「だよなあ。公立の学校に加えて専門学校も多い筈だし。留学する奴も最近随分と増えたし。さすが未来の国だよ。俺も補給のために横須賀に寄った時、一度だけ東京と横浜を見たけど、スゴイもんだっただぜ。」

「日本……さっきの船の国ですよね？」

「ああ。この世界じゃもっとも進んでいる国だよ。」

「日本……」

彼方は、まだ見ぬ遠い異国に思いを馳せていた。

同時刻 日本・東京首相官邸

1人の少女が未知の国への憧れを募らせている頃、その国のトップに立つ男は、早朝にもたらされた情報の続報に注視していた。

「それで、そのヘルベチア共和国に関しての続報はないのか？」

「今の所は。先ほど、ロシア駆逐艦による警備船の救助作業が始まったと言うこと以外、何も入ってません。」

「そうか……」

コンコン！

「入ってくれ。」

「失礼します。首相、JAXAから衛星の写真が届きました。」

入ってきたのは文部科学相だった。

「お、御苦労。」

春川首相は渡された封筒の封を開けた。

「1枚目は1週間前に撮影された写真。2枚目は先ほど撮影された物です。」

1枚目の写真には、碧く広がる大海原だけが広がっている。それに対して、2枚目には大陸が映し出されていた。

「どうやら間違いないようだな。」

「ですね。一年半前の東ロシア帝国とハワイ王国以来ですね。」

「本当にまた唐突に現われたもんだな。予兆は何も掴めなかったんだろ?」

「はい。何も。転移の原理は、一行にわからんようです。」

「やれやれ。せめて現われる予兆くらい掴めれば、こうもアタフタすることはないんだけどな。」

「それでも、前回よりは素早く対応できていますよ。」

「ありがとう小泉。正式に確認が取れたからには、記者発表の必要があるな。それから、臨時の閣議も。」

「既に準備は整っています。それから、各国首脳にも伝えておくべきだと思いますよ。」

小泉副首相が笑みを浮かべて答える。

「こいつ・・・よろしい。文科大臣、そう言うわけだ。記者会見はそっちで行ってくれ。俺はこれから各国首脳に連絡する。臨時閣議のスタートは、そうだな・・・他の閣僚も準備するのに時間は必要だろうから、1時間後にしよう。」

「わかりました。失礼します。」

文科大臣は執務室から退室した。

「さてと、それじゃあ電話しますか。まずはロシアだな・・・前回散々困った国に、最初に掛けなきゃいけないとはな。」

「仕方がありませんよ、キョンさん。現場に逸早く駆けつけたのは、あの国の艦艇なんですから。」

「わかってるよ。その次にサクラスだな。農水大臣の話じゃ、「連06」にはサクラスからの留学生が乗っているらしいからな。んでトリストインのヴァリエール首相。そして、最後にロクシエのクラーク大統領かな。」

「自治領にも伝える必要がありますね。」

「ああ、そうだな。はあ・・・ロシアのスカルスキー首相は苦手なんだよな。同じ日本人のヒロセ侍従長の方がまだ話し易いのに。」

「愚痴を言っても仕方がありませんよ。スカルスキー首相が終われば、後は話し易い人ばかりじゃないですか？」

「だな。けど、メイベル首相は一步間違えると長話に付き合わされるから要注意だな。」

「ですね。」

「と、あんまり時間は無かったんだ。じゃ、掛けるとしますか。」

春川は執務机の上にある電話機に手をやり、受話器を取った。

ヘルペチア転移編 4 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

新たに現われたヘルベチア共和国は、各国に大きな衝撃をもたらした。それは同国の歴史が、科学の発展した旧時代が戦争によって急速に衰退し、海は汚染されて生き物の住めない死の世界となり、人種も文化も滅茶苦茶になってしまったと言う、これまでにない極めて異例の物だったからだ。

もつとも、驚きこそすれ排斥や侵略の対象にするなどという考えは、各国の代表者には毛頭無かった。むしろ、この新参者に対して如何に接していくかと言う意見で、日本の春川首相をはじめとした全ての首脳陣はまとまった。

既にこうした経験を得ていた日本やロクシエ、サクラス、トリステイン、また彼らより経験的に乏しいものの優秀な政治家に恵まれていたロシア帝国は、ヘルベチア共和国に対して早々と国交の樹立と、国際共同体への参加を呼びかけた。

対して、ヘルベチア共和国側は軍部の一部強硬派が動いたものの、元首である大公が友好関係樹立を強く望んだこともあり、最終的に日本をはじめとする各国の提案を丸々呑むこととなった。

これには、大公の娘である和宮梨旺の意見具申が大きく貢献したとされている。

こうして、ヘルベチア共和国は転移3ヵ月後に、正式に新世界における国際的な地位を確立した。もつとも、それは同国にとって新たな戦いの幕開けであった。

ヘルベチア共和国は、かつての人類が科学全盛の時代に作られた産物を細々と使っているに過ぎず、それを再開発する技術力はほぼ皆無であった。日本の調査によれば、第二次大戦前後の科学力しかもっておらず、航空技術と海洋技術、さらに電子技術に至っては消滅していた。

そのため、ヘルベチア共和国はこうした技術を一から学びなおさねばならなかった。彼らがその教えを請うべき相手としたのは、やはりこの世界でもっとも科学技術が進んでいる日本であった。

3日目 日本 東京練馬区 朝霞駐屯地

日本の首都である東京郊外に広がる陸上自衛隊朝霞駐屯地。この基地には様々な部隊が駐屯すると共に、陸上自衛隊の広報センターもある。そして同基地には、防衛大臣直轄部隊の一つである中央音楽隊も駐屯している。陸上自衛隊中央音楽隊には音楽科要員教育のために、教育科が設けられており、今日も隊員の教育が行われていた。

その教育を受けている中にたった1人ではあるが、ヘルベチア陸軍の制服を着ている空深彼方の姿があった。

「よし、次は空深彼方上等兵、吹いてみる！」

「はい！」

陸上自衛隊の教官の言葉を受け、彼方は立ち上がり、梨旺からプレゼントされたトランペットを両手で構える。そしてマウスピース

に口を付けると、吹き始めた。部屋の中に、彼方の吹くトランペットの音が響く。

「よし！まだまだ荒いが、始めてから3年前でそれなら大したものだ。よし、次！」

教官の言葉に、彼方は椅子に座る。

「ふう。」

多少緊張しながらの演奏であつたのか、座るなり息を吐く。しかしながら、その表情に不安や疲労の色は一切見えない。今の彼女は、日々忠実した者が見せる、明るい表情をしていた。

(毎日の練習は大変だけど、やっぱり来てよかった)

ヘルベチア共和国と日本が国交を樹立すると、ヘルベチア共和国もそれまで日本が接触した国家と同じく、軍事面においては優秀な日本製兵器の購入を打診した。

しかしながら兵器だけ売却してもそれを使いこなせないのは、目に見えていた。特に海軍と空軍に関しては、ヘルベチアは一から作り上げる必要があつた。

そのため、まず始まつたのが人事交流であつた。これに伴い、多数の人材がヘルベチアから日本やロクシエ、そしてロシア帝国へと派遣されていった。

これに伴い、彼方は日本へ音楽を習いに行くことを希望した。「スタールイ」艦上での会話が忘れられず、その後入ってくる情報か

ら、日本に行けば十分に学べると考えたからだ。

それに対して日本側は、陸上自衛隊の音楽隊への留学と言う、処置を取った。しかも、その中でも最精鋭である陸上自衛隊中央音楽隊へである。

中央音楽隊は特にエリート部隊で、音大卒業者でも簡単には入れないと言われている。それでも彼女がこの隊に迎え入れられたのは、政治的な思惑もあったが、彼女の適性をテストした音楽隊の陸上自衛官が後押ししたからであった。

わずか2年前にラツパを持ったにも関わらず、素晴らしい音感と早い修得力を持ってトランペットを弾く彼女に、その自衛官は輝ける将来を見出したのであった。

後にヘルベチア共和国親衛音楽隊の隊長として名を馳せる、空深彼方の新たな歴史の始まりであった。

そんな未来のことも露知らず、彼方は時には教官に厳しく、時には優しく教えを受けながら、日々驚くべきスピードでその腕を上達させていた。

(とにかく、がんばらないと！梨旺先輩や乃絵留ちゃんたちも元気にやっているかな?)

日本とヘルベチア両国からその将来を期待されている彼女が、時折空を見上げて想うのが、共に日本の空の下で学ぶ仲間達のことであつた。

同日 航空自衛隊防府北基地

「マズイマズイ！寝過ぎした！」

梨旺は基地内の廊下を全力疾走していた。留学生であるが、着ている服は航空自衛隊のそれにそっくりのヘルベチア空軍のものであった。

「よし！間に合った！！」

教室に駆け込み、自分の席に着く。

「ふー」

「梨旺ったら、また寝過ぎしたの？」

隣の席に座る臙脂色えんじの制服を着込んだ少女が、半ば呆れながら言う。

「ああ、リリア。遅くまで本を読んでいてな。」

声を掛けてきたのは、ロクシエからの留学生であるリリアーナ・アイカシア・コラソン・ウィッティングトン・シュルツであった。

2人は会って依頼、非常にウマがあい、もはや親友であった。

「そんなんじゃない目を悪くするわよ。」

「わかってる。休み時間には、なるべく遠くを見るように心がけて

いるぞ。」

「それにしても、梨旺さんも勉強熱心ですね。」

梨旺から見て、リリアを挟んで反対側の席に、1人の青年が座る。リリアと同じく、臙脂色のロクシエ空軍の制服を着込んでいる。彼は教科書を机の上に置くと、座った。

「おはようトレイズ。お前にしては遅いな。」

やって来たのはリリアと同じく、ロクシエからの留学生であるトレイズだった。

「おはよう梨旺さん。ちょっと、実家に電話をしていたから。」

「ほー。相変わらず、この国の科学力の凄さには驚かされるな。」

「本当よね。あーあ。早く私もジェット機の操縦したいな。」

「そう言うことは、基礎科目でちゃんと点を取ってから言うもんだぞ。」

「わかってるわよ。けど梨旺はすごいよね。私達よりも後に日本語習いだしたのに、もう完璧にマスターしてるんだもん。」

「本当。俺たちだって、使いこなすのに一年半も掛かったのに。」

「私だって楽に覚えた訳じゃない。けど、空を飛びたいという憧れをかなえるために必要なことだと思えば、別に苦になるようなことじゃなかった。」

「クー、格好いいわね。同じ女なのに惚れ惚れするわ。」

「な、バ、バカなことを言うな!」

「いや、実際、今の梨旺さんは格好良かったし。素敵だった。」

リリアに続いて、トレイズも褒める。ところが、それに対して梨旺ではなくリリアが反応した。

「ちよっとトレイズ、何よ今の言葉は?」

「え!?普通に梨旺さんのことを褒めただけだけど。」

「本当に?ふん!」

リリアはソツポを向いてしまった。

「ちよ、ちよっとリリア」

慌ててリリアの機嫌を取ろうとするトレイズ。そんな2人を、今度は梨旺が呆れながら見た。

「やれやれ。」

と言いつつも、一瞬後には彼女の表情は楽しそうな物になっていた。

後に、ヘルベチア空軍総司令官となる梨旺・和宮・アルカディア公女の、日本留学時代の一場面であった。

同日 陸上自衛隊土浦駐屯地内武器学校

ガチャガチャ・・・

「幸せ。」

教材用の車両を整備しながら、寒風乃絵留は御満悦であった。

「寒風曹長は本当に機械弄りが好きだね。」

共に留学してきたクラウス中佐が笑いながら言う。ヘルベチア時代から百年に1人の天才と言われている彼女は、教科書を一読しただけで全てをマスターしまう程頭がよく、教官などいらぬような存在であった。

そんな彼女が何よりも好きなことであったのが、機械弄りであった。空いた時間に許可を貰って、自衛隊の車両や武器を、解体して、再組み立てするのが、彼女にとっての日課となりつつあった。

後にヘルベチア共和国の産業大臣となる、寒風乃絵留の若き日の姿であった。

同日 ヘルベチア共和国 第1121小队駐屯地 時告げ砦

「こらあ！何もたまたやってるの！もっと素早く動きなさい！..！」

「す、すみません!!」

「全く。彼方だってもう少し役に立ったわよ。」

2人の新兵を叱咤した先輩の女性兵士が、何かを思い出すように  
呟く。

「随分と先輩ぶりが板についてきたわね、暮羽ちゃん。」

「あ、フィリシア少佐。」

墨埜谷暮羽兵長は、やってきた小隊長のフィリシア・ハイデマン  
少佐にピシッと敬礼する。

「別にそんな堅苦しいことしなくてもいいのに。」

「いえ!ちゃんとしないと、新兵に示しが付きませんから。」

「そうね。けど、怒ってばかりじゃ彼女達も付いてこないわよ。梨  
旺だって怒ってばかりじゃなかったでしょ?」

「そうですねけど・・・梨旺先輩や彼方、乃絵留まで日本に行っちゃ  
って。皆のことを知っているのは、私と少佐だけになっちゃったし。」

「けど、暮羽ちゃんが無理しなくてもいいのよ。あの娘たちは、こ  
れからじっくりと時間を掛けて皆に慣れてくれればいいんだから。」

フィリシアの視線の先では、新兵たちが四苦八苦しながら作業を  
行っていた。

「でも、やっぱり梨旺たちがいないと寂しいわね。」

「ですね。」

2人は遠く異国の地で勉強しているであろう、3人に想いを馳せる。

「私達も日本に行きたいわね。日本には美味しい物や、珍しいものがたくさんあるって言うし。」

「今度の休暇にでも遊びに行きます?」

「いいわね。」

そんな風に2人が会話をしていると、砦の入り口の方から音がした。

「あ、私行つてきます。」

暮羽が扉を開けると、そこには最近始まったばかりの、赤い郵便の帽子を被った男が立っていた。

「こんにちわ。第1121小隊宛に国際小包です。」

「国際小包?」

暮羽は小箱を受け取った。

「はい。ではよろしく。」

用を済ませると、郵便局員は行ってしまった。

「どこからかしら？・・・あ！？」

小包につけられた伝票を見て、暮羽はすぐにフィリシアの元へと走った。

「フィリシア少佐！！！」

「どうしたの？暮羽ちゃん。嬉しそうな顔をして。」

「彼方から小包です。」

「あら。一体何を送って来てくれたのかしら？」

「開けますね。」

暮羽は外側の包装紙を解き、中身を出すと。中には綺麗な装飾が施された小箱と、手紙が一枚入っていた。フィリシアがそれを読む。

「フィリシアさんと暮羽ちゃんへ。お元気ですか？私はとても元気です。今日も音楽隊でがんばってトランペットを練習しています。・・・中略・・・今日はプレゼントを贈ります。オルゴールと言う、箱を開けると音楽が鳴る機械です。私のとっても好きな曲です。楽しんで下さい。・・・だって。」

「へえ、開けてみて良いですか？」

「いいわよ。私も早く聞きたいし。」

2人がオルゴールを開けると、中から綺麗な音楽が流れ始めた。

「うわー、素敵。」

「不思議ね。この曲を聴いていると、あの娘がすぐ側にいるみたい。」

音楽はどこまでも響き渡るかのように、皆に広がっていった。

ヘルペチア転移編 5 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

## 東露帝国転移編 1

1年目 中部太平洋上 海上自衛隊護衛艦「えちご」

海上自衛隊護衛艦「えちご」は2011年度予算で建造が開始された「えちご」級ヘリコプター護衛艦の1番艦である。と言うより、同型艦はない。

本来は19500t級護衛艦として建造予定だったが、2010年の黄海における北朝鮮と韓国の武力衝突事件を受けて設計をやり直し「ひゅうが」級ヘリコプター搭載護衛艦の武装強化型に設計しなおされた。

その後2番艦の建造が計画されたが、予算が付かず着工が遅れたのに加えて、昨年の転移による周辺情勢の変化から、以後はターボプロップ機搭載中型空母の「瑞鶴」級とハリヤー戦闘機搭載可能な航空機搭載護衛艦「あかぎ」級にシフトされた。

「えちご」は転移後の防衛力強化と、造船所救援の目的から竣工が早められたものの、結局同型艦のない珍しい艦となってしまうた。

海上自衛隊ヘリコプター搭載護衛艦「えちご」

基準排水量16000t 全長205m 速力30ノット

武装76mm速射砲2基

20mmCIWS2基

VLS16セル2基

3連装対潜魚雷発射管2基

搭載機最大11機（戦闘ヘリ2機 対潜ヘリ8機 掃海ヘリ1機）

この日「えちご」は護衛艦「はるかぜ」「ゆうだち」補給艦「ましゅう」と共に、竣工後の遠洋航海訓練に出動していた。

母港である舞鶴を出港、津軽海峡経由で太平洋へ出た後はトリスティンのラ・ロシエール軍港で補給を行い、さらにそこから東へと向かった。

この付近は衛星情報でも何も無い大海原が広がっているのが確認されており、各国海軍にとって遠洋航海訓練や実弾演習を行うための演習海域として重宝されていた。

ところが彼らは演習予定海域到着直後、想いも拠らぬ事態に出くわした。天候が急速に悪化すると共に、海上に靄が発生して視界も悪くなった。さらに、各艦内でも異常が発生した。

「電子系機器、一切使用不能！」

「無線、GPS反応無し！！！」

「こちら機関室。エンジンは正常に作動していますが、各種計器が滅茶苦茶に動いています！」

艦内各部から異常を報せる報告が艦橋へと上げられた。

「艦長、強力な磁気嵐が何かに突っ込んでしまったようです」

「えちご」の副長兼船務長である角松洋介二佐は、司令官席に座る臨時隊司令兼艦長の梅津三郎一佐を見やる。

「各艦の状況はどうだ？発光信号で確認できないか？」

「各艦もどうやら似たような状況見たいですよ。いずれの艦からも電子機器の使用不能と無線・GPS反応消失と言ってきています」

艦橋後方の張り出しから、後続艦に発光信号を行っていた航海長の尾栗康平二佐が戻ってくるなり報告する。

「とにかく収まるのを待つしかないようだ。航海長、後続艦に現状維持を送ってくれ」

「わかりました！」

「えちご」以下4艦は悪化した視界の中で無線も使えないと言う状況にありながら、発光信号で連絡を取り合い、目視で互いの距離を確認しながら進み続けた。

梅津の読みどおり、10分ほどして待望の報告が艦橋にあげられた。

「各電子機器正常に戻りました！」

「無線、GPS復旧！衛星軌道上の衛星を確認！」

視界も回復し、急速に天候も回復してきた。

「どうやら抜けたようだな」

梅津はホッと一息を吐いた。

「ですが、もしかしたらどこかに異常があるかもしれません。確認させましょう」

「そうだな。早速やらせよう」

ところが、次なる異常事態が「えちご」を襲う。

「艦橋CIC！」

艦の中枢というべきCICに詰める砲雷長の菊地雅行三佐から交信が入った。すぐに角松が対応する。

「どうした菊地？何か異常でも見つかったか？」

「ああ。レーダーが不審な反応を探知。2時方向、距離30海里に多数の艦船と思しきエコーを捕捉！その数およそ40！」

「それは間違いないのか！？」

「ああ、何度も確認したが間違いない」

「艦長！」

「今日この付近を航行中の艦艇は、我々以外無い筈だな？」

梅津が確認を取るが、それは角松にも分かりきっていることだった。

「はい。この方面で演習を行っていたロクシエ艦隊は2週間近く前

に引き揚げています。それに、その数も20隻程度だった筈です。40近い反応があるなど、考えられません」

「となると、新たな転移現象が発生した可能性もある。副長、ただちに本国にこの事態を打電しろ。CICにはレーダーの反応を捕捉しつづけるよう指示してくれ。それから万が一と言つこともある。総員対艦戦闘用意！」

「了解です。総員対艦戦闘用意！！」

艦内に戦闘配置を告げるアラームが響き渡る。

「我々はどうしますか？針路を変えますか？」

尾栗が指示を求める。

「現状では命令に変更は無い。このまま現針路と速度を維持せよ」

「わかりました」

尾栗に指示をした梅津は、報告のあつた2時方向に双眼鏡を向けた。もちろん、双眼鏡を使ったところで目標を視界内に捉えることはできず、大海原が広がるだけであつた。

それから20分ほど航行を続けたが、相変わらずレーダーでは正体不明のエコーを探知し続けていた。

「艦長！」

「どうした副長？」

「「ゆづだち」から意見具申で、偵察へりを飛ばしてはどうかと言  
つてきています。どうしますか？」

「うーん・・・少し待て。本国からの回答を待とう」

梅津は本国からの指示が出る可能性を考え、一旦角松の意見を保  
留とした。

待望の回答は、それから10分ほどして届けられた。

「通信室艦橋！」

「艦橋だ！」

「海上幕僚長名で次のような内容を受信しました。ただちに不明反  
応の調査にあたれ。以上です」

「わかった。航海長、針路変更。不明反応と最短で接触できるコー  
スに変針してくれ。後続艦にも打電」

「わかりました」

尾栗は命令を実行するべく、すぐに動いた。間もなく「えちご」  
以下4隻は、その舳先を不明目標方向に合わせた。

「へりを出すべきでは？」

「距離30海里なら、へりを出す必要はあるまい。すぐに接触でき  
る。ただし「スーパージョブラ」とSH60Kはすぐに出せるように

だけはしておいてくれ」

「わかりました」

「それと、不明目標が何かわからんが。全ての周波数で交信を試みてくれ」

「わかりました！」

「CIC艦橋！」

「またもCICの菊池二佐から通信が入る。」

「どうした？」

「不明反応より複数の小型目標分離！」

「ミサイルか！？」

「いや、速度から考えて恐らくヘリか何かだ。内1つが我が部隊に接近中！対地速度100ノット！距離28海里！」

「100ノットと言うことは、ミサイルやジェット機の類じゃないな・・・」

「対空戦闘用意掛けますか？」

「任せる」

梅津の言葉に、角松は頷くと艦内マイクを送に入れた。

「総員対空戦闘用意！！」

これで対艦と対空両戦闘準備がなされたこととなる。

「不明対空目標接近！2時方向！高度1000m」

「目標の識別に掛かれ！」

直に艦橋内や艦橋外の張り出しの者が双眼鏡による確認に入った。さらに、艦に取り付けられている外部モニターが目標に指向する。これでCICでも目標の確認が出来る。CICでは捉えた不鮮明な映像を解析し、目標の機種の割り出しに入る。

「目標はレシプロ機！降下中！」

「目標機種不明！……いや、これは……接近しているのは旧軍アンソウの零式水偵です！目標さらに降下！」

その報告に、ほぼ全員が耳を疑った。

「旧軍機だと！？」

「お！見えた！……マジかよ！本物だ！」

尾栗らの双眼鏡には、確かに主翼の下に2つの大きなフロートを搭載した水上機が映っていた。

「目標は本艦直上を通過する模様！」

間もなく、その零式水偵は「えちご」上空を通過した。その主翼と胴体には、日の丸は描かれていなかった。

「目標にラウンデルの国籍マークを確認！日の丸じゃありませんでした！」

「どこの国の物かわかるか？」

複数の円の組み合わせによるラウンデルの国籍マークは、日本が以前いた世界ではそこから中で採用されていた。蛇の目と俗称されたイギリス。フランス、イタリア、フィンランド、インド等々挙げればキリがない。

「外から青、赤、白でした・・・該当する国家はありません！」

「となると・・・」

梅津が出しえる答えは一つしかなかった。

「通信室艦橋！不明反応よりと思われる電波を受信！2通あります！」

通信室からの

「読んでくれ！」

「はい！我大日本帝国第二航空艦隊。貴艦隊の所属を問う。もう一つは、発信者名がロシア帝国海軍太平洋艦隊となっているだけで、内容は同じです」

「大日本帝国とロシア帝国・・・」

「おいおい、異世界に来て少しのことじゃ驚かなくなったけど、今度は亡霊の登場か!？」

尾栗が叫ぶ。

「あり得ない話じゃない。色々な世界がこの星に飛ばされてきているんだ。どんな世界が来ても不思議じゃない。しかし艦長、どうしますか？」

梅津はしばし目を瞑って考え込んだ。

「我々の任務は不明目標の調査だ・・・副長、不明艦隊に向けて打電」

「内容は？」

「我に戦闘の意志なし。これより貴艦隊と会合し、会談を求む。それでいいだろう」

「了解しました。ですが、念のためこのまま戦闘配置を解かないことを勧めます」

「それは副長に任せるよ」

「わかりました。では、早速」

梅津の指示した内容の電文が、発信された。それに対する返信は、予想以上に早く帰ってきた。

「了解。貴艦隊の合流を待つ……か……副長、全艦マイクを」  
「は！」

マイクを受け取ると、梅津は全艦に向かって放送を開始した。

「達する。艦長の梅津だ。本日予想外の状況が続発しているが、恐らく転移現象が起きた可能性が高いと私は判断している。我が隊はこれより、不明艦隊との接触を行う。想定すら出来なかった状況に戸惑いもあると思う。しかし、私は諸君らが海上自衛官としての職務を全うできると信じている。以上」

梅津はマイクを角松に返した。

「これより、我が隊は不明艦隊と接触する！よろしく頼むぞ」

「は！」

30分後、「えちご」以下の海上自衛艦隊は不明艦隊と接触した。

「これは壮観だな」

梅津はそう言わずにはいらなかった。太平洋戦争時代と思しき旧式の艦艇ばかりであったが、40隻近くもいれば、壮観以外の何物でもなかった。

「「大和」級戦艦が3隻……大型航空母艦4隻に小型航空母艦2

隻。大小巡洋艦12隻。そして駆逐艦が20隻強。こいつは強力な機動艦隊です」

「うちの科の柳が喜ぶ筈です・・・お！？艦長、「大和」級戦艦に発光信号を確認！貴艦隊との会合を祝す。味なことしてくれるじゃねえか」

「航海長、こちらにも返信だ。内容は、これより会談を行いたしだ」

**東露帝国転移編 1 (後書き)**

御意見・御感想お待ちしております。

1年目 中部太平洋上 海上自衛隊護衛艦「えちご」

「それでは、行って来るぞ！」

海上に降ろされた内火艇から、「えちご」副長である角松二佐の  
声が響く。

「艦長、副長、お気をつけて！」

「柳！しっかりと補佐するんだぞ！」

艦に残る菊地砲雷長と尾栗航海長の表情は少々不安げであった。  
これから「えちご」艦長の梅津一佐と角松、そして航海科より選抜  
された柳一曹の3名は正体不明艦隊との会談に挑むのだ。会談場所  
に指定されたのは「大和」級戦艦の内の1隻であった。

内火艇は「えちご」を離れ、不明艦隊の中心へと向かって動き始  
めた。

「しかし、本当に見れば見るほど驚きです。本当に旧軍の艦隊なの  
でしょうか？」

双眼鏡で艦隊を観察しながら言った角松の言葉に、同様に双眼鏡  
で観察していた梅津も頷く。

「まあ会ってみればわかるだろう。それに旧軍も気になるが、あち  
らのロシア帝国を自称する艦艇も気になる」

梅津が目をやった先には「大和」級戦艦が海上に停止していた。外見はどう見ても映画や写真などで御馴染みの「大和」である。しかしその艦尾に掲揚されているのは旭日旗ではなく、白地に青のクロスロシア帝国海軍旗であった。

またロシア艦艇の艦首には双頭鷲のエンブレムが付けられていた。

「柳、お前はどう思う？」

航海科より派遣された柳一曹は尾栗航海長曰く、「うちの科の柳は超が付く戦史オタクです」と言うことで、今回の会談にアドバイザ―として派遣された。

「艦長と副長も知つてのとおり、我々が元いた世界でのロシア帝国は1918年に皇帝一家が惨殺されたことで幕を閉じました。当然「大和」級戦艦を運用しているなどありません。となると、我々が元いた世界とは違う世界から転移したと考えてよろしいかと」

柳の言葉に、2人も頷く。ちなみに護衛艦の方が転移もしくはタイムスリップした可能性は、既に本土と連絡が取れ、さらにトリスティンやロクシエなどから発信される電波を傍受したことで否定できた。

「そうになると艦長、かなり難しいことになりますか」

「なあに、今更のことだよ。この世界では何が起きてもおかしくはないよ」

「ですが、やはり本国からの具体的な命令が届くのを待つべきだっ

たのでは？」

「それでは遅すぎるよ。こちらも向こうに発見されたんだ。だってら直接会って話すのが筋だ。それに、海上幕僚長からは不明反応の調査を命じられている。直接会ってみるのも調査の内だよ」

「そう来ますか」

「副長こそ、良かったのか？」

「ええ。尾栗と菊池の2人だけでも大丈夫でしょう。艦長のことは、3人の中で私が一番良く知っているつもりなので」

「まあ、よかろう」

2人が2人だけがわかる会話を終えた時、柳が興奮しながら口を開いた。

「艦長、副長。やはりこれらの艦隊は我々の歴史の旧軍艦艇とは大きく違います」

「その根拠は？」

角松の言葉に、柳が説明を始めた。

「まず艦艇上に搭載されている対空火器が違います。史実の旧軍艦艇は、主に25m機銃を搭載していました。しかしながら、今見える巡洋艦の艦上には40mm機関砲らしい大口径砲が見えます。それにマストに搭載されているレーダーの種類も多いです」

「うむ」

「またロシア海軍旗を掲げた艦艇も気になります。戦艦や空母は日本の「大和」級と「瑞鶴」級ですが、巡洋艦と駆逐艦には日本の「利根」級や「秋月」級に似た艦艇も混じっています。英国の「サウザンプトン」級や「トライバル」級らしい艦艇も見受けられます。」

柳の説明に、2人は再び頷いた。2人は柳ほど太平洋戦争史に詳しいことはないが、防衛大学校と幹部候補生学校でそれなりに勉強している。

「それにしても、嬉しそうだな柳」

「はい、本物の旧軍艦艇を見ることなど出来ませんから」

柳の言葉に、角松は苦笑いしながら言う。

「喜ぶのは良いが、相手に失礼の無いようにな」

「は」

そんな風に会話をしている間に、内火艇は「大和」級戦艦のタラップの下へと到着した。艦上には多くの人間が立っている姿が見て取れた。

3人はタラップを上っていった。この内角松だけは防水性のバツクを抱えていた。

タラップを上がり終え甲板に上がると、そこにはズラツと小銃を

抱えた水兵がタラップの出口を囲むように立っていた。

「これはまた派手な歓迎だな」

梅津が表情一つ変えずに呟いた。対して柳は観察することに余念がなかった。

「あれは九九式小銃ですね。そして軍装もやはり旧海軍に間違いありません・・・あ!？」

「どうした?」

角松が突然言葉を失った柳に、怪訝な表情をする。

「まさか・・・そんな!？」

「うん?」

柳が驚愕したのは、ある人物を見つけたからであった。そしてそのある人物のほうから、3人に近づいてきた。白い制服を着た将軍と、もう1人は同じく将軍らしかったが、上は白で下は黒の制服を着込んでいた。

梅津と角松、少し送れて柳も敬礼した。

「日本国海上自衛隊護衛艦「えちご」艦長の梅津三郎一等海佐です」

「同じく「えちご」副長の角松洋介二等海佐です」

「「えちご」航海科所属の柳一信一等海曹です」

すると2人の将官も答礼した。

「大日本帝国海軍第二航空艦隊司令の山口多聞中将だ」

「ロシア帝国海軍太平洋艦隊司令の伊藤整一中将だ」

2人が名乗った所で、さすがに梅津と角松も驚き顔を見合わせた。

山口多聞は元いた世界の西暦1942年6月のミッドウエー海戦において、第二航空戦隊司令として戦死した人物である。また伊藤整一も1945年4月に第二艦隊司令長官として戦艦「大和」に座乗し、沖繩への特攻途中に「大和」と共に戦死した人物である。

角松はどうして柳が驚き、言葉を失ったかようやく理解できた。

「さて互いに平和的に出会えたのはいいが、色々と君たちには聞きたいことがある」

「それはこちらと同じです。どこかでゆっくりと話すことは出来ないでしょうか？」

梅津の言葉に、山口が頷いた。

「会議室で話をしたいと思うが、よいか？」

「はい、構いません」

3人は艦内へと案内された。

3時間後、梅津艦長たちを乗せたランチが「えちご」に戻ってきた。

「お！？艦長たちが戻ってきたぜ」

「無事で何よりだな」

留守番していた尾栗や菊地らがホッと安堵の息を吐いた。しかしながら、対照的に内火艇から「えちご」へと戻った梅津と角松の表情は真剣なものであった。

「艦長、一体あの艦隊の正体は？」

「一体どんな話をしてきたんです」

菊地と尾栗の質問に、梅津は答えることなく逆に命令した。

「至急、各艦の幹部を集めてくれ」

1時間後「えちご」の会議室に各艦の主だった人間が集められた。

「早速だが、先ほど我々が聞いてきた話の内容を伝えようと思う。色々信じられないことも多いだろうが、諸君には冷静に聞いてもらいたい」

それから、梅津と角松による話が始まった。その内容は聞き手である自衛官たちを驚かせるものであった。

目の前に現われた艦隊は大日本帝国海軍の第二航空艦隊とロシア帝国海軍の太平洋艦隊主力で、彼らの元いた世界での西暦は1943年8月だったとのこと。そして彼らのもといた世界では、ロシア帝国が存続しているとのこと。

「ロシア帝国が存続している!？」

「では、ロシア革命は失敗したと言うことですか？」

「いや、それとも違うらしい」

角松の言葉に、参加者が首を傾げる。

「彼らが言うには、ロシア帝国の正式名は東露西亞帝国と言って、首都もノーヴァ・サンクトペテルブルクだそうだ・・・もっとも、我々にはアンカレッジと言ったほうがわかりやすいがな」

「アンカレッジ!？」

さすがにその都市名に聞き覚えのある人間は多かった。何せつい1年前までいた世界にあった地名なのだから。

角松は続けた。

「簡単にしか聞いていないが・・・」

角松の話に拠れば、彼らの元いた世界では1867年のアメリカへのアラスカ売却が発生せず、アラスカはその後ロシアの領土であり続けた。そして1918年のロシア革命によってニコライ2世皇帝とその家族は惨殺されたが、唯一四女のアナスタシアだけは救

出され、脱出できた。そして1921年に共産党による支配を免れていたアラスカで、アナスタシアが新皇帝として即位し、東露西亜帝国として独立したらしい。

「いやはや、まるで小説の話だな」

菊地の言葉は、他の参加者全ての気持ちを代弁していると言って良かった。

「それだけじゃないぞ菊地。彼らが言うにはハワイも王国として存続しているらしい」

「何!？」

「彼らはそのハワイ王国の真珠湾を拠点にして、アメリカと戦っていたそうだ」

「つまり、日本とロシアとハワイは同盟国だったってことか？」

尾栗の質問に、角松は頷いた。

「しかもただの同盟国どころの話じゃないぞ。ロシア帝国軍は実質日本人が動かしているらしいぞ」

「はあ!??どう言う意味だそれ？」

驚く尾栗を含む人間に対して、再び角松は説明を始めた。

東露西亜帝国はアラスカのみが領土であり、その人口は100万強である。これでは強大なソ連から国を守るだけの軍隊を編成す

るなど無理であった。

そこで、ロシア帝国が取った方法が日英など友好国からの傭兵受け入れであった。傭兵だけでなく、艦艇などもほとんどの両国からの輸入品で、最近では地理的に近い日本からの輸入が群を抜いて多かつたらしい。

しかも、傭兵としてロシア軍に参加したがそのままロシア側に帰化した人間も少なからずいるらしい。

「先ほど会ってきた伊藤整一中将も帰化した人間だそうだ」

「なるほどね」

「ところで、今回の転移はあの艦隊だけなんでしょうか？」

菊地の質問には、角松も答えに困った。

「向こうも一時的に無電がダメになったそうだが、俺たちと話している最中にハワイと連絡が付いたと言っていた。だが、こればかりは衛星からじゃないとわからないだろう」

角松としては、それ以外に言いようがなかった。

「日本本土から何らかの連絡はまだないのか？」

「何も来ておりません。確認中としか」

これでは行動の取りようがなかった。参加者からも良い意見は出ず、やむなく梅津が最終的な判断を下した。

「まあ、人工衛星の数が少ないのでは確認に時間が掛かっても仕方がないだろう・・・我が隊は別命あるまで待機とする。引き続き各艦は日本艦隊とロシア艦隊の動きに注意してくれ。以上だ」

**東露帝国転移編 2 (後書き)**

御意見・御感想お待ちしております。

1年目 中部太平洋上 帝国海軍戦艦「信濃」 大会議室

「ふむ。異世界ね」

「俄かに信じ難い話だな」

梅津らから、一通りの話を聞いた山口多聞中将与伊藤整一中将の感想である。しかし2人の感想はまだ良いほうで、参謀などから「バカにするな!」とか「貴様ら我々をおちよくっているのか!」と散々な反応であった。

当たり前と言えば当たり前だが。しかしそんな答えに対しても、梅津らは冷静であった。

「まあ、常識的に考えれば信じられないのは当然です」

梅津は角松に目配せした。

「そこで、我々も証拠をわずかばかりではあります但すが持つて参りました」

角松が持つていた鞆から出したのは、パソコンだった。

「それは?」

「これはパーソナルコンピューターと言いまして、我々の時代には様々な用途に使用される機械です。映像を映すことも可能なので、

今回は皆さんに我々の世界の映像を見ていただきたいと思います」

「えちご」艦内には小さいながら、資料室が設けられている。今回角松たちが持つてきたのは、そこにある歴史のDVDであった。

「では、再生します」

DVDをパソコンに挿入すると、角松は再生のスイッチを押した。

2時間後 海上自衛隊護衛艦「えちご」艦橋

「それで、どうなったんだよ洋平？」

角松から、つい1時間前まで行われていた「信濃」でのやりとりを聞いていた尾栗は、話の続きが気になって仕方がないようだ。

「まあ、色々と驚かれた。それだけだ。ただし、向こうもある程度は理解してくれたらしい。伊藤中将はともかく、山口中将は猛将と聞いていたから、途中で怒り出すんじゃないかと思っただが、最後まで冷静に話を聞いてくれたよ」

「映像だけで説得出来たのか？」

「まさか。向こうも異常事態を察知したからだよ。本国とハワイとの通信は取れているが、その他の地域との連絡が途絶しているの、こちらの世界の電波を拾ったらしいから、こちらの話を嘘だとは決め付けられなくなったようだ」

菊地の問を、角松はやんわりと否定した。

角松の言葉に、菊池が頷く。

「まあ、それが妥当だろうな。いきなり信じられたら、それはそれで困るぜ」

「それはともかくとして、本艦でも今までにない発信源の電波を多数探知しているから、新しい国が転移してきたのは確実だな」

菊地の言葉に、角松は問い返す。

「その内容はわかるか？」

「平文ばかりだからな。多くは現状がどうなっているかの問い合わせ電だ。発信地はキスカやアッツ、ホノルル、ノーヴァ・サンクトペテルブルクになっていたから、お前たちの言っていたアラスカにあるロシアがそっくりそのまま国ごと、しかもハワイが付いて転移してきたと考えていいんじゃないか？」

「わからないぞ、無線だけでの推測には限界がある」

3人が色々と憶測を立てる中、梅津は冷静に呟いた。

「まあ、それは衛星が上空を通ればすぐにわかるだろう。本国からの追加の命令がないなら、我々はこのまま当初の命令を続行するぞ。・・それから、対潜対空警戒を厳にな。山口中将と伊藤中将の言うことがただしければ、彼らはアメリカとの戦争中だった。さすがにアメリカ艦隊が近くにいるとは考えられないが、潜水艦や航空機はいるかもしれん。レーダーとソナーの反応、ならびに通信の傍受に細心の注意を払うように」

梅津が気にしているのは、転移してきた物に彼らの敵も一緒について来ていないかと言うことだった。転移してきた日本艦隊とロシア艦隊のいた世界では、太平洋で日露と米ソが戦っていたらしい。そのため、米ソの艦艇や航空機が現われてもおかしくなかった。

もちろん、梅津はその事も既に日本へ向けて打電させていた。

「万が一アメリカ・・・第二次大戦中のアメリカ合衆国になります  
が、その艦艇や航空機と接触した場合はどうしますか？」

角松の質問に、梅津は逆に問い返した。

「副長はどう思う？アメリカは我々にとって敵かな？」

「何もしなければそうでしょう。しかし、万が一敵対行動を取った  
場合は、自衛権の行使の対象となるかと」

「そうですね艦長。撃たれたら撃ち帰すのは当たり前です。それは  
認められていることじゃないですか？」

尾栗の言葉に、菊地も頷く。

「2人の言うとおりです。我々は自衛官であります。もちろん、相  
手に対して警告するなどの必要はありませんが、このような緊急事  
態においては、現場の判断で行動することは、既に認められていま  
す」

「・・・よかるう」

「しかし、アメリカ軍と戦うことになったらどうなるか？」

角松の疑問に、尾栗が多少呆れ気味に答える。

「相手は70年以上前の艦艇や航空機だろ？こっちには対空ミサイルや対艦ミサイルもあるし、対潜兵器だって当時とは比べ物にならないくらい進んでいるんだ。簡単に撃退できるだろ？」

「確かに、我々ならな・・・しかし、太平洋上には多数の漁船が操業しているし、数は少ないが東回りでサクラスへ向かう商船だっている・・・そう言えば、それらが遭難したと言う情報は？」

「今の所、入っていない。もつとも、絶対には言い切れないがな。何せまだ転移現象の確認から半日も経っていないんだからな」

「うーん・・・」

尾栗の言葉に、角松は呻くしかなかった。

この短時間では例え遭難船舶があつたとしても、海自、海保、そして新設された海上警備機構も把握できるかはわからない。だいいち、どの組織も今頃は新たに転移してきた国家や船舶の把握の方が忙しい筈だ。

「ま、俺たちが考えた所で始まらん」

と尾栗が言った時、新たな報告が入った。

「戦艦「信濃」より入電。「我これより真珠湾へ帰還せん。貴部隊は如何せられるや？」です」

「艦長、どうしますか？」

「・・・本土からも自衛艦隊司令部からも新たな命令はまだ来っていないな？」

「はい。確認されておりません」

「では我々の任務はそのままだ。全艦機開始動。日露両艦隊の後方2000mに付け。このまま両艦隊を追求する。両艦隊にもその旨を打電しろ」

「わかりました」

「しかし良いんですか？」

角松の言葉に、梅津は笑みを浮かべて答える。

「まあ良からう。命令に変更はないし、幸いにも燃料や食料も「ましゅう」がいるからな」

その言葉に、角松も苦笑せずにはいられなかった。

同時刻 戦艦「信濃」艦橋

「海上自衛艦隊、報告にあったとおり駆逐艦「グロースヌイ」の後方2000mにつきました。現在我が艦隊と同速度で追ってきています」

「よろしい。針路速度そのまま。海上自衛艦隊には引き続き警戒を続ける。ただし、くれぐれも下手なマネをしないよう、各艦に厳命しろ」

「了解です！」

「やれやれ、また可笑しなことになったもんだな」

第二航空艦隊司令官である山口多聞中将は、そう言つと「信濃」の司令官席に腰を降ろした。

「しかし長官、彼らの言っていることは本当なのでしょうか？」

「俺も俄かには信じられんよ、樋端君」

山口は後に立つ艦隊参謀長である樋端久利雄少将に笑いながら言つた。

「しかし、彼らが見せてくれたあの映像やパソコンとか言う機械はどう見ても本物だったし、我が国やドイツでも真似できん技術だ。それに、東露帝国から来た電文もある・・・あと、あの梅津とか言う男。とても嘘を言っているようには見えなかった。ま、それは俺の感に過ぎんがな」

そう言つと、彼は再び笑つた。

「人殺し多聞丸にそう言わせられる男と言うことは、中々の人間だと言つことですね・・・まあ、それはいいとして、確かに東京やトラックからの通信は途絶えていますし、ハワイやアラスカからくる

電文の内容も常軌を逸しています。しかし、異世界とは・・・」

「理解しがたいのは事実だ・・・ま、ハワイの中部太平洋方面艦隊司令部から全作戦の中止命令が出た以上止むを得ない。我々は真珠湾に帰るだけさ」

「あの艦隊は付いてきますか？」

「敵でないのなら、追っ払う必要もないさ。もちろん、戦闘になったら退避を勧告するだけだがな」

山口は、異世界であろうとなかろうと艦隊に通常と同じく対空と対潜警戒を厳にするよう命じていた。梅津のように、アメリカ軍やソ連軍の襲撃があるとは微塵も考えていなかったが、軍人としての警戒心を疎かにするようなマネだけはしなかった。

さて、この時日本をはじめとする各国の政府は、文字通りの大混乱に陥っていた。何せ初めての新たな転移国の登場である。これまで可能性が取り沙汰されてきたが、こうも早く来るとは誰も考えていなかった。

そこで期待されたのが、日本の偵察衛星であった。この世界で唯一宇宙技術を持つ日本は、他国政府の了解の元気象用や事業用、偵察用の衛星をここ1年で多数打ち上げていた。

それらは転移前の衛星の補完のみならず、この星やこの星が存在する宇宙の観測に役立てられ、そのデータは諸外国からも高い評価をもらっていた。

この時もその性能を如何なく発揮することとなった。

366日目早朝 日本 東京首相官邸

「で、JAXAから送られてきた写真がこれか・・・」

日本国首相春川は、持ち込まれたばかりの写真を眺めた。

「地球自体の地図と照合した結果、間違いなくアラスカです。ついでにアリユーション列島の島々も全て確認できます。またハワイ・ミッドウェー・ウエークの各島も確認できます。今回の転移は、再び大規模で発生した模様です」

JAXAの技術者が説明する。

「それで、現状は？」

「現在演習中だった海上自衛隊の1個戦隊が、転移してきた艦隊を追及中です。現針路と向こうからの連絡にあったとおり、ハワイに向かっているようですが・・・どうします？やめさせますか？」

石川防衛大臣の言葉に、春川は首を振る。

「そのまま追わせてくれ。場合によっては、そのまま相手政府との接触を行うよう命じてくれ」

「よいのですか？」

「ああ。一度交渉して手ごたえがあつたのなら、このままやらせよう。ただし、逐一連絡は取り続けるように。昨日みたいに6時間遅れじゃ話にならないぞ」

「わかりました」

そう言うと、春川は溜息を吐いた。

「やれやれ、また厄介ごとが増えたもんだ」

「まあまあ。今は現実と向き合いませんと」

「そうだな。サクラスとロクシエ、トリステインにも詳細を伝えなきゃならんし・・・ああ、憂鬱だ」

「それだけじゃありません。漁船や貨物船の中に、行方不明船も出ています。そちらへの対応も必要です」

「わかつてるよ」

と春川が素っ気無く答えたとき、新たな情報が石川に伝えられた。

「・・・首相、困ったことになりました」

「どうした？」

これ以上厄介ごとを増やされたくない、露骨に顔に出ていたが、それでも聞かないわけにはいかなかった。

「北緯40度、東経170度付近において操業中だった漁船が救難信号を発した後消息を絶ちました」

「・・・勘弁して欲しいな」

**東露帝国転移編 3 (後書き)**

御意見・御感想お待ちしております。

1年目+1日 西太平洋上 護衛艦「えちご」

「「えちご」以下各艦は北太平洋上において消息不明の漁船の調査を行うべし。なお、万が一攻撃を受けた場合には自衛目的のための武器使用を現場判断にて許可する・・・か」

防衛大臣名で出された命令を読み上げると、梅津は静かに目を閉じた。

昨日、突如として現れたのが艦隊だけではないことは、既に衛星や電波情報からも確認されていた。地球のアラスカに当たる地域と、<sup>ハワイ</sup>布哇諸島を含む島嶼の一部が丸々転移してきていた。

幸いなことに、すぐに日本をはじめとする各国政府はこの転移してきた東露西亜帝国や布哇王国に対して間接的、ならびに直接的な接触を試みた。

間接的な接触は電波によるもの。直接的な接触は、梅津たちを含めた海上自衛隊や航空自衛隊によって行われた。特にトリスティン駐留の航空自衛隊のF2戦闘機による、航続距離ギリギリのウエーク島への強行偵察飛行は、勇敢を通り越して一步間違えば蛮行であった。

ただし、こうした素早い接触は東露帝国やハワイを中心に活動中の旧軍とのコンタクト成功と、無用な接触の回避に成功したと言える。

そのため、東露帝国と帝国海軍とこちらの世界の各国との間に起きた衝突は、いずれも大きな騒ぎにならず（せいぜい海上での睨みあい）で済んでいた。

しかしながら、北太平洋方面で操業していた、或いは航行していた艦船の中にはブツツリと通信を絶ってしまった船や、SOSを発して行方不明になった船が既に日本籍だけでも10隻近く出ていた。

その他にロクシエ国籍やサクラス帝国籍の船舶にも行方不明船が出ている可能性があった。

「えちご」をはじめとする、太平洋上にて活動中の各艦艇はそれらの捜索任務を命じられたのであった。

「副長、現在位置は？」

「現在、ハワイオアフ島の西40マイルです」

角松が言つと、航海長の尾栗が笑いながら続ける。

「さつきから旧軍やロシア軍の飛行機が引つ切り無しに我が部隊の側を掠め飛んでますよ。柳なんか目を輝かせてますよ」

「今の所接近する艦艇ならびに航空機が我が部隊への攻撃を行う兆候は見せておりません」

「それは何よりだ」

「それでどうしますか艦長？予定では、あと2時間もすればパールハーバーに入港ですが」

「命令が下った以上、我々はそちらを優先するしかない。副長、ただちに戦艦「近江」の山口中将と「アレクサンドル2世」の伊藤中将宛に発信。我が隊は本国よりの新任務を受領し、現海域を離脱せんとす」

「わかりました」

同時刻 戦艦「近江」艦橋

「如何いたしますか長官？」

戦艦「近江」の艦橋では、「えちご」からの信号を受ると樋端参謀長が艦隊司令長官である山口多聞中将に伺いを立てていた。

「ふむ。どうすると言っても、我々の任務は真珠湾への帰港だ」

山口らに出されていた命令は、当初の任務の即時中止と真珠湾への即時帰還であった。

山口としても、海上自衛隊と名乗る艦隊の動向は気になる所であったが、既に半日以上も同行している中で特に敵対行動を取るわけでもない。さらに実際に会った限りでは、彼らが嘘を言っているようにも見えなかった。

だから必要以上に、彼らを追う必要は感じていなかった。

「ですが、未だ所属が不確かなあの艦隊を勝手に行かせるのはどう

かと思いますが？」

「そうだな・・・中部太平洋艦隊司令部に転電しろ。それから水偵を出して追跡させる。中部太平洋艦隊司令部からの許可を受け次第、我が艦隊からも艦艇を分派して追跡させよう。それでいいだろ？」

「はい！では、早速」

「うむ」

5分後、「利根」級巡洋艦の「黒部」から零式水上偵察機2機が射出された。

そしてそのさらに30分後。ハワイ・オアフ島に置かれている中部太平洋艦隊司令部から、堀悌吉大將名で新たな命令が、第二航空艦隊に対して出された。

「ハワイ沖で補給艦より補給を受け次第、ミッドウェー方面に進出せよだと？」

同日 日本・東京

「前にも申しましたが、転移が確認されたのは間違いなく地球のアラスカからアリューシャン列島にかけてとハワイ諸島、そしてミッドウェー諸島にウエーク島です。非常に広範囲において転移現象が起きました」

文部科学大臣の報告に、春川首相は顔を曇らせる。

「で、その影響は？」

最初に質問に応えたのは、国土交通大臣だった。

「現在のところ、国内における異変は特に確認されておりません。以前から懸念のあった地震や火山活動の誘発と言った現象は全く起きていません。どうやら取り越し苦労で済んだようです。また国内に限って言えば、どこかの地域が消失したような事実もありません」

続いて文部科学大臣が発言する。

「JAXAの報告では、転移発生時に該当地域を周回していた衛星は2基で、いずれも健在が確認されています。しかし通信用衛星だったので、転移の瞬間を収めることは出来ませんでした」

次に発言したのは、木戸外務大臣であった。

「今の所、ロクシエ・トリステイン・サクラス・諸島などからは別段の異常事態を知らせる情報は入っておりません。ただし、行方不明になった船舶が複数出ており問い合わせが来ています。また、自衛隊から報告のあった東露西亞帝国やハワイ王国との接触は、外務省の方では通信を行うレベルが精一杯です」

「だろうな・・・で石川防衛大臣」

「はい？」

「駐留トリステインの空自部隊の戦闘機がウエーク島に飛行した件

はどう言うことかな？相当危険だったと聞いているが？」

転移半年後に締結された日本・トリステイン・サクラス・ロクシエの4カ国の枠組み条約に則り、トリステイン王国には他の3カ国の軍隊が駐留することとなった。

これはトリステインが転移後の混乱によって自軍の戦力をすり減らしたのに加えて、軍備の面から見て全くお話にならない程遅れていたため、アンリエッタやマザリーニと言ったトリステイン王政府が要請したためであった。

これら駐トリステインの各国軍は、トリステイン王国の防衛の肩代わりならびに軍事顧問として赴いていた。

もともと、距離的に離れているためサクラスとロクシエの軍隊は申し訳程度の規模に過ぎず、主力は日本の自衛隊であった。

トリステインには海自の護衛艦2隻と海上警備機構の警備船4隻に加えて空自のF2戦闘機6機が進出していた。

これらを運用する施設は突貫で建設され、つい先日春川もトリステインへ出向いて完成式を挙行したばかりであった。

「確かに危険には違いありませんが、理論的には飛んでいけない距離ではありませんでした。現にF2はウエーク島の撮影に成功して無事に帰還しています」

「だがなあ、高価な戦闘機だからなあ・・・と、こんな時に出し惜しみするもんじゃないか」

4カ国の枠組み条約によって、日本はトリスティンの防衛を肩代わりするのに加えて、一気に拡大した防衛義務を果たさなければならなくなった。

これはこの世界に数はすくないが、大型の怪獣の存在が確認され、今の所それらに有効な打撃を与えられる武器を持っているのは、日本の自衛隊だけであった。

さらに、以前にも増して広がった海域を防衛・監視する必要まで出てきた。

そこで海上自衛隊と海上警備機構、海上保安庁の拡充が図られた。この内保安庁は沿岸部における治安維持と救難が主任務と決定し、国境や遠洋における警備と救難・保護を海上警備機構が、そして他国からの侵略への防衛と前者2組織へのサポートが海自に割り振られた新任務であった。

既に転移前から、日本の防衛は海上と航空へ大きくシフトしていたが、その動きが転移によって拍車をかけた。

このため、日本政府は新防衛大綱を決定し、諸外国に目立った脅威がないことから現用兵器の調達を最低限に抑えて、それらよりも性能に劣るがコスト的にも生産時間的にも安心なロートル（日本基準で、他国から見れば20〜30年ほど進んでいる）兵器を大量に揃えることとなった。

特に遠洋における保護任務を仰せつかった海上警備機構は急ピッチで拡大が進められていた。

また海自でも、第二次大戦型の艦艇をベースに建造した廉価版艦

艇が多数配置予定（ついでに輸出予定）で、こちらも突貫で建造が進められていた。

空自もF2Cの生産が年4〜6機まで減らされ、代わりに製造が始まる予定なのがターボ・プロップ式の「烈風」、「流星」、小型ジェット戦闘機の「震電」であった。これは現用ジェット戦闘機の10分の1から12分の1の調達価格を予定していた。

だから、F2戦闘機や現用護衛艦は今後生産が最低限まで減らされ、まさに宝石よりも貴重な戦力であった。

ちなみに、これらの艦艇建造や航空機製造は転移によって大幅に生産が落ち込んだ各種産業界救済の狙いもあった。

「その通りですよ。せっかく高い買い物をしたんですから、こう言う時に有効活用出来なければ、それこそ税金の無駄遣いですよ」

小泉副首相の言葉に、春川は苦笑する。

「それもそうだ。で、行方不明になった艦船の搜索はどうなっている？」

まず石川が答える。

「現在太平洋上に展開している海上自衛隊の艦艇と航空機をあるだけ掻き集めて投入しています。既にトリスティンと大湊、横須賀に駐留している各艦艇が出撃しています。対潜哨戒機や空自の偵察機も出ています」

さらに農水大臣が続く。

「海上警備機構の警備船や監視船も船舶が消息不明になった地域へ向けて順次出撃中です」

「大変結構・・・だが、それだけの戦力を動かすととなると、後から野党から突き上げ喰らうだろうな」

「後の（政治家としての）危機よりも、今の（国家としての）危機ですよ。首相」

「わかってるよ小泉」

とその時、秘書官の朝日奈みくるが走ってきた。

「首相、サクラスのメイベル首相とロクシエ大統領、それにトリステインのヴァリエール首相から問い合わせの電話が来ています」

すると、彼の顔が一気に憂鬱な物になった。

「わかってるよ。やれやれ、また厄介なことになったもんだ」

「それに対処するのが、首相の義務ですよ」

「わかつとるわ」

東露帝国転移編 4 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

1年目+2日目 東露西亜帝国首都 ノーヴァ・サクトペテルブルク（旧名アンカレッツジ）王宮

「誠に信じがたいことですが、昨日から起きている異常事態から判断すると、我が国が異世界に飛ばされたと言うのは信じがたいにしても、何かしらこれまでにないことが起きているのは間違いないかと」

御前会議の席上、現首相であるミカエル・スカルスキー首相が玉座に座る現皇帝、アナスタシア1世に報告する。

今年42歳となるアナスタシアは、暗殺されたニコライ1世の子供の中で唯一の生き残りである。そしてこれまでも、共産主義者の手に落ちたロシアからの逃避行、ソ連による侵攻など様々な苦難に対処するなど人生は波乱万丈であった。

しかしながら運命はそんな彼女に、これまでにない大きな試練を課そうとしていた。

「あなた方はどう思いますか？この度の異常事態を？」

アナスタシアは、列席している閣僚たちに意見を求めた。

まず発言したのは、若い内務大臣のヤコフ・フォン・エッセンだった。

「極めて信じられないことですが、我が国とハワイ王国を除く周辺

諸国が消滅したのは、ほぼ間違いの無い事実のようです。カナダとの国境監視所からは、一瞬でカナダ側の陸地が消滅し、海になったと報告されています。私も最初は耳を疑いましたが、複数の監視所から同じ報告が届いている以上、信じざるを得ません」

そこで彼は区切ると、国内のことも言及した。

「なお、現段階では厳重な報道管制を敷いているので、国民にパニックなどは起きていません。しかし、カナダが消滅している以上、早々に国民が騒ぎ立てるのは時間の問題です。その場合の対処法を考えておくべきでしょう」

続いて建国以来（東露西亞帝国の建国は1921年1月1日）の老練な外務大臣であるレオニード・フォン・ローゼンであった。

東露西亞帝国の政治体制は、大日本帝国に近い立憲君主制であるが、天皇が君臨すれども統治せずの道を行っているのに対して、この国では皇帝がそれなりの発言権を持っている。

しかしながら、そもそも国の全体人口が100万を超える程度の規模で、しかも建国を支えた閣僚や政治家、国民は皇帝に対して忠誠を誓っていた。

そのため、これまでに数度行われたソ連の侵攻を跳ね返すことも出来たし、政権が転覆することもなく、選挙を行ってもほぼ同じ人間が当選していた。

ただし、さすがに建国から20年も経てば人間の方にガタが来てしまう。現首相のスカルスキーは1933年に就任しているし、エッセン内務大臣も3年前に前任のクロムキンが病気で政治活動が継

続不可能となつたための就任であつた。

「外務省としましても、この異常事態に対処するのに四苦八苦しております。海外の大使館や領事館との連絡はハワイ王国を除いて全く取れません。カナダは言うに及ばず、日本や満州、イギリス政府とも連絡が取れなくなりました。それらの国から発信される電波もです。しかしながら、これまでにない周波数での受信がありますが、ハッキリ言つて理解出来ないものでして」

続いて国防大臣のコンドラチエンコが発言する。

「軍におきましても、この異常事態への対処を急いでいます」

コンドラチエンコに促され、参謀総長のルイブキン大将が口を開いた。

「現在太平洋上で活動中でした全艦艇、ならびに全部隊へ即時作戦中止を命令し、現状維持を厳命しております。なお、満州や日本などにいた艦艇や部隊との連絡は大使館などと同じく取れておりません。加えて中部太平洋では我が軍の艦隊が既に国籍不明の艦隊と接触しております。その件に関しては、昨日の御前会議で報告したとおりです。また国内の偵察部隊がソ連並びにカナダを搜索しましたが、何も発見できておりません」

その後も各官僚から報告が相次いだ、重要な報告は以上のものであつた。

全ての報告を聞き終えると、アナスタシアは口を開いた。

「わかりました…ところで、仮にもし我が国に接触してきた日本国

の言つとおり、我が国が異世界へと飛ばされてしまっているならば、どう対処するべきだと皆は思いますか？」

その言葉に、閣僚たちは顔を見合わせた。

まずルイブキン参謀総長が発言する。

「陛下、確かに昨日から理解できない事象が連続しているのは私も理解しております。しかしながら、だからと言って我が軍が異世界へ来たと言つ証拠にはなりません。アメリカやソ連の謀略という可能性もあります」

その言葉に、コンドラチエンコ国防大臣も頷いて賛成した。他の大臣からもほぼ同じような意見が出る。ただ1人、若いエツセン内務大臣のみが彼らとは違う意見を出した。

「確かに容易には信じられませんが、既に起きていること自体が常識では推し量れるものではありません。異世界へ飛ばされるといふのは俄かに信じ難いことですが、可能性としては捨てるべきではないと考えます。それに相手が接触を求めてきているのなら、まずは受け入れるポーズを示すべきでは？……ヒロセ侍従長。あなたはどう思いますか？」

エツセンの言葉に、参加者全員の視線が1人の隻腕の老人に向けられた。

「おやおや。この老骨に意見を求めるのかね？」

「侍従長。私からもお願いするわ。あなたの意見を聞かせて？」

「私かもお願いいたします」

「陛下と首相閣下から頼まれては仕方ありません……私としては、エッセン大臣の意見を取るべきかと。もちろん、これは個人的な感情はありません。彼の言うとおり、今や何が起きてても可笑しくない。その状況下で、我が国と話し合いがしたいと言っているのです。もちろん、それ相応の備えはしておくべきでしょうが、平和的に話し合いを求めているのに拒むようでは、あの赤い独裁者と同じです。話を聞くべきだけなら宜しいかと」

老人ははつきりとした声と言葉で、そう言い切った。

「わかりました。首相はどう思いますか？」

皇帝の言葉に、首相は一礼すると言った。

「侍従長の意見に賛成いたします」

この瞬間、東露帝国の方針は決まった。

御前会議が終わり、閣僚たちが戻っていく中で、隻腕の侍従長はエッセンに近づいた。

「あまりワシに意見ばかり求めるなよ、ヤコフ」

「わかっております。タケオ先生」

エッセンにそう言われた広瀬武夫侍従長は、我が子を見るように微笑んでいた。

同日布哇王国首都ホノルル 帝国海軍中部太平洋艦隊司令部庁舎  
長官室

多くの艦艇でひしめき合っている真珠湾のすぐそばに建てられた  
中部太平洋艦隊の司令長官室に、1人の男が訪問していた。

「これはようこそカメハメハ陛下」

と部屋の主である司令長官は恭しく出迎えたが、出迎えられた方はフランキーな態度で返す。

「よせよ堀。今は俺たちだけなんだ。昔のように呼び合えばいいじゃないか」

現ハワイ国王カメハメハ6世は、笑いながらそう言う。それに対して、堀悌吉大將は苦笑いしながら席を勧める。

「変わらんね。まあ座れよ」

2人はソファアに座った。

「で、今日ここに来た用向きは何だ？」

「久しぶりに海軍の臭いが吸いたくなってね。どうも俺には宮殿にいるのが性に合わんようだね」

カメハメハ6世、日本名南洋豊仁は帝国海軍退役少佐であり、堀や山本五十六と同期生であった。そのため、堀や山本とプライベート

トな時にはこんな軽口を叩き合っていた。

もっとも、彼自身はハワイ国王としての職務を忠実にこなしていたし、また日本の皇族を妻に娶っただけあって、公式の場での行いは弁えていた。

「現役に戻りたいなら何時でも推薦状を書いてやるぞ。もっとも、ハワイ政府の連中が絶対に認めないだろうがな」

「海兵にいたころが懐かしいよ」

「確かにな。で、本題は何だ南洋。昔話をしにきたわけじゃあるまいし」

「言わなくてもわかってるだろ。昨日から起きていることについてだ。国民はまだ知らんが、いずれ知るのも時間の問題だ」

「だろうな。こっちも今大騒ぎだ。日本本土どころかトラックやマリアナとの連絡すらつかん。それでもつて訳のわからん艦隊や航空機の接触到放送の受信だ。本当に異世界に飛ばされたのかもしれないぞ。今搜索艦隊の出動を考慮中だ。それで、お前としてはどうして欲しいんだ？国内の治安維持に力を貸せとでも？」

「違う。それなら王室親衛隊や我が軍でなんとかなる。問題はお前の国と東露軍だ。知つてのとおり、わが国は両軍の駐屯を認め、我が国の国軍の数十倍の戦力が展開している。これもそれも、ソ連やアメリカの脅威に対抗するためだ。しかし、その脅威が消えたとなると、言わずもがなだ」

「なるほど。つまり、我が軍の暴走を気にしているわけか？安心し

る、我が艦隊はそんなことはせん。少なくとも、俺が指揮官である限りはな。山口君や伊藤君だって、そんな破廉恥なことをする人間じゃない」

「だが陸軍はどうだ？どうも俺は陸軍の連中が好かん。第一満州事変を起こしたような輩だぞ。まあ、前の司令官の本間中将はそれなりに信頼できる人だと思うがな」

帝国陸海軍の仲の悪さは有名だが、海軍出身であるカメハメハ6世は当然海軍の肩を持っていた。

現在ハワイには陸軍の1個師団が駐屯しており、その編成はハワイ王室陸軍よりも強力であった。

「なるほど。わかった。後で陸軍の連中も集めて、王宮へ行こう。そこでちゃんと軽拳妄動を慎むように言わせるさ」

「悪いな」

「もつとも、新しい司令官の栗林中将だって悪い人じゃないさ。彼はアメリカ留学の経験もあるそうだからな。しかし、ちょうど交代の時にこんなことになるとは。2人とも運の悪いことだ」

「そうは言うが、一刻も早く対処しないと手遅れになりかねんからな。それじゃあ、そう言うわけだから後は頼むぞ、中将閣下」

「では後ほど王宮でお会いしましょう。国王陛下」

来た時と同じく、カメハメハ6世は軽く挨拶を交わすと出て行った。もつとも、廊下に出たときにはピシッと王族らしい表情になっ

ていたのだが。

それから1時間もしない内に、堀をはじめとする帝国海軍の司令官、ならびに栗林と本間をはじめとする帝国陸軍の司令官がハワイ王室王宮へと向かい、各部隊が軽拳妄動を起こさぬよう確約することとなった。

東露帝国転移編 5 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 上(前書き)

当小説は本編に一度6月20日に投稿したものです。

## 秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 上

3年目 6月24日 布哇王国・王都ホノルル郊外

「律子!」

「愛ちゃん!」

「「「お誕生日おめでとう!」」」

ここは常夏の島布哇。日本人にしてみれば、転移によって一度は二度と来れない場所となった夢のリゾート地であった。

しかし2年目に起きた転移現象によって、そのハワイの方が転移してきてくれた。ただし時代と世界が全く違っていたが。それでもその後日本と布哇王国の間に友好条約が結ばれた。

さらに戦争の危機が去ったことによって、転移前はオアフ島を中心にして日露軍（一部布哇王国軍）の軍事施設が多数点在していた。

しかしながら転移による戦争の終結によって、それらの多くが民間転用された。そのため、ハワイ諸島はかつての日本がいた世界と同じく常夏のリゾート地へと徐々に変貌しつつある。

転移前の時点でも、軍人向けにリゾートや娯楽施設が大分発展していたが、現在はそれらを基礎にして新たに参入した日本やロクシエ等の資本によって開発が進んでいる。

既に元軍用飛行場を拡張した国際空港が稼動しており、日本やロ

クシエ・サクラス・東露帝国からの定期航路も設置されていた。

そんな布哇の王都ホノルルの郊外、とある日本資本のリゾートホテルの広大な庭で、2人の女性の誕生日会が盛大に開かれていた。

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

お祝いを受けたのはお下げ髪的眼鏡を掛けた女性と、そして元気凛とした少女であった。元アイドルの秋月律子と現役アイドルの日高愛の2人である。

6月23日は律子20歳、そして25日は愛16歳の誕生日である。そのため、間の24日に2人のための盛大な誕生日パーティーが開かれていた。

「おめでとう律子姉ちゃん、それに愛ちゃん」

2人の側に、秋月涼がやってきて祝福の言葉を掛けた。涼は律子の従姉弟にして、愛の同期のアイドルであり彼氏であった。

「ありがとうございます！涼さん！」

「ありがとう涼。それにしても、あんたたちまださんづけで呼び合ってるの？」

恋人関係にありながら、未だに互いにさんとちゃん付けであることに、律子は呆れ顔となる。

「うん。どうも呼び捨ては、言い難くて」

「あたしも、涼さんと同じです」

「たく、付き合い始めて3年にもなるのに、何やってるんだか。まあ、口で言う割にはお熱いみたいだけどね。じゃなきゃ9月には結婚式なんてことにはならないでしょうし」

「・・・」

既に公になっているが、涼と愛は付き合い合っている。付き合い始めたのが転移直後のことなので、かれこれ3年近くだ。巷の噂では、愛は舞と同じこと（16歳で出産）をする気だと言われたが、今の所そんな兆候はない。

そんな兆候はないにしても、2人が周囲から「リア充死ね」「涼ちゃんもげろ!」と言われるほどにバカップルぶりを発揮して、間もなく結婚するのは事実だ。

それはともかく、律子に弄られる涼はなんとか反撃を試みる。

「そう言う律子姉ちゃんはどうなの？誰か付き合い合ってる人とかいるの？」

「生憎まだよ。Pは結局春香を選んだし、祐太郎君もやよいと付き合い始めたから、まず同年代で仲の良い男を探す方が大変よ・・・けど、私はプロデューサー業に専念したいから、今のままで良いんだけどね・・・それよりも涼、この私に反撃を試みるなんていい度胸しているわね？」

「!?!」

「随分偉くなったわね。フフフフフフ……良いのかなあ？涼が子供の頃に体験した恥ずかしいことを、小鳥さんに同人誌のネタとして提供しようかしら？」

律子がイジワルな表情を浮かべる。

765プロ事務員の我那覇（旧姓音無）小鳥は、結婚した後も札付きの腐女子だった。彼女に同人誌のネタにされたら最後……

「ぎゃおおおんん!!!ごめんなさい!!!それだけは勘弁して!!!」

従姉弟に全く頭の上がない涼であった。

「うわああ。涼さんは相変わらず律子さんに頭が上がりませんね。ここは私が助けないと!」

と、そんな3人に声を掛けてくる人影があった。

「愛さん、お誕生日おめでとつござます!」

「愛、誕生日おめでとつ!」

「あ、リリアさんにトレイズさん。ありがとうございます!今日はわざわざ来てくれてありがとうございます!」

やってきたのはリリアーナ・シュルツとトレイズ・ベインの2人だった。

「あたりまえでしょ。わざわざ飛行機のチケットまで一緒に送ってくれたのに、断るなんて出来ないわ」

「それにちょうど日本にいたことだし。ロクシエにいたら、さすがに考えたかもしれないけどね」

現在2人は、ジェット機の操縦を習うために今年の4月から日本の航空自衛隊に留学中であった。そのため、ハワイまでは愛たちと一緒に飛行機で移動してきた。

「涼、久しぶり」

トレイズが涼に声を掛ける。2人は愛を通じて面識があった。

「お久しぶりですトレイズさん。あれからリリアさんと上手く行ってますか？」

「まあね。涼こそ、いよいよ結婚式だね。羨ましいよ」

「おかげさまで。トレイズさんこそ、リリアさんと結婚する気なんじゃ？」

「まだ学校に通ってるから。今すぐってわけにはいかないよ。けど、いずれはね」

一方、その2人の相手はといえば。

「リリアさん。また今度一緒にカラオケ行きましょう！」

「いいわね！行きましょう！」

「私リリアさんが歌う水樹奈々の歌、また聴きたいです！本当にそっくりだから」

「ありがとう。けど、早くロクシエにもカラオケ出来ないかな？あればメグも誘えるのに・・・」

と2人が楽しそうに会話する一方、トレイズは律子と挨拶を交わっていた。

「トレイズさん、紹介します。こちら僕の従姉弟の秋月律子」

「初めまして律子さん。涼から話は窺っています」

「こちらこそ初めましてトレイズさん。イクス王国の王子様と会えるなんて、光栄です」

「アハハ。王位継承権はないんですけどね」

トレイズの存在が公にされた時、同時に王位継承権もないと発表された。もちろん、イクス王国の王女であるメリエルが戴冠不能になった場合は、代わりに指名されるかもしれないが、今の所その可能性はほとんどなかった。

そのため、トレイズはあいも変わらず普通の生活を謳歌していた。

ただし、その交友関係は普通ではなかったが。主に親のせいだ。

「本当だったらメイベルさんやアンリエッタさんにも来て欲しかった

たんですけど」

「仕方が無いよ愛ちゃん。メイベルさんもアンリエッタさんも公務があるから」

サラツと凄いことを発言する2人。メイベルはサクラス連合帝国の初代首相、アンリエッタはトリステインの女王様である。

「偶然とは言え、女王様たちと友人関係にあるなんて凄いわよね」

律子が呆れと驚きをミックスしたような声で言った。

「ところで、アリソンさんとヴィルさんの姿を見かけませんか？」

リリアの母であるアリソンと、父親であるヴィルの2人も参加すると涼は聞いていたので、その姿を参加者の中に見つけられず、首を傾げた。

すると、涼の言葉にリリアが答えた。

「それが2人とも、遅れるらしいわ。多分シュミットとハインのせいだと思うけど・・・あ、初めまして。リリアーヌ・シウルツです。あなたのことは愛や涼から聞いてるわ」

律子に気づいたリリアが挨拶をする。彼女らは初対面だ。

「初めまして。秋月律子よ。こちらこそ、あなたのことは涼たちを通じて聞いているわ。何でも歌が上手いんですってね？良かったらアイドルにならない？私がトップアイドルにプロデュースしてあげるわよ」

「律子姉ちゃん。何もこんなところで」

「それに、リリアさんはそんな気全くないですよ。以前ママが同じように誘ったけど、全く興味を示しませんでしたから」

「そうね。アイドルに興味がないって言ったら嘘だけど、私は今の生活に満足しているし。それに、やっぱり空を飛びたいし」

「それは残念ね。その水樹奈々そっくりの声なら売れること間違いないのに。スタイルもいいし」

「それだけじゃないですよ！歌も上手いんですよ！」

望外な評価に、リリアは顔を赤らめる。

「ちょっと愛、やめてよ。とにかく、私はアイドルになる気はありませんから」

「それにリリアはそんな柄じゃないし」

とトレイズがボソツと言うが、彼女はそれを聞き逃さなかった。

バシ！

「痛！」

「自業自得よ」

「あらあら仲の良いことで。まあ、私も無理やりアイドルをやらせ

る気なんかないから安心して。それにしても、飛行機を操縦できるなんてスゴいわね」

「まあ、ほとんどママのせいですけど」

リリアの母のアリソン・シュルツは現在は退役したものの、元空軍パイロット。リリアが子供の時に軍の燃料をちよろまかして彼女に飛行機の操縦を教えた結果が、今のリリアであった。彼女もレシプロの単発機程度なら簡単に操縦できる。

「そのママさんは、舞さんと仲がいいのよね？一体どんな人なのかしらね、舞さんと馬が合う人って？・・・そう言えば、舞さんと愛のお父さんもいないわね？」

律子が参加者の中に、愛の両親がいないことに気づいた。

「それが「ビックなサプライズイベントをやってやるから楽しみにしてなさい！」と言ってて。結局何をやるかまでは教えてくれなくて」

「そうなの。けど、そうなると妹さんと弟さんは誰が面倒見てるの？」

「結と正人なら、まなみさんが見てくれます。今はホテルの部屋にいるはずですよ」

結と正人は、愛の双子の妹と弟で今年2歳になる。そしてまなみは、日高舞の芸能界復帰後のマネージャーをしているが、相変わらず彼女に振り回される苦勞人である。

「まなみさん、さつきホテルの人から「可愛いお子さんですね」って言われて凹んでたけど」

涼が付け加える。まなみは今年23歳であるが、未だに独身であった。

「迷惑な話ね。それにしても、あの舞さんがビックなサプライズ？  
・嫌な予感しかないわね・逃げた方がいいかしらね？」

「「ええ!?!」」

と、律子が言ったものの既に手遅れであった。

キュラキュラ・・・

聞きなれない音が、パーティー会場へと近づいてきた。

「な、何!?!?て、きゃあ!」

「だ、大丈夫春香!?!」

春香がキョロキョロと首を回していたら派手に転び、それを見た千早が声を上げる。

「何か近づいてきているみたいねえ」

「お姉さま、冷静すぎ」

普段と変わらぬ物言いのあずさに、夢子が突っ込む。

「ねえ、トレイズ。この音もしかして？」

「もしかしなくてもキャタピラと、エンジンの音だね。こんな音を出す乗り物は……」

トレイズが口に出そうとした時、音が一層大きくなった。

ガガガ……

「「「戦車！！？？」」」

現れたのは1両の戦車……。らしき物体であった。車体上部の砲塔から砲身突き出し、全体を茶や緑、黒を合わせた迷彩色で塗装していた。さらにエンジン音を届かせて、車体両側のキャタピラで動いている姿はまさしく戦車だった。

が、しかし。

（（小さい！））

参加者の多くが心に抱いた感想であった。たしかに戦車のようだが、高さが人の身長より少しばかり大きい位であった。

そしてその小さな戦車は一同の前に止まると、エンジンを止めた。それからまもなくして、砲塔上のハッチが開いた。

「愛！誕生日おめでとう！」

「ママ！？何やってるの！？」

「何って？愛への誕生日プレゼントを持ってきたのよ！」

「と言うか、何それ！？」

愛の問に、舞は何事もなかったかのように答える。

「見ればわかるでしょ？豆タンクよ。正式な名前は確かヴィッカーズ6t戦車だったかしら？東露軍から放出されたのを、うちの会社で買い取ったのよ。1台をあなたに上げるから感謝しなさい。これで名実共に愛は「豆タンク」よ」

「いらぬよ！！そんなの！」

愛が泣きながら反論する。

「涼、あの人が義母になるのよ？大丈夫？」

「・・・多分」

律子は本気で従姉弟の将来を不安視し、涼は漠然とした答えしか返せなかった。

他にも周囲からは、様々な声が聞かれた。

「さ、さすが舞さん」

「やることのスケールが違うわね」

春香と千早が驚きと呆れを通り越した、困惑の声を上げる。

「なんとも面妖な」

と、現在の光景に百パーセントマッチする決め台詞を口にするのは、765プロのアイドルである四条貴音だ。

「ライブ会場に戦車で乗り付けたって話は聞いたけど、娘の誕生日にまで同じことするなんて、とんでもないな！」

「噂に違わない人だよ。それにしても、ヴィツカーズ67戦車か・・  
・俺としては日高愛にはガーデンロイドかL3の方がお似合いだと思うけどな」

我那覇響と八幡弘毅のカップルも、それぞれの感想を口にした。

「ところで、この戦車舞さんが操縦してきたんですか？」

涼が素朴な質問をする。

「お！さすが涼ちゃん。私が見込んだ男だけのことはあるわね。違うわよ。前の時と同じく、専門家に頼んだわ。あ、もうエンジン止めて出てきていいわよ」

そして、操縦席部分のハッチが開いた。

「やあ、こんにちは」

と言って出てきたのは。

「ぱ、パパ!？」

「ヴィルさん!？」

リリアとトレイズが素っ頓狂な声を上げた。操縦していたのは、リリアの父親であるヴィルヘルム・シュルツであった。

「いやあ、さすが元軍人さん。操縦が上手くて助かったわ」

「もうママたら、ヴィルさんまで巻き込んで」

母親の傍若無人ぶりに、愛は恥ずかしくなる。だが、そんなことで引き下がる日高舞ではない。

「いいじゃない、彼だってOKしてくれたんだから」

と、彼女は言うが。

「無理やり巻き込まれたと言ったほうが正しいんだけどね」

とヴィルが呟いたが、舞は全く聞こえなかったようにそれをスルーした。

「それに愛。この程度で終わると思ったら、それはあまりにも私達を見くびっているわ」

「ええ!?!まだ何かあるの!?!」

「もっちのろん!?!」

秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 上(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

## 秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 下

3年目 6月24日 布哇王国王都ホノルル郊外

いきなり戦車で、愛と律子の誕生日会会場に乗り付けてきた愛の母親である日高舞。それだけでもスゴイことなのに、彼女曰くまだ続きがあるとのこと。

（ ）（ ）（ ）一体何をやらかすつもりだ!？（ ）（ ）（ ）

と参加者全員が内心で不安を覚える。

そんな参加者達的心情を知ってか知らずか、舞は腕時計を眺めた。

「そろそろ来る頃ね」

と、彼女が空を見上げると、まるで図ったかのようにエンジン音とプロペラ音が聞こえてきた。

「え!?!」

「飛行機?」

涼と愛をはじめ、他の参加者も視線を空中へと向けた。

「しかも、この音はレシプロ機だ」

飛行機に詳しいトレイズは、すぐにその音が発するエンジン音を聞き分けた。また、彼のパートナーであるリリアも。

「あら？この音どこかで聞いた覚えがあるような」

そんなことを言っている間にも、音は段々と会場に近づいてきた。そして。

「あそこだ！」

最初にそれを見つけたのは、山育ちで目の良いトレイズだった。他の参加者たちが、一斉に彼が指差した方向へと目を向けた。

彼らの目に映ったのは、5機の小型レシプロ機の姿であった。その内2機が並行に飛んで先行し、3機がV字編隊を作って続行していた。

「あら？5機？確か2機だけの筈じゃ・・・」

舞が珍しく首を捻って怪訝な表情をする。しかし、その眩きと表情は空に目を向けてしまった皆には全く気づかれなかった。

そして先行する2機は高度を下げると、そのまま会場のほうへと向かって飛んで来た。

「あ！こっちに来る！？」

「何だ何だ！？」

驚き慌てる参加者達を尻目に、2機は低高度で会场上空を横切った。その機体の片方は尖った機首が特徴で、主翼と胴体には黒い十字の国籍マークが描かれていた。もう1機は機首が丸く、濃緑色の

塗装に鮮やかな日の丸が描かれていた。

「皆伏せ・・・てきやあ！」

どんがらがっしょん！

「春香、こんな時にまで何をやってるのよ！」

「伊織ちゃん、落ち着いて！」

「あわわわ！穴掘って隠れないと！！！」

「雪歩ちゃん、それはもう手遅れよ」

「これはマジでヤバイ？」

「先輩、早く逃げまショウ！」

「一体何が起きてるのよ！」

765プロと876プロのアイドルたちは、もう大パニックだ。

そんな中でも、冷静な面々はしっかりと観察していた。

「トレイズ！右の戦闘機はママが操縦してたわ！」

「何だって！」

トレイズも驚きを隠せない。

そして涼は、そこであることを予想する。

「じゃあ、もしかして左のゼロ戦は……」

「そうよ涼君。あつちは正道さんが操縦してるわ!!」

舞が誇らしげに言う。

「ええ!? ちょっと、パパも何やってるのよ!??」

「まあ見ていなさいって」

混乱する面々とは対照的に、舞は自信満々の表情であった。そしてヴィルは苦笑いしながら、上空の2機を見守っていた。

その2機は今の低空飛行から一転して、急上昇していた。

同時刻 上空

「いやあ！リリアちゃんもトレイズ君も驚いていたわね」

低空を飛行を行って地上にいる人たちを驚かしたアリソンは、御満悦のようだった。その声を無線越しに聞いていた日高正道「二等空佐は、呆れながら返す。」

「アリソン、君が舞と馬が合う理由が良く分かるよ」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

「にしても、まさかこんなことになるとは」

正道は、自分たちの少し後方を旋回している3機の「烈風」艦上戦闘機の方を見る。今正道たちが乗っている機体とは違い、向こうは正式な海軍機であった。

「フッフ。参加者が多いならそれに越したことはないじゃない」

「そう言う意味じゃなくてだね」

「とにかく、予定通り始めましょう」

「わかったよ。それじゃあ君は右、私は左だ。くれぐれも気をつけて」

「そっくりそのお言葉お返しするわ。それじゃあ」

「スタート！」

二人は機体に設置されているスモークの発生装置のボタンを押した。

「あ！？煙を出した！！」

「何かを描いてる？」

涼と愛は空を見上げながら、2機の飛行機の行動を見守っていた。

最初は単なる曲線であるかのように見えたスモークが、徐々に何かの形へと変わっていく。空という雄大なキャンパスに、2機の戦闘機は自らを筆にスモークを絵の具にして作品を描き上げる。

「なるほど。そう言うことか」

空に描き上がった物を見て、律子が舞の言葉の真意を悟った。

「へえ」

「綺麗」

アイドル達も空に描き上がった物に、溜息を吐く。

「スゴイ。こいつはブルーインパルス並みの腕だ」

響の相手である八幡が少しばかり違う感想を口にしていたが、実際空にスモークで絵を書き上げるにはそれなりに腕が必要であった。

「ハ、ハート・・・あれが、パパからのプレゼント？」

「そうよ。パパから愛へのプレゼントよ。まあ、提案したのはアリソンだけだね」

「ママったら」

舞の言葉に、リアが顔に手を当てる。だが、愛は途端に表情が笑顔になる。

「ありがとうママ！こんなプレゼント、初めて！」

「喜んでもらったのなら良かったわ。この日のために、パパはうちの会社の飛行機を使って、アリソンと練習してたんだから」

「あれ？けど正道さんは確かロクシエの大使館勤務でしたよね？」

律子が疑問を口にした。

「そうよ。向こうにも支店があるから。空いた時間にアリソンと訓練してたの」

「さすがはアイドル界を席卷した日高舞とその旦那さんに友人ね。やることが伊達じゃないわ」

舞の言葉に、律子が感嘆の言葉を口にする。

「遅れて来るって言うのはこう言うことだったんですね？」

「そうよ涼君。愛には知られなくなかったから、黙っていたけどね」

「けど、これでアリソンさんたちも遅れてくる理由もわかりました。・・ところで、あつちの3機は誰が乗っているんですか？」

「それがわりからないのよね。予定じゃ正道さんとアリソンの2人だけの筈なんだけど」

「え！？舞さんも知らないんですか？」

涼は驚かすにはいられなかった。

それから間もなくして、3機の戦闘機も動いた。彼らは正道とアリソンのように、スモークで空に何か絵を描くようなことはしなかった。

その代わりに、3機揃っての連続宙返りを3回おこなった。

「スゴイ！3機揃って連続宙返りだなんて」

「よっぽど腕のいい人が乗っているんだろうね」

自らもパイロットであるリアとトレイズは3機の動きからパイロットの腕の良さを推測した。

3機の戦闘機は、連続宙返りを終わると正道とアリソンたちの戦闘機に翼を振って挨拶して、飛び去っていった。

一方正道とアリソンの乗った機体は高度を下げた。

「あれ？あの2機は飛行場に行くんじゃないんですか？」

「まさか。それじゃあ愛と律子ちゃんを祝えないじゃない」

涼の疑問を、舞は笑い飛ばす。

「もっとも、私の誕生日はもうほとんどオマケですけどね・・・けど、それってつまりあの2機はここに着陸すると？」

「「「！？」」」

律子の言葉に、舞とヴィル以外の全員が固まる。

「まあ、そうしても良かったんだけどね」

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

舞の言葉に、その場にいる全員そう突っ込まずにはいられなかった。

「でもそれじゃあ、私も巻き込まれちゃうから。目の前の道路に着陸するわ」

「いいんですか？そんなことして？」

涼の突っ込みに、舞は平然と答える。

「大丈夫よ。この道はホテルの私道だし。今の時間は封鎖してもらってるから」

彼女の言うとおり、まもなくホテルの側の道に2機とも着陸した。道路脇に設置されている電柱にぶつけることなく、見事な着陸であった。そして2機は、そのまま滑走するとパーティー会場すぐそばの駐車場に停止した。

「さ、愛。パパを迎えに行くわよ」

「おう！涼さんも行きましょう！」

「うん」

「私たちもママを迎えに行きましょう。パパ、トレイズ」

「ああ」

「そっだね」

5人が駐車場に着いたのは、ちょうど正道とアリソンの2人がコクピットから出ようとしている時であった。

「パパ!!!」

「愛!!!」

正道が地上に降りると、愛が駆け寄った。

「パパ、素敵なプレゼントをありがとう!」

「喜んでもらったのなら良かった。あと、アリソンさんにも礼を言っておけよ」

「うん、わかった!」

愛はトレイズとリア、それにヴィルが出迎えているアリソンの方へと走って行った。

「あなた、お疲れ様」

「ああ。それにしても舞。お前本当にあれで乗り付けたんだな」

「いいでしょ？愛にプレゼントする奴なんだから」

「ありがた迷惑じゃないのか？」

妻との問答を終えると、彼は涼の方を向いた。

「やあ涼君。わざわざ出迎えありがとう」

「いえ。ところで、この飛行機は舞さんの会社の飛行機ですよね？」

「ああ。舞が軍から払い下げられたのを買ったのだよ。旧海軍の零式艦上戦闘機33型だ」

「あんまり詳しいことはわかりませんが、舞さんの会社って今どれくらいの数の飛行機を持っているんですか？」

「うーん。今エア・スタント用の機体はそこら中で引つ張り嵐だし。舞の場合金にだけは苦労しないからね。全ての支社をあわせれば100機はいくかも」

「ねえねえ正道さん。いい加減自衛隊なんか辞めてうちの会社に入りなさいよ。給料は2倍にするから。というか、この会社は正道さんのために作ったのよ」

舞は現在日高プロと言う芸能プロダクションを開いているが、アイドルの育成はあまり熱心にはやっておらず、代わりに重点を置いているのがカー・スタントやエア・スタントの仕事であった。

転移後ロクシェやサクラスに対して経済的に優位に立った日本で

は、その豊富な資金力によって映画やドラマの制作費が格段に増加した。

それまで低予算でチャチなCGに頼らざるを得なかった様々なシーンを、実写で撮影できるようになり、映画関係者は泣いて喜んだ。

そして、これまで色々と茶々を入れてきたお隣の半島国家や赤い大陸国家が消え、さらには前の戦争から70年以上も遠ざかったこともあり、広大なサクラスやロクシエ、トリステイン近海等を撮影場所にした戦争映画が何本も製作されるようになった。

舞はこの機を逃さず、映画用のエア・スタント会社を作った。もっとも、その目的は夫である正道を自分の側に置いておきたいだけであつたが。

しかし、この目論見は未だ成功していなかった。

「いや、身内のお前に給料増やされても仕方がないだろ。それに自衛官は俺の天職だから、辞めないよ。いいじゃないか、アリソンが入ってくれたんだから」

「確かにそれはそれで良いんだけどね」

正道は舞の誘いに乗らなかつたが、代わりにアリソンが誘いに乗った。彼女は堅苦しい軍よりも自由に飛べるこの仕事を選んだのであつた。

「まあまあ。舞さんもあまり無理強いしちゃいけませんよ」

涼が仲裁に入った。そして彼は、話題を変える。

「ところで、向こうの飛行機は形も塗装も違いますけど?」

涼がアリソンの乗っていた機体を見ながら言う。

「ああ、あれは今度撮影する「レッドサン・ブラッククロス」とか言う戦争映画の撮影用だよ。機種は三式戦闘機の「飛燕」だけど、塗装だけはドイツ軍仕様にしたんだ」

「あ、その映画なら僕にもオファーが来てます」

「あら、そうなの?」

「ええ。愛ちゃんにも確か「ママ! パパ! 涼さん!」

愛がリリアたちと一緒に戻ってきた。

「何? 愛ちゃん?」

「早く戻りましょう。パパやアリソンさんも来たことですし、そろそろケーキを食べましょうよ」

「うん、そうだね」

「折角だから、お互いにアーンして食べましょうか?」

「ええ!?!」

そんな愛を、舞は呆れながら見る。

「やれやれ。愛たら涼君に首ったけね」

「けど、彼なら愛を任せて置けるだろうさ」

「そうね。けど、あなたは愛を取られて寂しくないの？」

「寂しいに決まってるじゃないか・・・」

「そう・・・じゃあ、自衛隊辞めて私の会社に入っつと一緒  
いましょう!!」

「まだ言うか!?!」

舞がそれまでの雰囲気全てぶち壊した。しかしながら、彼はそ  
んな妻や娘に優しげな表情を向けていた。

「と、愛に大事なことを言うのを忘れていた」

「え?」

「お誕生日おめでとう!..愛」

「あ、ありがとうパパ!!」

おまけ 1

「私、なんか後半忘れられちゃってない？」

目を細めて作者を睨む律子。

「ハハハハ・・・そんなことないよ。律チャンはシュジンコウデスヨ」

「・・・」

おまけ2

「そう言えば正道さん」

「なんだい涼君？」

「さつき一緒に飛んでいた戦闘機はどここの飛行機だったんですか？」

「ああ、あれはだな・・・」

同時刻 海軍飛行場

「坂井大尉、大田飛曹長、西澤中尉。哨戒飛行をほつたらかして何をしとつたか!？」

「ハッ! 笹井中佐。ちよつとばかり寄り道を。しかし、先方からは非常に感謝されましたよ」

「坂井大尉、あなたももう少し士官としての自覚を持ってくださいよ」

おまけ3

「舞さーん！アリソンさーん！早く戻ってきてください！！もうこれ以上4人の赤ちゃんの面倒は見切れません！！」

悲鳴を上げる岡本まなみ23歳、独身。

彼女の元に舞とアリソンがやって来た時、彼女は燃え尽きる寸前だったとか。

おまけ4

「わー！愛ちゃんストップストップ！」

「キャアアア！！！」

ガシャン！

「ああ、またぶつけちゃった。やっぱり戦車の操縦て難しいですね、涼さん」

「そうだね。けど、愛ちゃんが戦車を受け取るとは思わなかったな」

「折角もらったんですから、使わないと勿体無いです！」

その後愛はプレゼントされた6t戦車の運転を、数ヶ月掛けてマスターしたという。

おまけその5

「全くトンデモナイ誕生日になっちゃったわね律子」

誕生日会の翌日、律子は竜宮小町の面々と一緒にホノルルの町へと繰り出していた。

「本当よ。舞さんとアリソンさんのテンションにはついていけないし、涼は完全に慣れきってるし」

「まあまあ律子ちゃん、そつ気を落とさないで」

「そつだよ。今日は亜美たちとショッピングを楽しもう楽しもう！」

「そつさせてもらつわ」

ドン！

「あ、ごめんなさい！」

「いえ、こちらこそ・・・！？」

「！」

目と目が逢う瞬間、好きだと気づいた。

秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 下(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

## 世界を翔けるアイドル 1 (前書き)

アイマスのアニメに感動して書いたら、765プロのキャラが出てこない罫。

## 世界を翔けるアイドル 1

転移4年目8月 日本・東京 日高プロ東京支社

「「「暑い!」「」」」

真夏のある日、東京にある日高プロ東京支社内にアイドルやプロデューサー達のダレ切った声が響く。

「仕方が無いでしょ。クーラーが故障したんだから。これでも転移前の夏よりは遥かにマシなのよ。それに暑い暑い言わない。余計暑くなるでしょうが」

アイドル達に苦言を呈するのは、支社長の石川実だ。暑い中でもスーツをピシッと着こなしているあたり、さすがはプロであった。

「ご、ごめんなさい。うー、これくらいじゃ負けませんよ!」

と暑さにもめげず、元気に言うのは高槻かすみ。765プロで活躍する高槻やよいの妹だ。今年14歳になる彼女は、かつての高槻やよいを内外ともに彷彿とさせる。

「けど支社長。本当に暑いんですよ!」

と文句を言うのは、現在日高プロ東京支社で研修中のプロデューサー高木祐太郎だ。現在19歳になる彼は、本来765プロのプロデューサーであるが、現在はこちらに出向中であつた。

なお彼と付き合っているのが、かすみの姉のやよいだ。

「全く、最近の若い子は本当には堪え性がないんだから。涼や愛や絵理はもつと我慢強かったわよ」

と石川は日高プロの前進である876プロの古株アイドルたちの名前を出す。

「あの人たちと比べないでくださいよ。それに桜井さんや鈴木さんたちと一緒に、今頃サクラスでのライブツアーでしょ！？いいなあ」

「高木Pの言うとおりです。先輩たちが羨ましいです。こつも暑いと本当に死んじゃいますよ」

祐太郎が続いて、どこか醒めた感じの少女も不満を口にする。

「あらあら。あの春日さんの娘のあなたも弱音？」

「あの無茶苦茶な母と兄と一緒にしないで下さい！私は極普通の人間なんですから！！」

と文句を言うのは、春川響子。通称キョン子。現内閣総理大臣春川響の娘にして、俗に「次世代の閣下」と呼ばれる新人アイドルだ。

母親の春日と双子の兄の春彦がぶっ飛んだ行け行けタイプなのに対して、彼女は父親と同じく地味な冷静タイプだ。どう考えてもアイドルには見えないのだが、涼やかな目元と醒めた所が「イイ！！」と言うファンが続出し、最近では「彼女のことを次世代閣下と呼ぼうぜ」とまで言われていた。

ちなみに先代は、765プロの天海春香のことだ。

「だいたいアイドルだってなりたくてなったわけじゃありません。舞さんに誘われて無理やり引き込まれたものなんですか。たく、迷惑なことこの上ない」

「ほう。誰が迷惑ですって？」

「だから舞さんが……え!？」

キヨ子が目点になり、次の瞬間には顔から血の気が引いた。周囲の人間も戦々恐々な表情となっている。

キヨ子が恐る恐る振り返ると、案の定そこには日高舞が立っていた。

「「「ま、舞さん(社長)！?」「」」

「そつよ」

「どうして!？今日東京へ来るなんて連絡はなかったんじゃ？」

「うん。だってしてないんだもん！」

石川の質問に、平然と答える舞。

「（この人は!）」

気まぐれ大魔王である舞の行動に、皆もう何も言えなかった。

「で、どうしたんですか？ここに来るなんて珍しい」

「そうそう。実は家の会社に新しい人が入ったから紹介しにきたの」  
「新しいアイドルと言うことですか？」

「違う違う。まあ新しいアイドル候補も見つけたんだけど、生憎そ  
うちはロクシエ支社だったから。今日連れてきたのは航空部門の新  
人さんよ」

日高プロは、舞が夫の正道用に作った会社だ。プロダクションと  
名前がついているが、実際の所はエア・スタントやシー・スタント  
をやる会社として設立された。そのためそれらを行う航空部門や海  
上部門は彼女の友人であるアリソン・ウィッティングトンをはじめ  
とする優秀なメンバーで固められている。

装備も、ロクシエ軍や東露軍から放出された戦車や装甲車だけで  
も1000両以上、飛行機も100機以上、艦艇も戦艦を含めて5隻  
を持っている……どこの軍隊だ！？

ただこうした装備のおかげで、臨場感溢れる戦争映画やアクション  
映画が撮れるとあって、その手の方面からの評判だけは良かった。

しかしながら、当の正道はそれに興味を示さず未だに自衛官をや  
っている。

一方アイドル部門は、その名前の通りアイドルが所属している部  
門であるが、当初は舞もやる気がなく名前だけの部門であった。現  
在は876プロの石川の合併要請によって、同社を吸収する形でそ  
れなりの活動をしていた。

「そうなんですか。それで、その新しい人とは？」

「ああ、紹介するわ。東露帝国空軍出身のリリーさんよ」

すると舞の後から、1人の少女が出てきた。

「初めまして。リリー・リトヴァグです」

「あら？中々可愛い人じゃない」

「残念だけどアイドルになる気はないそうよ。彼女はスタントパイロットとして入社したんだから」

すると、裕次郎が反応する。

「へえ。じゃあ、飛行機を操縦できるんですか!？」

「もちろん。これでも空軍の戦闘機パイロットでしたから」

一方石川は残念そうだ。

「勿体無い話だわ。あなたには何か感じるところがあるんだけど。リリアさんといい、アイドルの原石はそこら中にあるんだけどね」

「あきらめなさい、みのりん」

「わかりました。それで、リリーさんを紹介しにきただけですか？」

「ううん。実はあなた達に仕事を持ってきたのよ」

「仕事ですか？戦争映画かアクション映画の？」

「違うわ。イメージガールの仕事よ。今度行われるワールド・エア・カップの話聞いているでしょ？」

「ええ。ニュースでやっている程度には……たしかサクララスを出発して、ロクシエ、日本、布哇を経由してアラスカへと飛行機でレースするあれですよね？」

「そうよ。その大会のイメージソングを歌うのと、開会式と閉会式での余興をうちと765プロダクションが任されたわけ」

「……ええ！！？？」

いきなりの大仕事受注発言に、全員驚きを隠せるはずがなかった。対して舞はニコニコと嬉しそうだ。

「いやあ、やっぱり皆驚いたわね。秘密にしてきた甲斐があるってもんだわ」

「ちょっと舞さん！幾らなんでもいきなりすぎます！支社長の私にも秘密だなんて酷すぎます！」

「まあまあ。ちゃんとその分の穴埋めはしておくから……そう言うわけで、明後日には出発するから皆準備しておいてね」

「……えええ！！？？」

「どうせ8月で皆夏休みで学校は休みでしょ？それに、さつき暑い暑いて言っていたじゃない。安心なさい。今回行くのは涼しい所よ」

「そ、そんないきなり言われても」

「うっうー。困っちゃいます!」

「父さんの言うとおりのハチャメチャな人だ」

「はいそこ。文句を言っていないで、ちゃんと来なさいね。こないと、この世からあなたたちの存在、抹消しちゃうぞ!」

語尾にハートマークが付きそうな言い方だが、目は笑っていないかった。

「「「い、イエッサー」「」」

その光景を、リリーは呆然として見ていた。

「ちょ、ちょっとそこのあなた?」

「あ、私ですか?」

リリーが声をかけたのはキョン子だった。

「日高社長て何時もあんな風なの?」

「知らないんですか?」

「ええ。私採用されて半年たったけど、ずっとサクラスにいたから社長と会うのは今回が初めてなのよ」

「そうなんですか。あの人は何時もあんな感じですよ」

「うーん・・・私就職する会社間違えたかな？……けど、軍を除けば他に良さそうな会社なかったし」

「御愁傷さまでです。どうしてリリーさんは家の会社に？」

「私は東露帝国空軍のパイロットだったんだけど、戦争が終わって軍縮になって……軍隊生活もあまり水に合わなくて。それで結局除隊になっちゃって。けど、戦闘機を操縦する以外に能がないから」

「そう言うわけですか」

「そのこの2人。何を話してるのかしら？」

目ざとい舞がおしゃべりをしている2人を見つけた。

「ちょっとした身の上話ですよ」

「そう。まあ、とにかくそう言うわけだから。明後日朝9時に羽田空港に集合ね」

「「「はい！！！」」」

2日後、日高プロの一行は機上の人となった。行き先はロクシエ連邦の首都であった。

「どうしてロクシエに寄るんですか？普通に直行便でサクラスに向かえばいいじゃないですか？」

「ふふふ。それはねキヨ子ちゃん。実はそこで会う人がいるのよ」

「「「会う人？」」」

「そう。我が日高プロの大事なスポンサーよ」

日高プロの一行は、舞の思惑を掴みきれなかった。

そしてロクシエ首都に到着すると、そこで先着していたリリーと合流し、彼女が操縦する四発の飛行艇へと乗り換えた。

「一体どこへ行くつもりなんですか？」

あまりにも不可解な行動に、ついてきた石川が舞に尋ねる。

「イクスよ」

「「「イクス？」」」

石川以外の面々が声を上げた。

「あら、知らないの？ロクシエを構成している小さな国よ。冬は寒いんだけど、この時期は避暑地として最適なの」

「なるほど、そう言うことでしたか。確かに、我がプロダクションとしては挨拶に窺わないと失礼ですね」

「どういづことですか、支社長？」

「ああ。高木Pはまだ知らなかったわね。実はイクスの女王様と殿

下とはいろいろあつて舞さんと知り合いなの。それで、あの国でうちの会社がやるイベントとかあるとそれなりに便宜を図ってもらえるわけ」

「それはまたスゴイ話ですね」

「まあ、あの舞さんだからね。それに知っていると思うけど、舞さんと愛はサクラスやトリステインの女王様とも面識があるの。よく芸能界で、日高プロは芸能界どころか世界を征服できるって言われるのは、そういうことなのよ」

その石川の言葉に被せるように、不敵な笑みを浮かべた舞が言う。

「ふふふ。しかも今回はそれだけじゃないわ」

「どう言うことですか？」

「実はイクスには今765プロの秋月さんと、その彼氏に菊池さんと萩原さんがいるのよ」

「あら、そうなんですか。けど、確か秋月律子の彼氏って……舞さん。あなたごんだけ強力な味方をつけているんですか？」

石川はもはや呆れるしかなかった。

「強い味方が多いことに、越したことないでしょ？」

そう言う彼女は、どこか楽しそうであった。

世界を翔けるアイドル 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

1年目+3日目 北太平洋上海上自衛隊護衛艦「えちご」

「漁船が消息を絶った海域まで、あと60マイルです艦長」

「警戒を厳にせよ」

角松の言葉に、梅津は静かに命じる。

既に「えちご」をはじめとする各艦は北太平洋へと突入しており、波が高くなりつつあった。その中を、消息を絶った漁船の捜索を行うべく北東へと進んでいた。

「既に消息を絶った漁船や貨物船の数は20隻近くに達しています。今頃東京は大騒ぎでしょうな」

「そうだな。去年のあの時みたいにな」

梅津の言うあの時とは、ちょうど1年前の転移の時だ。その時梅津は神戸にある基地隊所属の第42掃海隊の司令だった。朝、混乱した市民からの問い合わせに追われていた基地の人間の様子や、その後直ぐに出された捜索命令など、今でも鮮明に思い出せる出来事だった。

「ところで艦長、後方から付いて来る巡洋艦ですが、このままで良いのですか？」

梅津らの部隊の後方2000mには、ピタリと日本海軍の巡洋艦

が2隻ついてきていた。

「まあ良からう。こちらの搜索を妨害しないならば、抗議をする必要もあるまい」

その時、CICから報告が入る。

「艦橋CIC。方位355。距離100マイル。艦数8。速力20ノット。単縦陣にて接近する艦隊を探知」

CICに詰めている砲雷長である菊池の声だ。

「CIC艦橋。艦種はわかるか？」

「反応からおそらく駆逐艦か小型巡洋艦クラス」

「どうしますか？」

「念のためだ。偵察にへりを出そう。出せるか？」

「確認します……とれました。波が大分高くなっていますが、今ならなんとか出せるそうです」

「よし。では直ちに発進」

「わかりました。SH60K発進用意！」

「ひゅうが」型の拡大改良型である「えちご」型にも、当然ながらへりが搭載されている。しかも、転移後在日米軍から移管されたシーコブラまで搭載されていた。

ただし、今回発進させるのは汎用型のSH60Kヘリだ。索敵から対潜・対艦・対地攻撃任務までをこなせる主力ヘリコプターである。昨年護衛艦「さざなみ」に搭載された機体はトリステインで大活躍している。

その内の1機が直ちに飛び立ち、北へと向かって飛んで行った。

1時間ほどして、報告がもたらされた。

「北方より接近中の艦隊は、四本煙突の旧式巡洋艦2隻に、駆逐艦6隻。いずれも旧海軍艦艇とのことです」

「わかった。そうになると、アリユーション列島方面から南下してきたようだな」

「やはりあちらも、搜索活動を？」

「だろうな。我が国がそうしたようにな。ヘリには帰還命令を出してくれ」

「了解しました」

その時、新たな報告が入った。

「CIC艦橋！」

菊池の声である。しかし、先程とは違い明らかに声に焦燥感が含まれていた。

「どうした菊池？」

「ソナーが潜水艦らしき反応を探知！」

「何！？」

角松もいきなりの事態に、驚きを隠せなかった。

その頃、CICは大騒ぎであった。

「ソナーCIC！どうして探知できなかったんだ！？」

「付近海中の変温層に紛れ込んでいた模様です。この付近の海中データが不足しています！」

「バカモノ！お前達の訓練不足だ！」

「すみません」

そして事態は最悪の方向へと動く。

「魚雷音聴知！方位250！距離2500！雷速40ノット！」

「いきなりか！」

ソナーからの報告は艦橋にも届く。

「全艦対潜戦闘用意！取り舵一杯！」

梅津が即座に命令を出した。

艦内にアラームが響き、乗員たちが走り回る。

「いきなり魚雷を発射してくるとは」

驚きの声を上げる角松に対して、梅津は冷静だった。

「相手は戦争中だと思っているだろうからな。とにかく今は回避だ」

「反撃しますか？」

「艦長、ただちに反撃するべきです。攻撃を受けたのは明白なんですから」

航海長の尾栗は即時反撃を具申した。だが、梅津はその意見を退けた。

「まずは警告だ。魚雷を回避したらピンをモールスで発信してこちらには敵対の意志がないことを伝える。それで攻撃を再度行うようなら、攻撃を許可する」

「了解」

「それから、後方の日本海軍の巡洋艦にも警告を」

「わかりました」

魚雷の発見が早く、さらに魚雷自体が海面に真っ白な航跡を残していたので回避するのは容易だった。「えちご」以下4隻の護衛艦は悠々と魚雷を回避した。

その間に、各艦のアクティブソナーを用いたモールスによる通信がおこなわれた。内容はいずれも「我に戦闘の意志無し。攻撃をやめられたし」であった。これを日本語・英語・ロシア語で行った。

だが目標の潜水艦はそれに応じず、再び魚雷を「えちご」目掛けて発射した。

「艦長！相手は警告を無視しましたよ！攻撃しましょう」

「止むをえんな……だが、相手は本当に敵なのだろうか？」なあ、副長」

「明らかに敵意を向けられ攻撃を受けたのです。正当な自衛権の行使に当たるかと」

「……アスロック発射用意！」

梅津は決断した。

「アスロックデータ入力！」

CICではアスロックの発射準備に入っていたが、さすがに実戦とだけあってデータを打ち込んでいる若い士官は緊張気味であった。

「落ち着いてやれ。訓練の時みたいにへマをやらかすなよ」

菊地がアスロックの発射準備に入っている士官、米倉三尉の肩を叩く。

「わかっていきます……砲雷長もやはり緊張しますか？」

自分の肩を叩いた菊地の手が少しばかり震えているのを見て、米倉は問い返す。

「ああ。怖い……だが、俺たちは海上自衛官だ。命令を受けた以上、やらなきゃな」

「はい！……目標方位250。距離3500。敵速6ノット……データー入力完了！発射用意よし！」

「CIC艦橋。発射準備完了！」

「発射！」

「サルボー！」

米倉が発射ボタンを押した。途端に、「えちご」艦橋前に装備されたVLSの扉が開き、アスロックが天高く轟音と炎を吹き上げて舞い上がった。

「前甲板VLS開放！目標敵潜水艦へ向かってアスロック飛翔中！」

アスロックの発射と共に、前甲板はその煙に覆われていた。アスロックはミサイルの弾頭部に対潜用魚雷を搭載した兵器で、魚雷は目標地点まで高速飛翔するとブースターから切り離され、パラシュート降下する仕組みとなっている。

その光景は各護衛艦と、そして後方から追求している巡洋艦から

も確認できた。

「なんだあれは？ロケットの一種か？」

巡洋艦「黒部」艦長の吉川潔大佐は、先程オートジャイロを発艦させた艦から突如炎が吹き上がる光景に、最初は被弾したのかと思っ

た。  
ところがそれは間違いで、すぐに尾から炎を引く飛翔体が飛んでいくのが確認された。

「まさか、対潜ロケット？」

彼らの混乱を他所に、まもなく弾頭部とブースターが分離してパラシュートが開き着水する。アスロツクの弾頭部に搭載された魚雷は、最初は無音で潜航していく。その後目標の推進器音を探知すると、機関部が駆動し、探信音を放ちながら敵艦目掛けて進む。

「魚雷正常に作動。目標命中まで50秒！」

60ノット以上の高速で進む魚雷である。わずか6ノットで動いている潜水艦など、単なる的ではない。

「敵魚雷第二波も回避しました」

「うむ」

梅津は目を瞑って、何事かを考えているようだ。

「艦長……」

「副長。本当にこれで良かったのかな？」

「私にもわかりません。しかし、これ以外方法はないかと」

「……そうかな？」

「命中まで後15秒！」

CICのモニターでは魚雷と目標の潜水艦を示す光点が間もなく交差しようとしていた。そこへ、通信が入る。

「菊地、魚雷を直前で自爆させる！」

「アイサー！」

命中まであと5秒というところで、菊地は魚雷に自爆を命じる電波を飛ばした。

その直後、魚雷の爆発が肉眼でも海上に現れた水柱という形で確認された。

「ソナーCIC、目標の状況報せ！」

「魚雷は目標の150m手前で爆発しました。命中はしていません。しかし、機関音ならびに推進器音消失。タンクの排水音を探知。急速浮上中の模様！」

「艦橋CIC。目標は浮上後も抵抗する可能性があります。対水上戦闘用意を具申します」

「砲雷長の意見具申を認める」

「了解。主砲は浮上中潜水艦に指向。ただし、命令あるまで発砲は禁止とする」

直後「えちご」「はるかぜ」「ゆうだち」の各艦砲が高速で旋回し、潜水艦が浮かび上がる筈の海上に照準を合わせる。

そしてしばらくして、海上が泡だったと思うと黒い影がその姿を現した。

「潜水艦、本艦右舷前方に浮上！」

そちらに向かって、梅津や角松、尾栗ら艦橋に詰めていた者は双眼鏡を向けた。

「あれは？」

「アメリカ海軍の潜水艦のようですが……誰か柳を連れて来い！」

間もなく、第二次大戦時代のミリタリーオタクである柳が艦橋に現れた。

「艦長、副長。あれは間違いなくアメリカ海軍の「ガトー」級潜水艦です」

柳が興奮しながら言う。

「艦長、早速降伏勧告を行いましょう」

「ああ。それと、後方の日本海軍の巡洋艦にもその旨を打電しろ」

「了解です」

ちなみに、その日本海軍の巡洋艦では。

「異世界とか未来の日本とか、ホラ話かと思っていたが、確かにあんなスゴイ兵器はアメリカやドイツでも造れまい」

吉川ら多くの人間が舌を巻いて呻いていた。

5分後、米潜水艦から返電があった。

「潜水艦より入電。発アメリカ海軍潜水艦「ガードフィッシュ」。  
宛日本海軍司令官。我降伏す。ジュネーブ条約に基づく処置を要求す。以上です」

角松の言葉に、梅津は満足そうに頷いて返す。

「そうか。では降伏の受託と、30分後に臨検部隊を移乗させる」とを伝える」

「了解です艦長。臨検部隊はどのようにしますか？」

「副長に一任する。必要ならば「はるかぜ」と「ゆづだち」からも送らせる」

「わかりました」

「とにかく、これで一先ず区切りはついたかな？」

と梅津は言ったが、残念ながらことは彼の希望通りには動かなかつた。間もなく、新しい情報が入ってきた。

「大変です！」

通信科の人間が文字通り血相を変えて艦橋へと飛び込んできた。

「どうした？そんな血相を変えて？」

「海上警備機構の警備船が、ソ連海軍の水上艦艇と戦闘状態に入ったとのことです！」

「何！？」

東露帝国転移編 6 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 1（前書き）

砂漠のウサギに嵌った作者の妄想をまとめてみました。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編）

1

転移5年3ヶ月目（新世界暦5年7月） 北アフリカ カッターラ  
低地西方 第3オアシス近郊

ドグワーン！

1両の戦車が被弾し、派手に炎を吹き上げた。

「クリス4被弾！」

味方の戦車が吹き飛ぶのを見た操縦手の言葉に、車長が真っ先に確認したのは。

「乗員は！？」

戦友の安否であった。

「何とか脱出したみたい！」

「畜生！敵討ちよ！フラワー！目に付いた目標から片っ端に撃ちこんで！」

怒り心頭の車長の若い女性は、同じく女性の照準手に命じる。

「わかってる。イドリブ！」

フェアリーランド軍北アフリカ派遣部隊独特の掛け声と友に、長髪で顔中包帯だらけのフラワーと呼ばれた照準手の女性が引き金を

引く。

次の瞬間。

バーン！

1両のソミュアS35戦車が派手に爆発を起こして、砲塔が空中高く舞い上がった。弾薬庫が派手に誘爆したのであった。

「やった！」

「さすがフラワー！」

操縦手と無線手の女性が賛辞を送るが、言われた本人は表情険しく仲間に向かって言い放つ。

「たった1両を仕留めただけ！まだうじゃうじゃいる！」

実際、彼女らの目の前には多数のソミュア戦車やM13戦車が突進してくる光景があった。とてもではないが、戦車1両を撃破したくらいでは喜んではいられない。

「たく！ロマーニヤにオリュンポスめ！ありったけの戦車を繰り出してきたわけね。英軍は何をやってるのよ！？」

操縦手の女性が、姿かたちも見せない同盟軍に吐き捨てる。

「彼らは補給がなくて来れないらしいわよロイス」

装填手のモーリスの冷静な一言が、ロイスの怒りの炎に油を注ぐ。

「もう！今出し惜しみしてどうするのよ!？」

操縦手のロイスが悪態を吐くが、それは車長のメイヤも同じであった。

「今更無いものねだりよ」

「どうするのよメイヤ!？」

「どうするもこうするもないわロイス。ここで私たちが持ちこたえなきゃ、防衛線全体が崩壊する。今はここで私たちが食い止めるしかないわ！ノーパン！」

「うん」

「百発百中で当ててね。ロイスもモーリスもしっかり頼むわよ」

「了解!！」

その後、4人の乗る55号車は良く奮戦し、多数のM13戦車とソムユア戦車を撃ち取ったが……

「ひいひい!?取り囲まれた!！」

ロイスが悲鳴を上げる。多勢に無勢。55号車は完全に包囲されていた。

「カリーン!どこにいるの!?!救援頼む!！」

メイアは部下のカーリン軍曹を呼び出すが。

『こつちも自分守だけで精一杯だよ！！少尉の方でなんとかしてくれー！！てうわああ！シャルルだ！！逃げる逃げる！！』

「あいつらー！！」

救援に來られそうも無い不甲斐ない部下に、メイアは齒軋りする。

「どするのよメイア！？」

「決まってるわよモーリス……強行突破よ！ノーパン！正面の戦車を撃つて！相手が怯んだらロイスは全速前進！エンジンが爆発しても構わないわ！とにかく今はこの包囲網を抜け出すのよ！」

「わかったー！！」

「ようし。今よ！イドリブ！」

次の瞬間60mm砲が唸り、目の前にいたM13戦車が吹き飛ぶ。

「よし行ける！」

ロイスがアクセルを目一杯に入れて走る。その瞬間、包囲していた敵戦車が一齐に砲撃してくる。

55号車の周囲に多数の砲弾が降り注ぐが、急加速したため命中弾はない。

「行ける！」

とメイアはほくそ笑んだが、次の瞬間キューポラの監視窓一杯に、オリュンポス軍のシャルbisが映り込む。

「「「嘘でしょおおお!!??」」」

フラワー以外の3人が絶叫した。シャルbisの重装甲には60mm砲でも歯が立たないからだ。単独でなら、運動戦に持ち込み勝てるが、包囲下の現場ではそれは無理だった。オマケに55号車はシャルの75mm砲の射線に入ってしまった。

「やられる!?!」

とメイアが半ば覚悟を決めた瞬間。

「何か来る」

フラワーが呟いた。

「え!?!」

とメイアが発した直後。

グワーン!

目の前のシャルbisが吹き飛んだ。木っ端微塵に。しかもシャルだけではない、彼女達を包囲していたロマーニヤのM13やソミュア戦車にも爆発が起きる。

「な、何!?!」

メイアの狼狽振りをも他所に、無線機に聞きなれない音が入り込んだ。

「両軍ともただちに戦闘を中止せよ！繰り返すただちに戦闘を中止せよ！こちらは国際派遣旅団である！」

「国際派遣旅団！？」

「何それ！？」

ロイスとモーリスが首を捻る。

「もしかしてあれ？異世界の国の軍隊が派遣した部隊……ええ！？チビのベルタの冗談じゃなかったの！？」

「冗談じゃないみたいメイア。3時方向！距離2000に複数の車両！」

「3時ですって……」

フラワーに言われて、メイアは3時方向を見る。戦車のキューポラから見える範囲は狭い。メイアは危険だがハッチを開けてそちらを窺った。

確かに、見ると砂漠の向こうに戦車と思しき車両が見えた。しかし、旅団と聞いたから数十両もいるかと思えば、数えられるのは2〜3両だけだ。

一方彼女らを包囲していたロマーニャとオリュンポスの戦車は一

齊にそちらへ向けて突撃を開始していた。

「ちょっと。旅団で言ったくせにあれだけ!? 助かったのはいいけど、本気であれだけのイタ公やオリュンポスの戦車を止められ「ドグワーン! ドガン! バーン!」

メリアたちの目の前で、次々とM13やソミア、シャル戦車が吹き飛んでいく。しかも、その吹き飛び方も砲塔がはじけ飛ぶような生易しい物ではなく、車体も砲塔も木っ端微塵であった。

「う、嘘でしょ!?!」

「あんなの重砲じゃなきゃ無理よ!」

「まさか戦車にそんなデカイ大砲を積んでるの!?!」

啞然とするメリア、ロイス、モーリス。

一方フラワーは双眼鏡で、ジッとその戦闘を見ているだけだった。

イタリア軍とオリュンポス軍の戦車は、距離1500から1000と言う距離で一方的に撃たれて破壊されていった。

「ば、化け物だ!」

終いには乗員が逃げ出す車両や、反転して逃げ出す車両まであらわれた。そして気を吐いて突撃し、なんとか47mmや75mm砲をお見舞いした車両もいたにはいたが、命中した砲弾は明後日の方向に弾き飛ばされてしまい、すぐに強烈な反撃を食らわされて沈黙した。

「あ、あれだけの戦車を赤子の手を捻るように……」

啞然とするメイア。

「あの戦車の砲は90mmくらいあるみたい」

フラワーが分析した通り、彼女らの目の前で一方的な戦闘を繰り広げたのは日本の陸上自衛隊が基本設計を行い、その後各国で「標準型」として量産された四式中戦車の90mmライフル砲によるものであった。

そしてその「異世界」の戦車が1両、メイア達の方に向かって走ってきた。

「ちょ、ちょっとどうするのよメイア？」

「ど。どうするって……」

混乱するメイアたち。そんな彼女達にフラワーが言う。

「大丈夫。こっちから撃たなきゃ何にもされない」

「どうしてそう言えるのよノーパン？」

「何となく」

「」「」「何となくかよ」「」

と他のメンバーは呆れずにはいられなかった。

そうこうしている内に、その戦車はメイアたちの車両の隣にやってきて停止した。

「大丈夫か？あんたら？」

出てきたのは若い男だった。

「あなたたちは一体？」

「俺は国際派遣旅団所属、ロクシエ陸軍のラリー・ヘプバーン少尉だ。あんたは？」

男が敬礼して名乗ったので、メイアも渋々返礼する。

「フェアリーランド陸軍、第6機甲師団第5大隊第5中隊クリス小队小隊長のメイア・ヴァン・ペルト少尉よ。それよりも、一体あなたたち何者なのよ？異世界から来た軍隊とは聞いているけど」

「正確には異世界に来たのはあんたたちだけだな。何だ聞いてないのか？ここ北アフリカとあんたらや、あんたらの敵の国がこの世界に飛ばされたって？」

「……へ！？」

この3ヶ月前。フェアリーランド本国とその植民地、そして彼らが交戦中であつたロマーニヤ共和国とオリュンポス共和国が北アフリカの戦場付（範囲はチュニジアからリビア中部まで）で転移した。

彼らが転移する前の1942年4月、北アフリカの戦場では独・

ロマーニヤ・オリュンポスの枢軸と英・フェアリーランド等を中心とする連合国が血みどろの戦いを繰り広げていた。

その最中に転移現象が起きたのだから、厄介なことこの上なかった。

本国を失った英連邦軍とドイツ軍は早々と戦闘を停止（何せ命令も補給も来ないから）し、日本・ロクシエ連邦・トリステイン王国・サクラス帝国・東露西亞帝国・布哇王国・ヘルベチア共和国はただちに転移してきた3国に停戦を勧告した。

これに対して、フェアリーランドは比較的早く停戦の受け入れを示したが、ロマーニヤとオリュンポスはこれを拒否し、なおも戦闘を続行した。

この戦闘続行が、新世界（各国が転移した世界）における秩序を乱す恐れ大として、各国は早々と実力を持つての戦闘終結を目指すことを決定し、北アフリカ方面に戦力を送り込んだ。

なお日本は未だに憲法9条を堅持しており、世論も一部を除いて派兵に消極的であったため、最終的にロマーニヤとオリュンポスを国家と認めず、テロ組織認定してその取締りと現地における救護活動目的で陸自を派遣した。また現地付近の海域などでの航路の安全確保名目で、海自の艦艇や空自の航空機を少数派遣するに留まった。

もつとも、その少数の部隊も最新兵器で身を固めた部隊であることを考慮する必要があったが。

この辺りの事情を、ラリーはかなり簡略した上でメイアたちに伝えた。

「そ、そんな事が起きていたなんて……」

「いや、知らない方が可笑しいだろ？」

「仕方が無いでしょ！毎日毎日戦闘なんだから！？」

「まあいいけど。ところで、そっちの人は包帯だらけだけどケガでもしたのか？」

ラリーがメイアを指差す。

「え！？ああ、大丈夫よ。ケガとかそう言うわけじゃないから」

「そうか、だったら何で」

と、その時一陣の風が吹きぬけ、フラワーのスカートを持ち上げた。ほんの一瞬だが、その中が見えたわけだが……

そこを見たラリーは口をパクパクさせた。

「な、なんで下着を着けてない」ドゴーン！

「ごめんあそばせ」

言い切る前に、メイアがラリーを殴り倒した。そこへ、ラリーの部下が戦車から降りてきた。

「少尉、通信が入っています……て、どうかしたんですか？」

「……痛たた。たく、女っていうのはどこへ行っても乱暴な生き物だな」

「ごめんなさい、ちょっと足が滑ってね。とにかく、さっきは忘れて」

「あ、ああ……で、通信内容は？」

「あ、はい。旅団長の池田中将名で全車ここから東にあるオアシスに集合せよとのことですよ」

その言葉に、メイアが反応する。

「で、それって第3オアシスのこと？ だったら私たちの拠点だわ」

そこへメイアたちにも命令が飛び込んできた。

「メイア。大隊長命令よ。第3オアシスに緊急終結せよですって」

「そう。だったらちようどいいわ。私たちが案内してあげる」

「そりゃ助かる」

二人はまだ知らなかったが、この命令こそが北アフリカにおける最後の戦闘の前触れであった。

つづく……かも？

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

転移5年3ヶ月目（新世界暦5年7月） 北アフリカ カッターラ  
 低地西方 第3オアシス

転移後の北アフリカ戦線は、転移直後からしばらくの間、交戦している各国それぞれが大混乱に陥り、一時的に戦闘が止まった。そのまま戦闘が終われば万々歳なわけだが、生憎とそうはいかなかった。

異世界へ転移してしまうと言う異常事態によって、ドイツ軍とイギリス軍はそれぞれ本国を完全に喪失した。またフェアリーランドやロマーニャ・オリュンポスは本国や植民地が一緒についてきてはいたが、前の世界において築かれていた交易網はもちろん破壊していた。

そうになると、各国は新しい国際秩序の中で生きていく必要があるが、ここでフェアリーランドとロマーニャ（+オリュンポス）で大きな差が出てしまい、以後の国際関係に影響を与えることとなった。

もともとフェアリーランドが北アフリカで戦闘を行っていたのは、ラ・デューン州（地球におけるレバノン）やモクスター州（同キプロス）と言った植民地の防衛のためであった。そのため、北アフリカに対する領土的野心は全くない。

一方のロマーニャ側からすれば、リビアは元々自分たちの物。そして今回一緒についてきたチュニジアやエジプトの一部も、いずれは自分たちの物とするべき場所と考えていた。

そして転移してきた世界にあつた日本やロクシエ等の国々にしてみれば、戦争を行つてもらうのは正直迷惑以外の何物でもなかつた。特にロクシエ連邦はロマーニヤとオリュンポス、フェアリーランド本国とも距離が近いため、戦争を続けられると貿易や水産業に大きな影響が出ること必至だつた。

実際、転移直後フェアリーランド本国近海に潜伏していたロマーニヤの潜水艦が、ロクシエ船籍の貨物船を攻撃して撃沈するという事件まで起きていた。

他にも、似たような世界から飛んできた日本からしてみれば、この地域には膨大な地下資源がある可能性があり、戦争を終わらせてそちらの調査に当たりたかつた。

またその他の各国も、それぞれ自国の利益の観点から北アフリカ地域に注目した。

各国とも様々な思惑があつたわけだが、最終的に日本を始めとする以前に転移してきた国で作る「国際連合」（通称新国連）は、停戦勧告に加えて北アフリカ地域における国連による監視団の派遣と、事後の統治体制の整備を3カ国（実際には英国やドイツも加わるが、国家としての体裁は既になかつた）に要請した。

これにフェアリーランドは好意的な反応を示し、さらには各国と早々と国交締結の動きを見せた。

ところが、ロマーニヤとオリュンポスは逆の道を選択した。彼らは自分たちが苦勞して分捕ろうとしていた土地が失われることを、さらには今後分捕れる可能性のある土地を永久に失うことを恐れた。

既に交易網は壊滅していたが、本国に残る物資を掻き集めれば短時間で北アフリカとキプロス位なら取れると彼らは考えた。すなわち既成事実を作ってしまったおうと言っわけだ。

そうして転移から3カ月後に、ローマニアとオリュンポスの総力を上げて行われたのが北アフリカにおける大攻勢と、モクスター州に対する上陸作戦であった。

しかし後者の作戦は、フェアリーランド海軍に加えてロクシエ海軍や日本の海上自衛隊による妨害によって大損害を被って撤退した。

残る北アフリカ戦線においても、日本など各国から派遣された国際派遣旅団が戦闘に加わることで、大きくその流れが変わった。

ちなみに、北アフリカ戦線の本来主力とも言えるロンメル率いるドイツ・アフリカ装甲師団は本国消失にともない、最高指揮権をロンメルが握って、ローマニアやオリュンポスの再三再四の出撃要請を蹴って、トブルクへと引きこもって様子見をしていた。

対して、モンドゴメリイ率いるイギリス軍は少しばかり状況が異なっていた。

こちらも本国消失という事態ではドイツ軍と変わりは無かったが、今回転移した地域にはマルタとエジプトの一部地域が含まれていた。この時期両土地はまだイギリス領であり、北アフリカ戦線に展開するイギリス軍にとっては、最後に寄る辺となりえる土地であった。

つまり、彼らもマルタやエジプトを自分たちの土地として既成事実化を図ったのであった。

もつとも、英軍自身は既に補給も絶たれており、必然的にその行動は消極的にならざるをえず、ローマーニヤとオリュンポスの攻勢に対しては、フェアリーランド軍と共に、全力を持って迎撃しなければならなかった。

しかしながら、同盟国でありながら英国のフェアリーランド軍に対する見方としては「女子供動物の軍隊」と言う見下した物が未だに幅を利かせていた。

バキッ！

女の拳から放たれたとは思えないような重い一撃をアゴにうけ、チャールズ・ダーブロウ大英帝国陸軍少佐は文字通り吹っ飛んだ。無様に地面に叩きつけられた彼の鼻先に、追い討ちをかけるようにサーベルの剣先が突き付けられる。

「貴様、我が隊を囿に使ったな」

驚くほど冷静な声で、だが文字通り死を刻むかのように、サーベルの持ち主であるフェアリーランド陸軍のジャンヌ・マツハ少佐がダーブロウに尋ねた。

「し、知らん！ 第一貴殿の隊は全くの無傷でなかったはないか！  
いつもの尊大そうな態度をかなぐり捨てダーブロウがわめく。

だが数時間前の彼の頭の中では、ジャンヌの自走砲部隊は巧妙に

偽装されたロマーニヤ軍の砲兵部隊を誘い出すための罠にすぎなかったのはまぎれもない事実であった。

それが無事で済んだのは、敵の罠が完成する寸前で国際派遣旅団の回転翼機（攻撃ヘリ）部隊が突然として乱入し、偽装された陣地をあつさり見破り猛攻を仕掛けたことと、ロマーニヤ軍砲兵部隊の司令官であるシレーネ中尉が恐怖におののいてすぐに白旗を上げてしまったせいである。その偶然が無ければ、ダーブロウの戦車部隊はともかくジャンヌの部隊が無事で済むわけがなかった。

だがそんなことはすべて過去の話だ。作戦終了後に部下を率いて第3オアシスの一隅にあるイギリス軍陣地に現れたジャンヌは、銃を突きつけダーブロウの部下たちを武装解除をさせるや、いきなり彼を殴りつけたのである。

（この山賊風情の、フライフェイスの女狐め！）

栄光ある大英帝国の貴族、名誉あるダーブロウ伯爵家の一員たる彼は、あらん限りの侮蔑の言葉をジャンヌに浴びせたかった。

彼にしてみればフェアリーランドの私掠部隊である666部隊、通称「バツカニアーズ」の出身者であるジャンヌなぞ単なる消耗品としか見なしていかなかったし、まして彼女はケルト系亜人間であった。冷徹だが美しい彼女の顔に醜く走る傷痕と、狐のような鋭い両耳（もっとも左耳は半分ちぎれ飛んでいたが）では同じ人類とは呼べない。そんな亜人が同じ言葉を話すだけで虫唾が走る思いだった。

だが今は彼女がダーブロウの生殺与奪を握っている。彼の人生でこれ以上の屈辱はなかった。

ダーブロウにしてみれば永遠に思える時間、実際には殴り飛ばされてからきっかり1分後、二人の耳にバラバラ、と聞き慣れぬエンジン音がひびいてきた。しばらくして、司令部のテントにジャンヌの部下が入ってくる。

「少佐、国際派遣旅団の司令官がお目にかかりたいとのことです」

「わかった、すぐに向かうと伝えてくれ」

そう言うなり彼女はサーベルを鞘に納めた。突き付けられた死から逃れられたダーブロウが安堵の溜息をもらす。

「今回の件、司令部に報告したいのならそうするがいい。その汚れたパンツを換えてからな」

薄い笑みを浮かべ、笑い声代わりにブーツにつけた拍車を軽やかに鳴らしながら、ジャンヌはテントを後にした。彼女の部下たちも銃を下し去ってゆく。そこでダーブロウは初めて自分がどういう状況になっていたかに気付いた。

「今回の件、大丈夫でしょうか？」

打ち合わせの場所とされたテントに向かう際中、不安そうな表情の部下がジャンヌに質問してきた。

「ダーブロウはプライドの塊だ、そんな男があんな醜態を晒すのを見られたんだ。絶対に喋らんさ」

先ほどの光景を思い出しつつジャンヌは再び笑みを浮かべた。友

軍であるイギリス軍とはいえ、ダーブロウは日ごろの鼻につく態度からフェアリーランド軍では最低の評価を受けていた。今日の出来事はそんな彼のタマを引つ搦んだといえる、彼女としては多少汚い真似をしてでもこのネタを利用するつもりだった。だがその前に別の案件を片付けなければならぬ。

案内されたテントにはすでに国際派遣旅団の兵士たちが着席していた。鋭そうな印象を持つ髪の短い女を中心に、屈強な白人の男と軽薄そうな印象を抱かせる東洋系の男。いずれも砂漠になじむ茶褐色のまだら模様の戦闘服に身を包んでいる。ジャンヌが入るなり三人は立ち上がり敬礼した。彼女も綺麗に返礼する。

「初めまして。国際派遣旅団所属トリスティン王国陸軍銃士隊長のアニエス・ミラン少佐です」

真ん中の女性が口を開いた。少々堅い印象ではあるが、ジャンヌとしては部下に持ちたいなと心から思わせる女だった。

「同じく、アルカディア自治領陸軍特殊作戦群のウィリアム・レノックス大尉です。よろしく」

「どうもはじめまして、日本国陸上自衛隊第一空挺団の友澤文夫三等陸尉です」

「遠いところをようこそ。フェアリーランド陸軍のジャンヌ・マツハ少佐だ。もう一人、イギリス軍の戦車部隊を統括するダーブロウ少佐が来るはずなのだが、もう少々遅れると思う」

そう言うと、ジャンヌは先ほどのことを思い出し笑い出しそうになった。

この時の様子を、後に友澤はこう語っている。

『そのジャンヌって姐さんだが、どっかの漫画に出てくるロシアンマフィアの女幹部さながらって感じだね。あんなのとアニメスが出会って、しかもすぐに意気投合したもんだから、あの場所がアフリカで一番おっかないグランドゼロに思えたぜ』

「ところで、あなた方の最高指揮官も同行していると聞いたが、どこかな？」

ジャンヌの質問に、友澤が答える。

「我が方の最高指揮官であるの池田末雄中将は、今頃そちらの師団長とお話中ですよ」

何かを思い出したか、友澤はクスツと笑った。

「どうかしたのか？」

「いいえ。先程ウチのボスがオタクの指揮官に出会った時のことを思い出しましてね」

友澤の脳裏には、128cmという身長と子供じみた言動から『ちびのベルタ』の異名を持つベルタ・アーウィン・シュトラウス中将と初対面した時の池田中将の顔が思い浮かんでいた。その様子を彼は「あごカツクン状態」と簡潔に表現している。

「そっか」

一方のジャンヌも、一般常識の範疇からかなりずれた自分たちの上官を見れば普通の人間がどういうことになるか容易に想像できたため、軽い頭痛を覚えた。

「で、貴官らと私が対面した理由はと言うことかな？」

彼女の間に答えたのは、外からテント内に入ってきた人物たちだった。

「それについては私たちが説明するよ」

「説明するよ」

天幕の入り口が開き、数人の男女が入ってきた。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なおダーブロウとジャンヌの会話のシーンは、ジョン・ドー先生提供です。本当にありがとうございました。

1年目+3日目 北太平洋アリューシャン列島沖 日本海上警備機  
構警備船「ゆうばり」

「対水上戦闘！主砲右砲戦！目標ソ連海軍駆逐艦！CIC指示の目  
標、撃ち方初め！」

「対水上戦闘！主砲右砲戦！目標ソ連海軍駆逐艦！CIC指示の目  
標撃ち方初め！」

前部甲板に装備された76mm砲が目標へと旋回、指向するやい  
なや発砲を開始する。

「まさか水上砲戦をすることになるとは思わなかったな」

「ゆうばり」船長の藤原讓二上等警備正は、双眼鏡で現在交戦中の  
艦艇を観察しながら呟いた。

相手をレーダーで捉えたのは4時間前のこと。その後各種無線に  
て連絡を試みるが、相手は沈黙したままであったので、目視圏内ま  
で接近を試みた。

そして目視圏内へと接近したのが、1時間前のことであった。改  
めて無線と発光信号で連絡を試みるが、その最初の返答は「帝国主  
義者の妄言に付き合う必要なし」と言う強烈なものであった。

既にソ連海軍の海軍旗を掲げているのが確認されており、「ゆう  
ばり」は増援を呼ぶことを試みたが、その途端に敵からの発砲を受

けた。

藤原はまだ創設されてまもない警備機構のために、海上保安庁から移籍した人間であった。

移籍してから半年、警察組織である海保と準軍事組織である警備機構との違いに戸惑うことも多かったが、海竜や密輸団相手にした任務を通して主砲や機銃を発射する機会もあったが、軍艦相手に戦うのはこれが初めてであった。

「目標は2隻！前の艦が「グネフヌイ」級、後方が米海軍の「シムス」級と思われます。ただし、どちらともソ連海軍旗を掲揚しています」

識別表を捲っていた士官が、ようやく相手の艦型を特定した。

「識別表によれば、相手は12.7cm砲と13cm砲を保有している模様」

「だが第二次大戦型の艦の性能じゃ、早々当たるものか。さっきから外ればかりじゃないか」

ある下士官の言葉に、別の士官はせせら笑った。確かに、ソ連艦からの砲撃は北太平洋の荒波のせいも加わってか、先程から近弾さえ得ていない。

対して、現在は警備船とは言え元は護衛艦であった「ゆうばり」の76mm砲弾は、さすがに射撃式装置などの性能が良いこともあって、早々と命中弾を得ている。さすがに小口径であるため、数発撃った位では相手に致命傷を与えられないが、その1分あたり10

0発近い速射性能を生かして次々と命中弾を叩き込んでいた。

40発程発射した所で、敵艦に火災が発生するのが確認できた。

「それもう一息だ！」

と誰かが言った直後、前を走っていた「グネフヌイ」級が爆発を起こした。

「やった！」

「ざまあ見やがれ！」

と叫ぶのは主に民間からの転籍者や海自出身者であった。一方で、藤原ら海保出身者は複雑であった。

海保は警察組織であり、軍事的な訓練・任務に就かないことが明記されている。しかしながら警備機構は必要あらば海自の指揮下に入ることが明記された組織であった。

海保時代は人の救難が主任務であった藤原らにとって、発砲して相手を撃破することは、任務とはいえ気分の良い物ではなかった。

「船長。目標を変更します！」

「ああ。警告は続けているだろうな？」

「はい。日本だけでなく英語とロシア語でも打電していますが、一行に聞き入れる気配がありません」

「むむ。止むをえんな。砲雷長。敵2番艦に目標を変更」

「アイ・サー！」

海自出身の砲雷長が返した直後。

グワシャーん！！

突如艦橋前方で爆発が起き、艦橋のガラスにヒビが入った。

「一番砲被弾！」

「消化装置作動！」

その報告に、藤原を含む全ての人間の表情が歪んだ。

「しまった！！」

ソ連艦の撃った砲弾が命中した。しかも、よりにもよって主砲に。

「ゆうばり」は護衛艦時代には対艦ミサイルを搭載していたが、現在は撤去されている。主砲を除くと、水上戦闘に使える武器は何一つ有していなかった。

魚雷はあるにはあるが、これは水上艦用ではなく対潜用だ。無理をすれば水上艦相手に使えないことはないかもしれないが、元々そのような用途は想定していないので、使わないほうが懸命である。

「針路270。機関全速！現海域より離脱せよ！！」

「よつそろつ！」

藤原は艦を回頭させて、遁走を図った。戦えない以上、逃げるが勝ちである。しかしながら、敵駆逐艦は余程腹に据えかねたのか、「ゆづばり」を追跡してきた。

「味方の救助をせずに追ってくるだと!？」

この辺りは海保出身である藤原の思考の限界であったかもしれない。

「敵の殲滅を最優先にするなら、それも間違った判断ではないでしょう」

海自出身の士官が淡々と答えた。

ちなみに彼らは知らなかったが、ソ連艦ではやられて敵を取り逃がした場合と、一矢報いた場合とでは後々党からの評価が大きく変わるというのも、追跡を止めない理由の一つであった。

「救援要請は続けているな？」

「はい。砲撃戦が始まってからずっと。しかし、援護してくれる味方は付近にはいないようです」

「とにかく、全速力で回避しつつ逃げるんだ。敵も何時までも砲弾があるわけじゃないだろうからな」

その内諦めて反転する。と藤原は予想していたが、期待に反して2時間ほど経ってもソ連軍駆逐艦は追いかけてきた。

「しつこいな。そんなに我々が憎いか!？」

「船長。敵の方が速力が速いようで、少しずつでは距離が縮まっています」

「むづ」

相手は高速の駆逐艦であった。「ゆうばり」も30ノット近い速度は出るが、振り切ることは出来ず、逆にジワジワと距離を縮められていた。

「どうしたものか？」

藤原はそんな呟きをした時、報告が入った。

「艦長。水上レーダーが複数の艦艇を探知しました」

「艦艇!?! 味方か?」

そんな報告全く聞いていなかったのも、自然と疑問形での返答となる。

「そこまではわかりません。敵味方識別装置を積んでいないようなので、識別不能です。しかしながら、一直線に本艦の方向へと進んできます。数は8隻。速力27ノットで急速接近中。1時間ほどで視認できます」

「となると……もしかしたらロシアか日本海軍か……いや、アメリカなんて言う可能性も有るな……まあ今は目の前の脅威に集中しよ

う。接近中の艦艇の動きに注意しつつ、後方のソ連駆逐艦からの攻撃の回避に全力を尽くせ」

「アイ・サー!!」

それからさらに1時間後。

「艦影見ゆ! 3時の方向!」

「どれどれ……こりやまたレトロな船が来たね」

藤原の双眼鏡の中に入ったのは、4本煙突の如何にも旧式な感じの巡洋艦と、大昔の映画に出てきそうな駆逐艦が合わせて8隻であった。

ところが、その8隻を見た途端、それまで自分たちを追及していたソ連駆逐艦が反転した。

「さすがに適わないと見たか……て、バカが!」

藤原はそう叫ばずにはいられなかった。ソ連駆逐艦は操艦を誤って急激に左へと傾斜した。

「横転するぞ!?!」

誰かが叫んだが、幸いにもソ連駆逐艦はその後なんとか建て直し正常な姿勢に戻った。しかしながら、機関に異常を来したのか、急激に速度を落とした。

その瞬間を見逃さなかった者がいた。

「日本水雷戦隊！ソ連艦を包囲します！」

「スゴイ！この波の高い海でなんと言う手際だ！？」

藤原は感嘆せずにはいられなかった。日本の水雷戦隊は激しい波を物ともせず、あっと言う間にソ連駆逐艦の退路を塞ぎ、そのまま包囲してしまった。高い練度がこれだけでも窺えると言ったものだ。

間もなく、ソ連駆逐艦のマストに白旗が掲げられた。

「軽巡「多摩」よりモールスで信号。貴艦は無事なりや？」

「返信。我損傷するも艦の航行に支障なし。救援に感謝するだ。それと俺の名前も入れておいてくれ」

「了解！」

モールス信号（と発光信号）はどんなに信号装置が発展しても、使われ続ける不滅の通信手段である。そして同じ日本人同士であるため、連絡は円滑に進められた。

「返信。貴艦の無事を祝す。我これより拿捕艦をダッチハーバーへと曳航す。また先に貴艦が撃破した艦の救助も行う。貴艦は安心して帰港されたし。大日本帝国海軍北太平洋艦隊司令官、田中頼三中将」

「ふう。過去の人間とは言え同じ日本人に助けられるのは悪くないものだな。それにしても、旧海軍の練度の高さは噂に違わぬものだな。さすがは海保……と海自の御先祖様だけあるな」

「それでどうしますか船長？任務を続行しますか？」

士官の間に、藤原は首を振った。

「残念だがそれは無理だ。主兵装の主砲が損傷した現在任務の続行は難しい。それに燃料も大分食った。ここは彼らに任せよう。本船は根室基地に帰還する」

「了解です。船長」

「それにしても田中中将か……どこかで聞いたような気が……」

藤原が彼の正体に気づくのは、その後図書室で旧海軍に関する文献に触れた時であった。

こうしたソ連軍やアメリカ軍による襲撃で貨物船や漁船など最低でも10隻が撃沈され、100名近い死傷者を出した。

一方で日本を含む各国（ほぼ日本単独であったが）も搜索と合わせてこれらの拿捕・攻撃を行い最終的にアメリカ潜水艦2隻、ソ連潜水艦1隻、水上艦艇2隻が拿捕され、13隻が降伏指示に従わずに撃沈された。

その最中にロクシエ海軍駆逐艦の大破や日本の海上警備機構の警備船が主砲を全損するなど大きな犠牲を払ったが、3週間ほどこの騒ぎは収束した。

一方で新たに出現した東露西亞帝国と布哇王国との接触は彼らが転移した7日後に本格的に始動し、その2週間後には暫定的な国交締結まで持ち込むことが出来た。

この素早い交渉の影には、後に多くの日本人を驚かせた東露帝国侍従長の広瀬武夫の存在が大きく働いている。

一方で、布哇王国をはじめとする各地に駐留していた日本軍の扱いが、日本政府にとって大きな課題となった。何せ彼らが忠誠を誓っているのは日本国ではなく大日本帝国なのである。

日本政府は国内の意見一致に加えて、布哇や東露に人を送って現地軍代表者と協議を重ねて、善後策を検討した。

この問題が片付いたのは、結局彼らが転移してから半年後のこととなった。

東露帝国転移編 7 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

**東露帝国転移編 完結（前書き）**

スペシャルサンクス水底先生！！

## 東露帝国転移編 完結

転移3年目8月 日本国東京湾

この日東京湾では、転移以来初めてとなる国際観艦式が挙行されようとしていた。

日本の海自が誇るへり空母「えちご」「ひゅうが」をはじめ、「こんごう」級や「あたご」級のイージス護衛艦に「ゆきかぜ」級を始めとする各種汎用護衛艦が並ぶ。いずれもこの世界においては、他の追隨を許さない高度な戦闘能力（主に索敵能力）を有する艦艇ばかりだ。

また転移1年後から建造が開始されたロースペック艦艇もその姿を見せている。特に小型ジェットとターボプロップ・レシプロ機用空母として建造された空母「瑞鶴」級や、155mm速射砲と多数の対艦ミサイル（ハープーンではなく廉価型）、水上戦闘にも使用可能な魚雷発射管を装備した巡洋艦「白馬」級はその筆頭であった。

ちなみに余談だが、これらロースペック艦艇のハイテク機器も通常の護衛艦より劣った物しか搭載されていない。しかしながら、諸外国ではそれすら過剰スペックで、これらの艦をモデルとした輸出艦はさらにスペックダウンした物を採用している。

またそうした海自艦艇以外にも、白と赤と黒を基調とした海上警備機構の警備船。白と蒼の塗装が美しい海上保安庁の巡視船も列に加わっていた。

しかしながら、その存在も東露西亜帝国と日本海軍の3隻の「大

和」級戦艦を前にしては霞んでしまつ。

転移後東露西亜帝国は一大軍事国家としての地位を確立した。艦艇の数だけで見れば、転移後の世界では最強と言えた。

ただし、転移によつてソ連とアメリカという二大敵国が消滅したため、その軍備は半ば遊兵と化してしまつた。そのため現在では旧式艦の整理等と言つた軍備削減に動いていた。

この時放出された艦艇を、ロクシエやサクラス、トリステインにヘルベチアと言つた各国が乗員込みで購入している。

乗員込みというのは、指導役としてそのまま傭兵契約したということだ。

各国共にその領海の拡大から、空海軍の拡大もしくは戦力再編に動いており、特にサクラスやヘルベチアと言つた新興海軍国にとつては、これら中古艦艇さえ咽から手が出るほど欲しい物であつた。

そうした国々の艦艇も最小で1隻から、この観艦式に出席していた。そのため、東京湾にはこの日転移してきた国家（連邦国家は統一政府を指す）全ての国旗がはためいていた。

これらの艦艇を見るために、沿岸部や見学船として指定された艦船には鈴なりの観客が詰め掛けていた。

日本国の代表である人物も、多数の軍艦が色とりどりの旗を掲げて停泊している姿に、胸の高鳴りを覚えずにはいられなかつた。

「これは中々に壮観ですな。アレクサンドラ皇女殿下」

各国代表者が乗り込んでいる戦艦「近江」に設けられた貴賓席には各国の代表や大使が並んでいるが、その内の1人である日本国の春川首相は東露より参加した第一皇女のアレクサンドラに話しかけた。

「そうですね。私は陸軍なので海軍のことはあまりよくわかりませんが、これだけの軍艦が揃うとさすがに胸打つものがあります」

「帰国したら是非とも陛下や侍従長殿にお伝えください。お世話になりましたと」

「それは我が国が言うべきセリフですよ、春川首相」

転移以来、東露西亜と日本は多くの会談を行ってきた。その中でも、他国には見られない会談となったのが、東露西亜と布哇に駐留する日本人や日本軍に関する物であった。

本来であれば、大日本帝国の後継政体である日本国が彼ら全てを引き受けるべきなのであったが、やはり70年近い時間の隔たりは容易に解決するべき問題ではなかった。加えて日本国の現在の状況がややこしいこととなった。

民間人であれば、別に現在の日本国への転籍、それが嫌なら布哇やロシアへの帰化で事足りる。最悪在日外国人のような永住権を与えれば良かった。

しかしながら軍に対しては、日本の場合現在に至るも憲法九条を堅持しているため、扱いが困る物であった。手っ取り早いのは全ての部隊を日本国自衛隊へ編入することであったが、これは現状の国

家予算を考えるとほとんど不可能であった。

加えて編入されるべき大日本帝国側の反応も良くなかった。同じ日本人として、日本を守る自衛隊へ編入されることに妥協できた人間もいるにはいた。特に日本政府から説明を受けた堀大將はじめとする高級将官や、大学出身の士官や商船学校などを出た予備士官にその傾向が強く見られた。

しかしながら、多くの兵士たちはアメリカとの戦争における敗北から再出発し、天皇を象徴制として戦争放棄を行った日本国への帰属を拒否、少なくとも海上自衛隊への参加は拒絶した。最低でも大日本帝国海軍、ひいては大日本帝国臣民としての存在が続くよう願ったのである。

日本国内においては「強制的に日本へ帰属させてしまえ。感情的なシコリは数年も経てば払拭される」等と言う意見があったが、これは極少数であった。日本政府も各国政府も、そんな安易に事が進むなどとは毛ほども考えていなかった。

また一部からは「陛下から一声掛けさえすれば全て丸く治まる」と言う声もあったが、これも「天皇の明確な政治参加で憲法違反だ！」と言う反対意見が出て頓挫した。

この問題に関しては、日本と東露西亞（転移1年後に正式に露西亞帝国に改称）、さらに堀大將や本間中将らを交えて何度も会談が持たれ、半年も掛けて以下の様な方針で最終的に妥結した。

？艦艇並びに部隊の内日本国への帰属の意志のあるものは日本国自衛隊へと編入する。

？帰属の意思のないものは今後も大日本帝国籍のままとする。そしてその身分は各国において相互保証する。その外交的な代表は駐布哇王国大使館が代行する。

？日本国自衛隊へ編入されない艦艇ならびに部隊は以後布哇王国・露西亞帝国・トリステイン王国・ロクシェ連邦と個々に傭兵契約を結び運用されるものとする。（後に日本と新国連もこれに参加）

と言うかなり特殊な形となった。もつとも、転移という非常識な事態を前にしては常識とか慣例などは通用しないのだから仕方がないと言えば仕方が無い。

ちなみに日本海上自衛隊へ編入されたのは2隻の「大和」級戦艦に2隻の改「大鳳」級空母、4隻の巡洋艦に6隻の駆逐艦であった。また陸上自衛隊へは陸軍や陸戦隊から2000名程が編入されている。

艦艇はいずれも予定されていたロースペック艦艇の建造を一部中止して、それらに準じる改装を行っている。

そして自衛隊に編入されなかった部隊は各国との間で傭兵契約を結び、それを資金源としてその後の活動を行う建前となった。もつとも、実際には東露西亞帝国と布哇王国がその大部分を引き受けたのだが。これには日本が今後の両国との貿易で相当な便宜を図ると約束した結果であった。

事実、その後ロシアとの間では多くの資源開発やその購入で協力関係を築き、布哇との間では観光産業への積極的な投資を行っている。

しかしながらトリスティンのように自国の財政状態が悪いにも関わらず、今後の海軍などの拡張に備えて思い切って傭兵契約を結んだ国もあれば、ロクシェやサクラスの様に潜水艦の運用技術を学ぶために潜水艦隊のみと傭兵を結んだような例もあった。

「首相、それにアレクサンドラ殿下。もう間もなく式典が開始されますよ」

「ありがとう小泉。もうそんな時間か。それじゃあ、あまり気が進まないが祝辞と行きますか」

「ええ」

春川ら各国からの参加者代表は、式典で行うスピーチをするため立ち上がった。

各国代表によるスピーチが終わると、停泊していた艦艇が一斉に抜錨して沖へと出た。そして相模湾上において、これ以後この世界において恒例となる国際観艦式が盛大に行われることとなった。

おまけ（ここから先は水底に眠れ先生から送られてきた物を許可を得て改変した物を使用しています）

転移直後の防衛省でのコマ。

「これはマズイ事態かもしれないな」

1人の海上自衛官の士官が重苦しい口調で言った。

転移直後、海上自衛隊。いや、全自衛隊にとってのきつぴらない事態が発生していた

「戦艦どころか、巡洋艦も沈められないとは」

ロクシエ海軍は数は少ないが重装甲の戦艦や巡洋艦を保有しているが、調査とシュミレーションの結果、それらをミサイルで撃沈するのは容易いことではないとわかり、自衛隊関係者は戦慄した。

「彼らが友好的な関係をすぐに築いてくれたから良かったもの」

もし衝突するような事態になっていたら、どうなっていたことが表面爆発でだいぶダメージは与えてるだろうが、相手は殴りあい前提の艦だ。

「護衛艦隊のミサイル装備数が少ないのでは？」

常に8発搭載しているのは稀だし、仮に搭載していたとしても、今後最低護衛隊毎の活動を行うとして3艦、24発で戦艦のような大型艦船が存在する海で、果たして優位に立ち続けることが可能なのか？

「巡洋艦はもしかしたら、それでなんとか出来るかも知れんな。だが、戦艦はどうする？」

最大500mmと言うような戦艦相手を想定したミサイルなど当

然ながら存在しない。

「それよりも、目標選択のモデリングを強化したらどうか」

目標選択のモデリング。当然ながら、ロクシエ海軍のモデルなんぞないから、シースキムで舷側に当ててる。しかし、それはそれで問題がある。

「モデル情報を入れると、処理に問題が出るぞ」

対艦ミサイルを一発か二発受ければ間違はなく撃沈か戦闘不能に持ち込める現代戦に、モデリングなぞ不要だった。それを入れるとなると処理能力に問題が出かねない。

「だが、トップアタックはさせるべきかも知れんな」

確かに、それならば舷側よりは喰いやすかるう。だが。

「それでも、戦艦の脅威は残る」

上・中甲板での弾頭破壊、炸裂では致命傷には程遠い。少なくとも沈める見込みはない。

「潜水艦に任せては？」

と常識的な意見も出るが、これは物理的な理由で否定される。

「何隻張りつかせる気だよ。特に受け身だと厳しいぞ」

待ち伏せする範囲が広すぎる。自衛隊の保有する隻数からも、大

量投入は難しい。ちなみに転移時の保有艦数は22隻であった。

「ミサイルだと、足を止めるのも難しいな」

そして、武装を消耗してしまう。もし敵に第二陣や別勢力がいたらやっかいなことになる。

「トマホークがもっとあれば」

と誰かが言えば、別の誰かが否定する。

「あれでもダメだろ、対応出来るとされた「キープ」級でさえ舷側200ミリだ」

「ザラ」級並みだと、トマホークですら殺しきれない可能性があるのだ。

結論を言えば。

「打撃力が足りない」

「魚雷なら、どうか？」

「水上艦に搭載している短魚雷は対潜用だし、口径は324ミリかつ、射程が・・・まさか長魚雷にするってのは無しだぜ？対潜攻撃力は必要だ」

此処まで来て全員が唸る。確かにこれは大問題かもしれないと。会議はそこで解散となり、次回に持ち越されることとなった。

「相変わらず海幕長はお人が悪い」

会議終了後、海幕長の隣を歩く若い左官が言う。

「危機感をあおらせるなら、君が一番だと聞いてな、志摩二佐」

志摩二佐は旧海軍からの海軍一家の出だ。そして彼自身も有能で、35にして既に二佐であった。

「これで、我々内の楽勝ムードは払拭されよう。ロクシエやサクラスを時代遅れの軍隊と侮る連中が多くて仕方が無いからな。しかし、二佐、この問題を君ならどうする？」

少し考えるそぶりをみせて、志摩は答えた。

「VLAを使います。短魚雷の通常射程に+22キロと、戦艦の射程に多少踏み込まねばなりません。従来の74式の11キロに較べたら、まだ戦えます」

まあ、戦えるのはこんごう以降の艦だけですがね。と呟く。戦艦がこんなに厄介とは。

しかし志摩は想像すらしていなかった。この1年後に日本はその厄介な戦艦を自ら保有してしまうこと。そしてその3年後に志摩が一等海佐に昇進した途端艦長へと就任し、まさかの戦艦同士の砲撃戦を行うことになるなどは。

東露帝国転移編 完結（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

海自が戦艦を持つなんてバカな思われるでしょうが、既に市販小説ではありますからね！！題名は「戦艦大和2010」懐かしいなあ。

転移5年目3ヶ月（新世界暦5年7月13日） フェアリーランド  
王国モクスター州西300km

フェアリーランド海軍は、地中海の植民地であるモクスター州（地球で言うキプロス）に艦隊拠点を持っており、ここを中心に潜水艦隊や水上艦隊が出撃していた。

一方でこの島はもう1つの植民地であるラ・デューン州（地球のレバノン）を背後に抱えており、もしここが陥落すれば名実共に地中海は枢軸の海となり、さらにはラ・デューンも危うくなる。

ローマーニヤとオリュンポスの2大枢軸国は、新世界における自国領土の既成事実化を行うため、このフェアリーランドの植民地を短期間で占領しようと目論んでいた。

「……見えた！ローマーニヤとオリュンポスの艦隊だ……ひゅー。こいつはスゴイ数だ」

潜望鏡越しに見える大艦隊の姿に、フェアリーランド海軍潜水艦N7号艦長リチャード・ウォンクリン少佐は感嘆の声を上げた。

彼の任務は、フェアリーランド王国の海外領土の1つモクスターへと上陸作戦を敢行するローマーニヤ・オリュンポス連合艦隊の動向を監視することであった。

「……まさか攻撃なんかしませんよね？」

副長のデバイアス・ミニット・パット大尉が聞いてくる。

「しないよ。あんな大艦隊に1隻で挑むなんて自殺行為だ。やりすぎしたら無電でモクスターの潜水艦隊司令部に連絡だ」

「それじゃあ無電を打ったら私たちの仕事も終わりですね」

と笑いながら言うのは次席士官のナンシー・スチュワート中尉だ。

「んなわけないだろ。後続がいるかもしれんし、味方との交戦で落伍するやつも出るかもしれんしな。隙あらば攻撃だつてするさ」

「ですよー」

「しかし、あれだけの大艦隊、モクスターにいる艦艇や空軍だけじゃ止めるのは無理じゃないかな」

「……なんでもロマーニヤ中の艦艇を掻き集めたと統領は豪語しているそうですよ」

副長の言葉に、艦長は頭を抱えた。

「うーん……」

2時間後。ロマーニヤ艦隊が通過したのを待ってN'号は海上へと浮上。潜水艦隊司令部、ならびにテーチスフリート総司令部（フエアリーランド王国地中海艦隊総司令部）へと敵艦隊発見の電文を送った。

するとすぐに返信が来た。その内容は彼らを驚かせるものだった。

「積極的に敵艦隊を追撃、友軍艦隊を支援しろだつて！？友軍艦隊つて、あの大艦隊に対抗できる艦隊があるのかよ！？」

7月14日 北アフリカ・カタール低地南西 フェアリーランド  
ネスト・オブ・タイガー  
陸軍航空部隊飛行場

フェアリーランド王国では空軍が空の戦いの主役であったが、ここ北アフリカ戦線には唯一の陸軍航空隊が展開していた。その名も「ネスト・オブ・タイガー」（トラの穴）。

戦闘機や爆撃機など4個中隊（1個中隊の定数12機）からなるこの部隊は、北アフリカ戦線の陸軍部隊にとって貴重な航空支援戦力であった。

一方でわずか50機弱で戦線を支えねばならず、要請しても飛んでこないことから地上部隊からは「張子の虎」とさえ言われていた。

「何時の間にかここはドイツ軍の基地になったのかしら？」

ネスト・オブ・タイガー所属の対地攻撃機中隊隊長のパプリカ・ルージュ中尉は列線を敷く飛行機の群れを見て呟いた。

「まあまあ中尉。怒らなくても良いじゃないですか」

「別に怒っていませんわ」

相棒であるカーラ・オブライエン軍曹の言葉に、パプリカ中尉は

素っ気無くそれだけ言った。

彼女の気分が悪いのは、昨日突如としてやってきた「異世界の」軍隊のせいであった。

彼らはまず4発の鯨のような輸送機で設営隊員と燃料や弾薬を送り込み、その後現在ネスト・オブ・タイガーが運用するよりも数の多い航空機を送り込んできたのであった。

自分たちの領域テリトリーに突然やってきたことだけでも腹立たしいのに、その使っている機種に関しても、彼女からすればあまり気分の良い物ではなかった。

バラバラバラ・・・

キーン！！

「もう！耳障りと言ったらありやしませんわ！」

今回送りこまれた航空隊には、彼女がまだ噂程度にしか聞いたことのない回転翼機ヘリコプターやジェット機が含まれていた。

ちなみにパプリカがドイツ機と言ったのはロクシエ空軍の三年型軽爆撃機と一年型戦闘機のことであった。前者はドイツ空軍のJu 87。後者は同じくドイツ空軍のTa 152と外観がそっくりであったため、パプリカにはドイツ軍機に見えたのだ。

もちろん、それらの機体には矢を象ったロクシエ空軍の紋章が描き込まれているが、そんなのは彼女にとって些細なことであった。

ロクシエ空軍はこれらの機体をそれぞれ6機ずつこの基地に投入していた。

また回転翼機は日本の陸上自衛隊の機体で、今回の作戦にはUH60J、CH47、AH64、OH1が2機ずつ投入されていた。

そしてジェット戦闘機も日本製の機体ではあったが、こちらは所属がサクラス連合帝国空軍であった。また露西亜帝国からも、ターボ・プロップ搭載の「流星改」攻撃機が12機投入されていた。

もちろん、これらの機体は砂漠戦に備えて改造が加えられていた。

これらの内の一部は既にこの日先行して出撃し、相応の戦果も上げたと聞いていた。これがよけいに、パプリカの機嫌を悪くしていた。

「これまでこの北アフリカ戦線の主役は私達でしたのよ。それをどこの馬の骨かわからない連中がノコノコと！」

「まあまあ隊長。堪えて」

「こうなったら、次の攻撃で戦果を挙げて私たちの実力を見せ付けてあげますわ！」

7月15日夕刻 カッターラ低地西方第3オアシス

日が落ち、まもなく戦場に夜の帳が下りようとしている。フェアリーランド王国軍の兵士たちはようやくの夕食にありつこうとしている。

た。

「あーあ」

55号車車長のメイアが如何にも不機嫌な様子で料理を調理している。

「メイア機嫌悪そうね？」

装填手のモーリスが言うと、メイアは堪っていた物を吐き出すように捲くし立てた。

「当たり前でしょ！いきなりやってきた得体の知れない連中といきなり共同作戦をしるなんて、無茶もいいところだわ！」

「けど、彼らの戦車は強力だし、素直にありがたいと思うべきじゃないかな？」

「そりゃあの戦車は認めるけど、今日まで戦線を支えてきたのは私たちなのよ。それなのに、ベルタもピゴットも、あいつらを主力に組み入れるなんて！」

「もうやめなよメイア。せつかくの夕飯が不味くなるよ」

と操縦手のロイスが嗜めるが。

「そんなこと気にしなくてもいいわよ。どうせこれ以上不味くなるわけじゃないし。あーあ、モクスターでの食事が懐かしいな。せめてレーションが欲しいな」

フェアリーランド王国軍の食事の質は、極端に悪かった。何せ不味い料理で有名なイギリス料理さえ美味い食事と言うのだから、その味に関しては推して知るべしだ。

今メイアたちが作っているのも豆のスープに粉末ジャガイモと粉末卵を入れたもので、栄養価はともかく「不味い」以外の何物でもない代物だった。

こんな物を食わされているから、アメリカ軍やイギリス軍のレーションでさえ「美味い」部類に入る食事であったし、もしイタリア軍の食料が手に入れられたなら「一生に数回しか味わえない御馳走」であった。

もつとも、これが植民地になると話は変わり食事の質が良くなるから不思議な話であった。

「ところでフラワーはどこ行ったのよ？さっきから姿を見かけないけど」

ノーパンこと照準手のフラワーがいないことにようやく気づいたメイアが辺りを見回す。

「足りない調味料を貰ってくるんだって」

「ふーん、そう言えば味付け用のソースがほとんどなかったわね」

と話している所に件のフラワーが戻ってきた。

「お帰り……あら、手ぶらなの？」

「うん。補給部の方でも切らしちゃったんだって」

「「「えー!?!?!?」」」

3人が半ば絶望に近い声を上げる。

「じゃあどうやって味付けするのよ!?!?」

「味の無いクラッカーに味の薄いスープだなんて、最悪じゃない!」

「神様、私たち何か悪いことしましたか!?!?」

3人は天を仰いだ。ただでさえマズイ食事がさらにマズイなんてもはやありえない。

しかしながら、フラワーが表情に笑みを浮かべながら言う。

「そんなに悲観することはないよ」

「どうして?」

「実はあの異世界の人たちが良かったら一緒に食事しないかって誘ってくれたの」

「え!?!?」

「マジ!」

ロイスとモーリスの間に、フラワーが頷く。

「やったやった！メイア、せっかくだしいただきに行こうよ！」

モーリスの言葉に、メイアが露骨に嫌な顔をした。

「ええー」

「メイア。さっきのことは頭の隅に置いて置こうよ」

「そうそう。もしかしたらスツゴク美味しいものもありつけるかもしれないじゃない」

ロイスとモーリスの言葉に、メイアの心もぐらつく。

「逆だつてありえるじゃない!？」

「わかった。じゃあ私達で行って来るわ」

このロイスの言葉が決定打になった。

「ちょっと!……わかったわよ。私も一緒に行くわ」

メイアが折れると、ロイスが頷きながら言う。

「そうそう。人間素直が一番」

「じゃあ行こう」

フラワーを先頭に、メイアたちは国際派遣旅団の面々がいる方へと歩いて行った。

「来ました」

「おおいらっしやい。来ないんじゃないかと思ってたよ」

先程テントで会った友澤という少尉（彼女たちは三尉をそう認識した）が彼女達を出迎えた。

「おいアニエス！お客さんたちの分も用意してくれ！」

「わかってる」

「お、お世話になります少佐！」

メイアが食事の準備をしていたアニエスに敬礼すると、彼女は微笑みながら返した。

「気にしないでくれ。私の階級なんて意味のないものだ。まあ座りなよ」

「は、はあ」

あまりにも気さくに接してくるので、メイアも拍子抜けしてしまった。

「でアニエス、どの缶を開けるんだ？」

「しいたけ飯に牛肉缶、それからたくあん缶だ」

すると友澤が苦笑した。

「おいおい。牛肉とたくあんはいいとして、しいたけ飯はもう食い飽きたぜ」

「贅沢言つな。戦場で食う食事だぞ」

アニエスがお湯を張った鍋の中に、缶詰を投入しながら言った。

「そりゃそうだけど。お前好きだよな、しいたけ飯」

「ふふ。私はこれがお気に入りなんだ」

と微笑んでみせるアニエス。その表情をみた友澤はボソツと呟いた。

「ちえ。柄になく可愛い顔見せやがって」

「フン！……すまなかった。今お湯で温めるから、しばらくまってくれ」

「……は、はい」「」

2人の奇妙な掛け合いに、メイアたちは圧倒されていた。

それからしばらくして、湯だった缶が引き上げられ、蓋が外されるとメイアたちに渡された。既に開けた瞬間から良い匂いが立ち込めている。

「おいしそうな匂い！」

「これライスよね？こんな風になっているのはじめて見た」

「意外とおいしそう」

「さ、遠慮なく食べなよ」

驚きの声を上げる面々に、友澤が進めた。

「じゃあ、お言葉に甘え」私もいい？」

突如後から声を掛けられた。一行が振り向くとそこには、1人のチビツ子が立っていた。

「」「軍団長!？」」「」

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみに作者はとり飯は食べたことありますが、しいたけ飯はありません。

## 世界を翔けるアイドル 2

転移4年目 8月 ロクシエ連邦イクストーヴァ王国ラス湖

イクストーヴァ王国（通称イクス王国）は、ロクシエ最西端にある唯一の山岳国家、そしてロクシエ構成国で唯一王制を継続している国である。

30年ほど前に、王宮が武装グループに襲撃され、当時の女王と王女が暗殺されるという悲劇もあったが、その後王女の双子の妹であったフィオナが次期女王となり、さらにその娘のメリエルが次期女王に指名されており、今しばらくは安泰であった。

山岳地帯の国家であるため、冬は一面雪と氷に覆われる。そのため、夏は避暑地として冬はスキーなどのウィンタースポーツを楽しむ場所として有名になっている。

産業は農業・酪農・漁業に加えて金細工の装飾品が有名である。

長年交通手段が陸路の道路のみという問題があったが、日本からの技術に供与による道路網の拡充や、山越えの鉄道建設、さらには航空路の拡充で急速に他の地域との便がよくなりつつあった。

そんなイクスのラス湖は、冬は凍って生活道路として活用され、夏は漁場や水上機の着陸場に使われていた。

「と言っわけで、到着」

舞ら日高プロの一行は、ラス湖の飛行艇用飛行場に足跡を記した。

「へえ、山も湖も綺麗でいいところですね」

キヨン子の言葉に、舞はウンウンと頷く。

「でしょ？キヨン子ちゃんも新婚旅行にでも来たら？」

「そうですね。考えておきます」

「まあ、新婚旅行はキヨン子ちゃんよりも祐太郎君とやよいちゃんの方が早いだろっけどね」

舞が裕次郎を茶化す。彼は現在765プロの高槻やよいと付き合い合っているからだ。

「や、やめてくださいよ」

「おうおう初心ね……まあそれはともかくとして、行くわよ。ちゃんと付いていらっしやいな。家の会社の車が来ているはずだから」

「行っつてどこへ行くんですか？」

キヨン子の言葉に、舞は事も無げに答える。

「決まってるじゃない。王宮よ」

イクス王国の宮殿は首都クンストの郊外にあった。

王宮自体は、如何にもお城という感じの建物であった。しかしながら、一行の注意を引いたのはその王宮の前に広がる土地であった。

「これって？」

「どう見ても飛行場ですね」

口よどむキョウ子の言葉を、祐太郎が引き継いだ。

「何でも女王様の旦那のベネディクト殿下が、元空軍少佐でパイロットだったから併設したらしいわ。今でも偶に自家用機に乗るしね……実を言つとね、今度のレースではここを中継基地に使う予定なの」

「え！？そうなんですか？」

祐太郎が目を開く。そりゃそうだろう。王宮の飛行場を使うなどありえない。

「ここが一番ロクシエの西にあるからね。まあ、別に絶対にここを使う予定はないんだけど。一応確保だけはしているの……とにかく、まずはご挨拶ね」

王宮へ入ると、早速一行は女王様と謁見することとなった。

どんな人が出てくるのか、舞を除く全員が緊張して待ったが。

「お待たせしました。皆さんようこそイクストーヴァへ。私が女王のフィオナです」

出てきたのは30代前半と思しき黒髪の女性だった。白いブラウスに長いスカートと、美人ではあるが威風堂々とか高貴とか、そう言う印象とは程遠い感じであった。

なお声は能登ヴォイスである。

「お久しぶりです女王陛下」

「あらあら。ここじゃ誰も見てないから、普段どおりでいいわ舞」

「そう。じゃあ遠慮なく。久しぶりフィー」

「ちょ、ちょっと舞さん！何女王陛下と親しげに話しているんですか？」

今度は石川をはじめとする一行が目を剥いて慌てるが、舞もフィオナも平然としている。

「お気になさらないで。私は外での生活が長かったから、あんまり儀礼とかそう言うのは好きじゃないの。むしろ気軽に接してもらった方がありがたいわ。あなたお名前は？」

「失礼いたしました。日高プロダクション東京支社長の石川実です」

「ようこそイクストーヴァへ。涼しさと穏やかさしかないような所ですけど、ゆっくりして行って下さい」

その笑顔は、同じ女性としても惚れ惚れとする位美しいものだった。

「ところでフィー。旦那さんと娘さんは？」

「2人なら先にサクラスに入った筈よ。お陰で政務を1人でしなくちゃいけないから大変で」

「書類仕事なんて退屈だもんね」

舞とフィオナはそんな感じで雑談を続けた。

「スゴイ。女王様にあそこまで気軽に接するなんて。私の国で言ったら皇帝陛下に接することはとてもスゴイことなのに」

「あの人は異常なんです」

リリーと裕次郎は舞にきこえないようにヒソヒソ声でそんなことを言い合っていた。

一方キヨ子は大胆にもフィオナに疑問を口にした。

「先にサクラスに入ったってことは、まさかお2人もレースに参加するとか？」

「ここまでの流れるに、キヨ子はそんなことを考えた。しかし、フィオナはクスツと笑うと返した。

「うーん。ベネディクトは参加したかったみたいだけど、さすがに40過ぎで長距離レースは過酷だから、今回は展示飛行だけやるらしいわ。ただメリエルは整備チームに加わっているから、皆さん娘に会ったらよろしくね」

「は、はあ」

「あなたは確か、日本の首相の？」

「はい。春川響子です」

「そう……お父さんにそっくりね」

「は！？」

キヨ子は何が父親と似ているのか、理解できなかった。

「ところで、皆さんも今回のレースに参加するのよね？」

「参加するといいますが、式典で歌を歌わせてもらっただけです」

「あなたは？」

「高木裕次郎です。今は日高プロでプロデューサー、アイドルたちのコーディネートをする仕事をしています」

「そうなの。がんばってね。応援していますから」

「ありがとうございます」

「うっうー！がんばります」

「あらあら、元気な娘ね。愛さんみたい」

「高槻かすみです！よろしくです！」

「はい、よろしく」

とフィオナ女王は、日高プロのメンバー一人一人と挨拶を交わして激励した。

「ところで、さつき舞さんから聞きましたけど、この王宮の前にある飛行場を使わせてもらえるって本当なんですか？」

裕次郎の質問に、フィオナは笑って答える。

「ええ。今は夏でしょ？イクストーヴァは山がちな地形だから、空港がないのよ。冬になればラス湖が凍って滑走路になるんだけど、夏の間は使えないの。日本からの技術で小さな飛行場を幾つか造っているんだけど、今回のレースには間に合いそうにないから、王室の飛行場を提供するの」

「へえ、よくそんなことができましたね？」

「フフ。ベネディクトとメリエルが強く推したのよ。2人も飛行機が大好きだし。それに最初は王室の飛行場を使うのを反対した首相達も、いい宣伝になるってことで最終的には折れてくれたわ。私は王宮の留守を預かっているから出られないけど、テレビ中継で見ているから。それに新しく頂いた日本製のカメラも試したいし。レースが楽しみで仕方が無いわ」

キラキラと目を輝かせるフィオナのその顔は、まるで子供のよう  
にキラキラしていた。

「女王様って言っても、意外と親しみ易い人でしたね」

「そうでしょキョン子ちゃん。物分りもいいし。お陰で随分とレールを私好みに楽し……じゃなくて面白くすることができたわ」

「今なんか変な言葉が聞こえたような。まあいいですけど、舞さんの人脈はすごいですね」

「フッフ。アイドルの頂点を極めた私を侮ってもらっちゃ困るわ」

「けど、一刻の首相や女王様と知り合いだなんて。つくづく恐ろしいです」

石川が汗を掻きながら言ったその言葉に、周囲にいた全員内心で頷いた。

ところが、舞はさらに不敵な笑みを浮かべた。

「これくらいで驚いてもらってちゃまだまだね」

「それどう言う意味ですか？」

嫌な予感しかしないと言わんばかりに、キョン子の顔が強張る。そんな彼女に対して、舞は飄々としたまま答えた。

「すぐにわかるわ。さて、女王様への挨拶も済んだことだし。後は夜のクンストの街を楽しみましょう。ここの料理やお酒も結構行けるのよ」

クンストの街に一泊し、イクス料理や酒を楽しみ、工芸品のお土産を買い込んだ一行は、翌朝再びラス湖から自社所有の飛行艇に乗り換えて西へと向かった。

ロクシエ最北端に位置するイクス王国は、かつては山脈を挟んでスー・バー・イルと国境を接していた。ただし、高い標高のお陰で両軍が互いに侵攻し合うこともなかった。

唯一ヶ所、両国間を通り抜けられる場所もあったが、そのルートはイクス王国によって嚴重に隠蔽されていたため、結局イクスが戦火を受けることはなかった。

スー・バー・イルが消失したため、山脈は途中で刃物で切られたようにバツサリとその断面を覗かせている。その横を通り抜けて、飛行艇は海上へと出た。

「舞さん。まさかこの飛行艇でサクラスまで飛んでいくんですか？」

石川の質問に、舞は首を振る。

「そんなわけないでしょ。さすがにこんな小さな飛行機じゃ無理よ」

「じゃあどこかで別に飛行機に乗り換えるんですか？」

「それも手だけど。まだ時間もあるから、皆には優雅な船旅を楽しんでもらおうと思っているの」

「「「船旅!?!」」」

「じゃあどこかの港に降りるんですか?」

「それも違うわよ。優雅な船旅の前に、少しばかり皆にはスリリングな体験もしてもらおうわ」

( )( )(嫌な予感しかしない)( )

すると、間もなくパイロットの一人がやってきた。

「まもなく会合予定地点です。着水しますので、皆さんベルトと救命胴衣をつけてください」

「「「救命胴衣!?!」」」

「ほら、ポケットとしてないでさっさとつけなさい」

「ちょっと待ってください!降りるって、こんな海原にですか!?!」

キヨン子がたまらず声を上げた。

「そつよ。大丈夫よ、ちゃんと拾ってもらえるから……ほら、見えてきた」

「「「!?!」」」

全員が窓から海上を注視した。すると、海上に2条の航跡が見えた。飛行艇はそれに向かって降下していく。

「何あれ？」

「さあ？」

かすみとキヨン子が首を傾げる。

段々と飛行艇はその航跡を発する船に近づいていく。そしてようやく、相手の輪郭がハッキリとしたとき、裕次郎が声を上げた。

「あれ軍艦じゃないですか!？」

「そうよ。あれが今回私たちを乗せてくれる、巡洋艦の「摩耶」よ」  
舞が胸を張って言った。

世界を翔けるアイドル 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

## フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編）

4

新世界暦5年7月14日 正午 フェアリーランド王国領モクスタ  
州<sup>キプロス</sup> 西方50海里km地点 国連艦隊旗艦海上自衛隊戦艦「近江」  
CIC

陸上での戦闘が始まる数日前、日本をはじめとする各国艦艇で編成された新国連艦隊は、地中海方面におけるローマニア軍とオリュンポス軍の動きを掣肘するために、先に同盟関係を結んだフェアリーランド側に実質的に組する形で、艦隊を派遣していた。

艦隊は海自と帝国海軍から合わせて戦艦2隻、巡洋艦4隻、空母2隻、護衛艦4隻、駆逐艦6隻。ロクシエからは戦艦1隻、巡洋艦1隻、駆逐艦4隻。サクラスからは駆逐艦2隻。露西亞帝国海軍からは戦艦2隻と空母1隻、巡洋艦3隻に駆逐艦8隻であった。

合計すると戦艦4隻、空母3隻、巡洋艦8隻に駆逐艦20隻と護衛艦4隻からなる強力な機動艦隊であった。

これらの内ロクシエや露西亞帝国、そしてサクラス軍の艦艇は転移後日本から受けた技術供与によって、電子兵装などが強化されており、いずれも地球の1950年代レベルの水準を保持していた。

これだけでも、既にローマニアとオリュンポス艦隊に対して圧倒的優位に立っている。

しかしながら、恐ろしいことに海上自衛隊所属艦艇についてはいずれもより高度な改装が加えられるか、あるいは元々西暦2000年前後の技術で建造されているから、最早チートであった。

その象徴とも言うべき改「大和」級戦艦の「近江」がこの艦隊の旗艦であった。

「ロマーニヤ・オリュンポス連合艦隊。本艦隊の西方60海里地点を20ノットのスピードで東進中。その後方30海里地点には護衛艦に守られた輸送船団の存在も確認できています」

「了解」

艦隊司令官の坂本良馬海将補は、新設されたCIC内のリーダーの画像を注視する。

「キプロス……いえ、モクスター州から100海里（185'2k m）地点に敵が到達した場合、まず威嚇攻撃。それでも止まらず、反撃する場合はそのまま本格的攻撃で宜しかったですね？」

「ああ。すでに「白鳳」から出した偵察機が攻撃を受けているので、交戦規定は完全にクリアしているし……志摩艦長。対戦艦戦闘の準備は整っているかな？」

「はい。全主砲、何時でもいけます。しかし……」

「うん？」

「転移直後、私はロクシエの戦艦や巡洋艦を撃破する手段を研究していました。その私が、まさか戦艦の艦長とは」

「近江」艦長の志摩一等海佐は、自嘲気味に苦笑いせずにはいられなかつた。

彼は転移直後、数は少ないが厚い装甲を持つロクシエの戦艦や巡洋艦に対する対策を研究していた。最終的にその時は、VLA発射型魚雷を使うという結果で落ち着いたが、その後露西亜帝国の転移とそれに伴い海自に戦艦が編入されたことで、状況は一変した。

海自は戦艦を撃破出来る艦を手に入れ、その運用方針を決定する必要に迫られた。

その問題にも関与した志摩は、一等海佐に昇進と「近江」の改装が終了したのに伴い艦長へと抜擢されることとなった。

「私だつて護衛艦の艦長から艦隊司令官になるとは思わなかったよ。そりゃ最初に怪獣相手に戦つて、その時の縁でロクシエ海軍の受けは良いかもしれんがね」

坂本司令官は転移直後、現在は日・ロクシエ領となっている美麗諸島の近海で、ロクシエ海軍駆逐艦を撃沈した怪獣を撃破している。

「まあ、ウダウダ言つても始まらない。今はやれることをしよう」

「そうですね」

「準備はいいかな？」

「はい。主砲をはじめとする各兵装異常なしです」

「近江」は海自編入以降、約1年に渡る改装を行っている。改装内容は日本国内の航行法規に必要な各種装備の設置から電子機器を含む武装の強化まで多岐に渡った。

改装の結果、主砲は全基そのままであったがレーダーとの連動や装填装置の改良などが行われている。また副砲や高角砲、機銃のほとんどは撤去され後に150mm速射砲や76mm速射砲、そして20mmCIWSが搭載されている。

ミサイルは、当初VLAを搭載する計画であったが、結局予算や時間の都合から後回しにされ、現在は煙突基部の4連対艦ミサイル発射機2基と8連装のシーパロー発射機2基しか搭載されていない。

しかも対艦ミサイルもハーブーンではなく、廉価版のものだ。それでもこの世界では異常な程の戦闘力を保持しているが。

両艦隊は接近しているが、すでに互いに偵察機を出し合っているので、その姿を直に確認していた。

「敵艦隊との距離40海里まで接近！」

「敵艦隊100海里ラインを突破！」

その報告があげられたところで、坂本は命令を出した。

「戦闘用意！全艦対艦戦闘用意！」

「了解！最初の攻撃はどうしますか？」

「まず30海里地点で対艦ミサイルを発射し前衛の駆逐艦と巡洋艦を叩く。それでも撤退しないなら25海里で砲撃開始。艦隊針路2

70へ」

「ようそろっ」

敵艦隊に丁字を書く形で、国連艦隊は変針する。

「主砲射撃用意！対艦ミサイル発射用意！」

「主砲装填対艦ロケット徹甲弾！」

「対艦ミサイルは先頭の巡洋艦に照準を集中！」

「各艦もミサイルの照準に入りました！」

「ミサイル目標の重複に注意！」

「「信濃」主砲射撃準備完了！主砲目標を敵2番艦にとることです！」

次々と報告が舞い込む中、志摩が溜息を吐く。

「目標が他艦と重複する可能性があるなんて、護衛艦なら考えられないことです」

「仕方が無いよ。旧軍艦艇改造艦やロクシエやサクラスの艦艇にそこまで高尚な電子装置を積んでいないからね」

坂本も溜息を吐く。

旧軍艦艇やロクシエ、サクラスの艦艇は日本からの技術供与の元、電子技術を飛躍的に発達させている。しかしながら、それは以前の

た世界の基準と対比しての話に過ぎない。

旧軍艦艇がいた1943年は電探がようやく普及し、初歩的な射撃指揮が可能となったレベルに過ぎない。またロクシエの場合無線技術はあつたがレーダー技術は無し。そしてサクラスに至っては無線技術すら無しであつた。

そんな国々の艦艇に、平成時代の電子装備を載せるのはかなり面倒なことだ、仮に無理やり載せたとしても、莫大な予算と乗員の訓練時間を要する。

もちろん海自の人間は現代人だから、その点大丈夫な筈だが、旧海軍からの横滑り組の人間を多く抱えてしまった以上、そう言うわけにもいかない。彼らへの再教育を行う必要があるが、何分万単位の間人（海自への横滑り組だけでなく、ロクシエやサクラス、露やヘルベチアからも受け入れている）がいるから、担当者が「20〜30年は掛かるんじゃない？」と言う始末だ。

結局最終的に行き着いた結論は「別に大した脅威もないんだから、高度な電子技術は海自の護衛艦だけにして、後は相当なスペックダウン版で良くない？」だった。

さすがに軽く見積もっても60年近い技術差をいきなり埋めるなど正気ではないので、各国も日本からの技術供与は使い古されてはいるが、実現可能な段階の物からとした。

それでも各国からすれば、これまでより5〜10年近く進んだ技術が入ってきたのだから、技術者などが泣いて当然であつた。

こうした結果、旧軍艦艇や各国の艦艇は飛躍的な電子技術（もち

るん電子技術だけではない）の発展を見たが、海自艦艇に比べたらおもちゃに近い技術には違いなかった。

「近江」に搭載されている電子装備も、同時複数の標的に対処できる物ではなく、他艦との情報共有能力に大幅な制限があった。そのため、太平洋戦争時と同じく各艦と無線や発光信号で互いに連絡を取り合いながら、手動で目標の割り振りを行う必要があった。

それでも相手を一方的にアウトレンジする能力と、高い命中精度を誇る兵器（それでも護衛艦より劣るが）を手に行っているだけでもよしとしなければならなかった。

「これなら旗艦は、やはり護衛艦の「あたご」にするべきだったのではないだろうか？」

「仕方が無いさ。デカイ戦艦は存在感だけはあるからな。護衛艦じや他国に対しての示しがつかん」

技術大国日本の存在は、新国連内でももはや不動のものだ。だからと言って、その立場が常に盤石とはいえない。それなりに体面的な示しをつけないといけない場面もあるのだ。

結局戦争も政治の延長線上にあった。

2人が少々憂鬱になっていたところで、待ちに待った報告が入った。

「長官、お待たせしました。目標の割り振りと確認完了！対艦ミサイルの発射準備完了！何時でも行けます！」

「よし！敵艦隊に異常は無いか？」

「はい、相変わらずの針路と速度を維持しています」

「よろしい……全艦対艦ミサイル発射！」

「撃て！」

「近江」をはじめとする、対艦ミサイル搭載艦から一斉に対艦ミサイルが発射される。

しかしながら、その弾道を見てみると2種類あるのがわかる。1種類はある程度上昇したら海面まで降下して突進して行く。もう1種類は砲弾のように弧のような弾道を描いて中高度を飛んでいった。

実は護衛艦から発射されたのはいずれもハーブーン系統のミサイルで、当然低空飛行とホップアップ機能を搭載している。

一方、「近江」をはじめとする各艦のミサイルは、そのような高度な飛行機能がないため、中高度を突進し、砲弾よりも緩い角度で敵艦の上方から襲い掛かるものだ。

この対艦ミサイルは所謂簡易対艦ミサイルと言つもので、調達価格は通常のハーブーン系統の4分の1を目標に設計され、実際には量産効果で5分の1までコストダウンしている。

もちろんコストダウンしているので飛行能力だけではなく、目標の識別機能や命中率も落ちている。しかしながら、射程と速度はハーブーンよりわずかに劣る程度なので各国海軍はこぞって採用していた。

今回発射されたのは、ハーブーン型8発に簡易型40発。この内簡易型1発が飛行途中故障で墜落したが、残る47発は敵艦隊に襲い掛かった。

ロマーニヤとオリュンポス艦隊は弾幕を張り、奇跡的にさらに1発を撃ち落とし、また2発が目標をそれた。が、最終的に44発は当初目標となった前衛の駆逐艦や巡洋艦に全て直撃した。

轟沈したのは駆逐艦2隻だけであつたが、この一撃で艦隊前衛の駆逐艦6隻と巡洋艦2隻は事実上戦闘能力を喪失した。

それでも、ロマーニヤ艦隊とオリュンポス艦隊は前進を止めない。

「主砲撃ちー方はじめ！」

「撃て！」

一番射程の長い「近江」と「信濃」が46cm砲で攻撃を開始した。この時点でロマーニヤ戦艦との距離は未だに25海里はあつたが、新開発のロケット推進砲弾はその長距離を楽々と飛び越えた。

この戦艦による砲撃戦は一方的な結果となり、ロマーニヤ・オリュンポス艦隊は1発も反撃できないまま、「大和」級の2隻とその後砲撃に参加した露西亞の「クニヤージ・スワロフ」（史実の13号艦）の砲撃を受けて轟沈1隻を含む6隻の戦艦を失った。

この光景を海中から見ている者たちがいた。水上航行と水中航行を巧みに使い分け、敵艦隊を追尾していたウォンクリン少佐らのN6号潜水艦であつた。

「すげえ！オリュンポスの戦艦が一撃で轟沈しやがった！何つつ威力のある砲だ！」

彼は旧式とは言えオリュンポスの戦艦を一撃で撃沈した46cm砲の威力に戦慄した。

「艦長、それで我々はどうしますか？」

デバイアス副長の言葉に、ウォンクリンは自分に課せられた任務を思い出した。

「そうだった。ようし、せっかくだからトライデントを使おう。目標はロマーニヤのドーリア級戦艦だ」

「了解！」

トライデントとは、フェアリーランドの大型潜水艦に搭載されている外装式の61cm魚雷のことであった。

「トライデント準備完了！」

「撃て！」

この魚雷は見事にロマーニヤの「アンドレア・ドーリア」級に命中し、46cm砲の攻撃で損傷していた同艦に止めを刺した。

さらに、N6号以外の潜水艦やモクスター州から飛び立ったフェアリーランド空軍機、さらには国連艦隊から発進した攻撃隊の波状攻撃も加えられ、ロマーニヤ・オリュンポス艦隊は叩きに叩かれた。

この結果、艦隊の全ての艦艇が撃沈破又は降伏して、艦隊は全滅することとなる。

もちろん、後続する輸送船団が上陸作戦を行える状況になどあるはずが無く、艦隊全滅の報を受けると全船回れ右して帰還するしか手が無かった。

こうしてロマーニヤとオリュンポス軍によるモクスターならびにラ・デューン（レバノン）の占領作戦は失敗に終わった。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 5（前書き）

本当にジョン・ドー先生に感謝です。

新世界暦7月15日夕方 フェアリーランド王国陸軍前線基地 第3オアシス

「うん！おいしい！」

温められたしいたげ飯の缶詰を幼女、もといフェアリーランド王国陸軍第6軍団長のベルタ中将が満足そうに食していた。御満悦と  
言っ  
て  
良  
い。

しかしながら、彼女を目にしている彼女の部下たちや国際派遣旅団の面々は、文字通り面喰っていた。

「よろこんでいただけのなら幸いです。ですが、軍団長自らこんな所に来て大丈夫なんですか？」

アニエスの常識的な質問を、ベルタは笑い飛ばす。

「大丈夫大丈夫！それにしても、異世界の料理はおいしいわね。これ  
れ  
で  
よ  
く  
冷  
え  
た  
コ  
ー  
ラ  
が  
あ  
れ  
ば  
最  
高  
な  
ん  
だ  
け  
ど」

その言葉に、自衛隊から参加している友澤三尉が反応する。

「コーラ？」

「ああ、軍団長はコーラが好きなんですよ」

メイアが少しばかり困った顔で言う。これでは軍団長の威厳も何

もないからだ。

しかし友澤から出たのは、意外な返事であった。

「コーラなら、自治領軍がしこたま持っていたはずですよ」

「それ本当!？」

と言っているそばから。

「よつトモ。冷えたコーラでも飲みながらカードでもしようぜ!……  
…て、失礼しました!」

やってきたのはアルカディア自治領軍のレノックス中佐だった。両手にコーラの缶詰を持っている。最前線では酒が飲めないから、代わりの嗜好品として持ち込まれたものである。

持ってきたレノックスは、軍団長がいるのに気づいて慌てて敬礼したが。

「別に気にしないで……それよりも、それはコーラ?」

ベルタがレノックスの持つ缶に目をやる。

「ええ。そうですけど」

「だったらそれちょう「いたー!!」」

突如男性の声が木霊する。

「げー!?ピゴット!」

ベルタがギョツとする。やってきたのは軍団参謀のピゴット大佐であった。

「全くなにやってるんですか!?これから池田中将を交えて報告会を兼ねた夕食会だって言うのに、勝手に抜け出した拳句何食べているんですか!?さ!帰りますよ!」

「ま、待って!せめてコーラを貰ってか!だまらっしやい!それじゃあ諸君、迷惑かけたね」

そう言うと、ピゴットはズルズルとベルタを引きずって行った。

「あー!冷えたコーラ!!!」

ベルタの叫びは、夜の砂漠へと消えて行った。

「何だったんだ?今の?」

アニエスの呆然とした間に、メイアが再び笑いながら答える。

「まあ、気にしないで。うちの軍ではよくあることだから。それにしても、それがコーラなんですか?何かの缶詰のように見えるんですが?」

「ああ、コーラだよ。ただし、缶に入っているけどね。そらトモ」

「ありがとうさん」

レノックスから渡されたコーラを、友澤が受け取る。

「異世界には随分と変わったものがあるのね」

「そりゃまあ、あんたちから見れば未来の産物だからな」

「未来？それって一体どう言うこと？」

メイアの間に、友澤とレノックスがキョトンとする。

「何だ？聞いてないのか？俺たちの国のこと？」

「うん。異世界の人間としか。何せ私たち最前線で戦っている下っ端だし」

「だったら教えてやるよ。まず俺の生まれた日本についてだ」

友澤は元いた世界での日本に関してと、転移後の状況を簡単に説明してやった。

「……と言っわけさ」

「へえ。つまり70年も先の世界なんだ。どつりで見たことも無い装備ばかりなわけだわ。てことは、あの戦車も70年後の戦車？」

「あの戦車？ああ、4式のことか？あれは他国との共通運用を目標に開発したロースペック戦車だからな。最新式の90式と10式も派遣されているはずだけど、まだ到着していないぜ」

「ロースペックって。あの戦車でも充分強力じゃない」

「まあ90mmライフル砲に傾斜装甲を生かした最大100mmの装甲板。この世界じゃ無敵レベルだよな」

「化け物よそんなの！ドイツが最近投入したって言うタイガー並みじゃない！」

「それで驚いちゃいけないぜ。90式と100式は主砲口径が120mmなんだからな」

「120mmで、どうやって弾装填するんですか!？」

装填手のロイスが驚嘆した。75mm砲弾でも相当重くて取り回しが難しいと言つのに、120mm砲など想像すら出来ない。

「90式も100式も自動装填装置があるからな。装填手はいらないよ」

「むう。さすが未来。けど、そんな化け物戦車が来れば戦線は安泰ね。モクスターへ侵攻しようとした敵は全滅したって言うし。ドイツ軍もトブルクに引きこもったままだし。ロマーニヤ軍なんか、一撃すれば逃げ出すかも」

「それは甘いぞメイア少尉！」

メイアの楽観的な言葉を、ア二エスが戒める。

「日本には窮鼠猫を噛むと言う諺があるぞ。追い詰められた奴はどんなことをしてかすかわからないものだ。お前達も戦場でそう言う経験をしたことがあるだろう?」

「そりゃ、まあ」

「油断しないことだな。舐めてかかると痛い目を見るぞ」

「わ、わかりました。ところで、少佐の国はどんな国なんですか？」

「私の国か？私の国は口で言うのも憚られる位遅れているが、隠すこともないから教えてやろう」

アニエスがトリステイン王国について説明中。

「というのが我が国だ」

「驚いた。魔法使いばかりでいまだに中世な国があるなんて」

「正確にはあっただな。我が国は現在改革の真っ最中だ。今回私が派遣されのだって、近代戦術を学ぶためだ」

「御苦労様なことですね」

「まあ苦労せずに国は変えられんからな」

と言うものの、アニエスの顔はどことなく嬉しそうであった。

「あとは、レノックス少佐。アルカディア自治領について説明してやったらどうです？」

友澤がレノックスを促す。

「俺はあんまりそう言つの得意じゃないんだが。まあいいぜ」

こうして、それぞれ出自の世界が異なる者同士の草の根交流は続くのであった。こうした交流こそが、双方の懐疑心を取り去り、なおかつ一体感を生むには最適な手段であった。

翌日 アレクサンドリア港

この日、海上自衛隊の輸送艦「おおすみ」がアレクサンドリアの港へと入港していた。アレクサンドリアは英国海軍地中海艦隊の拠点の一つであるが、現在港内にはロマーニヤの潜水コマンドによって破壊された2隻の戦艦が大破着底していた。

しかしながら、それ以上に頼もしい存在を「おおすみ」は引き連れていた。それは2日前にモクスター沖にてロマーニヤ・オリュンポス連合艦隊を完膚なきまでに叩いた2隻の「大和」級戦艦、「近江」と「信濃」の姿であった。

「まさか歴史上のワンシーンをこの目で拝めるとは思わなかったよ」

艦隊司令官の坂本海将補の言葉は、日本艦隊の全乗組員の言葉であった。

「まあ、どうせすぐにおいとましますけど。「おおすみ」の水島艦長から、上陸準備完了とのことですよ」

「近江」艦長の志摩一佐が報告してきた。

「ようし。じゃあちやつちやつとやっつてしまおう」

「了解」

それから数分後「おおすみ」の艦尾が開いて、搭載されているホバークラフト型揚陸艇のLCACが発進した。その艇上には、日本から運んできた10式戦車が搭載されていた。

先に上陸した四式戦車は、いずれもロクシエ軍やサクラス軍、自治領軍所属車両であった。対して今回上陸させた2両は遙か彼方の日本からわざわざ持ってきたものであった。

「たった2両の戦車のために、御苦労なことだな」

坂本の言葉に、志摩が冗談めかして答える。

「仕方がないですよ。何せ1両が8億もするんですから」

志摩の言う8億とは戦車1両あたりの調達価格だ。

もちろん戦車だけでなく、それを運ぶ特大トラックや整備班、消耗品を運ぶ輸送車両なども合わせて「おおすみ」で運ばれている。

「「おおすみ」はこれで帰還ですか。羨ましいですね」

「我々は海の上で冷房の効いた艦に乗っつていられるだけでもヨシとしよう。気の毒なのは昼は極暑、夜は極寒の中で戦う陸オカの連中だ。

そんなことを話していると、遠くから音楽が聞こえてきた。

「おや？本艦の音楽隊が演奏でもしているのか？」

「違いますよ司令。着底している「クイーン・エリザベス」と「ヴ  
リアント」からです。確か英海軍は枢軸軍に2隻が行動不能状態  
にあることを悟られないよう、甲板上で軍楽隊の演奏をするなど偽  
装をしていたと聞いています」

「どれどれ。あ、本当だ」

確かに双眼鏡で確認すると、着底している戦艦の甲板上で軍楽隊  
が演奏を行っていた。

それを見ていた志摩が何かを思いついたようだ。

「司令官、せっかくだからこれから出発する陸自の部隊のために  
何か演奏でもしたらどうですか？ここから戦闘の矢面に立つのは彼  
らなんですし」

「そうだな。親善航海も兼ねてわざわざ乗せてきた音楽隊を遊ばせ  
ているのも勿体無い。出港までの時間を使ってせっかくだからやっ  
てみよう」

こうして、2人の考えはすぐに艦隊各部に伝えられた。もちろん、  
音楽隊の連中が喜んだのは言うまでも無い。

港を管理する英軍からも許可が出たので、さっそく坂本と志摩は  
内火艇を出して音楽隊の隊員とともにアレクサンドリア港に上陸し、  
先を上陸して内陸部への進撃準備を進めていた陸自部隊に合流した。

「我々からのささやかな贈り物だ。これ位しか出来なくてすまない

ね

と言う坂本に対して、陸自側の隊長は笑顔で答えた。

「いえいえ。このような壮行会を開いていただけのだけでも光栄です。日本を出発したときは、ひっそりとしたものでしたから」

炎天下なのと、艦隊の出港並びに部隊の出発を考えて演奏する曲は1曲だけとなった。

もつとも、物珍しさからか近くにいた英国兵士やフェアリーランド兵士がわらわらと集まってきて、あっと言つ間に周囲はギャラリィで一杯になった。

「それじゃあ隊長、頼むよ」

「わかってますよ」

坂本の言葉を受けて、音楽隊の隊長が笑って答える。

彼は奏者の前に立つと、指揮棒を上げた。そしてその棒が振られると、途端に音楽隊が勇壮な曲を弾き始めた。

その曲名は、「宇宙戦艦ヤマト」であった。

たった1曲の演奏であったが、これはイギリス兵やフェアリーランド兵にも好評であった。そのためだろうか。自衛隊の音楽隊＝宇宙戦艦ヤマトのテーマと言つ図式が成り立ったとか成り立たなかったとか。

オマケ 新世界小銃事情（ここから先の部分はジョン・ドー先生による提供です）

自衛隊と在日米軍は、共同で および 諸島に調査隊（居留地確保のための害獣駆除ともいう）を投入したが、案の定というかオオトカゲの駆除などに苦戦し、慌てて本土へ緊急打電を行った。

「5,56ミリじゃ効かないから7,62ミリ以上のでっかい奴をよこしてくれ。今すぐだ！」

もともと対人用小口径弾としては威力不足ではないかという意見も囁かれていた5,56ミリ弾（89式やM16系の専用弾）であったが、案の定大型獣（牛や熊クラス）相手では十数発撃ちこんでもびくともしなかつたなどというケースが続出し、慌てて威力の大きい7,62ミリ弾を使用するライフルの補給を要請したのである。

自衛隊は予備自衛官向けにストックしていた64式小銃を慌てて送り付けた。米軍もアフガン戦争等で再評価されたM14ライフル（海兵隊がベトナム時代からデットストックしていたもの）や旧型のM60機銃に新型のM240機銃、はては爆発物処理班が持ち込んでいた50口径のバレットライフルまで歩兵に支給。何とか急場をしのいで調査団は最低限の犠牲で済むことになった。

以後、各国との民事、軍事的レベルの交流が始まっていく。

その際新兵器を導入したい軍としては自動装てん式ライフルの導入も検討することになるのだが、ここで各国とも『予算』という思わぬ強敵が関係者の前に立ちふさがることになる。

・日本

「というわけで新型の軍用ライフル計画について、予算計上できませんか？」

「帰れ。海自の新型艦や空自のターボプロップ戦闘機、陸自向けの新型（4式）戦車の予算で手いっぱいなんだ。小銃は既存ものを使え。64式の使用期間もしばらく延長する」

シヨボーン……

「あの、64式を輸出向けで生産を開始するというのはどうでしょうか？」

「却下。ロクシエもサクラスの軍事関係者も、使用中に部品欠落するようなライフルは遠慮したいと丁重に断っていたぞ。M14の製造ライン構築をホーワに打診したが、89式なみの単価を吹っかけられたんだ。とにかく今は無理だな」

・米軍（アルカディア自治領）

「ライフル寄せやゴルア！」

「冗談じゃない、金食い虫の既存兵器の維持管理でこっちの予算枠は限界こえてるんだ！今までどおりふんだんに予算が出ると思うなよ！」

「だぶついてる航空機や艦艇を売りつけて予算ゲットというのはどうだ？」

「このあいだ見積り見せたら向こうの担当者が泣いていたぞ。こんな高いの買えないって。改造キット買い付けるだけでも手一杯だぞうだ」

「ハイテク装備のツケがここで回ってくるとはねー」

・ロクシエ、サクラス（たぶんヘルベチアも）

「というわけでポルトアクション式のライフルや短機関銃程度の装備しかない我々としては、新型のアサルトライフルやバトルライフルにも興味があります」

「ですが高いですね。軍全体の銃の入れ替えだけでなく弾の購入もありますし、既存装備は丸ごと廃棄になりますからね」

「おまけに武官がジンボウチヨウの書店で仕入れてきた向こうの世界の兵器に関する歴史資料によると、軍用ライフルに見解について時代ごとに意見が二転三転して、理想的な1丁というのがまだない

状況なんだとか」

「本国としては見栄えのする戦闘機や戦車の入れ替えを優先したい様子ですしね。不確定要素の多い歩兵銃の入れ替えは後回しになりそうです」

「既存品で何とかなるなら、しばらく様子見ですね」

「仕方ないですがそうしますか」

・露西亞帝国

「ロクシエなどに比べて予算がふんだんな我が国としては、そこそ製造機械ごと買い込んでライセンス生産を……」

「却下です。ソビエトやアメリカといった仮想敵が消え平和が享受できそうな状況にあるのです。我が国は産業発展に重点を置いて軍備は縮小方向に向かわねばなりません。新兵器の導入は確かに優先すべき事項ですが、あまりのべつ幕なしにやっては世論も黙っておりません。それに余剰兵器の処分問題も重要な課題ですよ」

・布哇王国

「ウチも露西亞と同じ意見だな、しかも向こうほど金がないと来ている。それに海上防衛の整備を優先したいから、やはり軍艦と艦載機の改良が優先されるな」

「しかし、軍縮という点でも露西亞と意見は一致するぞ。加えて駐留する帝国陸海軍の職探しの問題もあるし」

「それについては、御近所にいい身売り先があると思うんだが？」

・トリステイン王国

「国内の鉱物資源の採掘権と近海での漁業権や資源開発権を一部担保にして日本から融資を受け、それを元手に露西亞と布哇にいる帝国陸海軍の余剰兵器と人員の確保に成功しました。我が国としては過剰すぎるぐらいの新兵器です」

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

番外 音無小鳥誕生日記念 (前書き)

小鳥さん、誕生日おめでとう!! 私からのプレゼントです!!

## 番外 音無小鳥誕生日記念

転移90日目 東京ナムコプロ

「はあ、暇ね。今日は皆仕事でお出かけだし、社長も取引先を回っていていないし……」

欠伸をしながらそう言うのは、765プロの名物事務員音無小鳥だ。自称2×歳の彼女は、今日は1人寂しくお留守番であった。

「どうしようかしら？夏コミ用の原稿を描く……て、さすがにマズイわね。下手すれば律子さんに見つかっちゃうし。今度見つかったらお盆と年末の有給は容赦なくカットって社長にも言われてるし」

音無小鳥、腐女子事務員としても有名であった。

仕事をサボってネットサーフィンをしたり、同人誌の原稿を描いたり、以前は色々やっていたのだが、何時までも悪事が続く筈もなく先日同僚兼アイドルの秋月律子に見つかってしまい、社長からきつい言葉を喰らっていた。

「仕方が無いわね、事務所の掃除……は昨日したし。やることが見つからないわね」

事務所内をグルグル回りながら、何かやることがないか考える小鳥。すると、彼女の視線の先にあるものが映った。それはアイドルたちが練習用に使うハンドマイクであった。

彼女はそれを手にとると、過去に思いを馳せた。

「懐かしいわね、私もアイドルだったころよく一人で歌の練習したっけ」

今では事務員だが、これでもかつてはそこそこ売れたアイドルであった。しかしながら同時期にブレイクした日高舞には遠く及ばず、彼女はアイドルから引退せざる得なかった。

「歌か……」

小鳥は何かを思いついたらしく、まず本日の来客予定を確認。それが終わると、アイドル達のスケジュールを再確認した。

「今日はお客さんが来る予定もないし、皆も後3時間は帰ってこないし。ようし、だったら今日は久々に小鳥祭よ！」

小鳥祭。簡単に言えば小鳥の1人カラオケ大会のことだ。

さっそく彼女はラジカセを持ち出してきてCDをセットし、さらに必要なことなのか服までアイドル用のコスチュームを持ち出してきて着替えた。

「ようし準備完了！まずは、「空」！音無小鳥行きマース！」

ノリノリで歌いだす小鳥。ちなみに彼女の歌を聴きたい人はCDを買うか動画サイト見てみよう。

そして現役時代の勘が戻ってきたのか、段々とヒートアップし踊り始めた。

そのため、周囲に対する注意力が大幅に削られることとなった。だから事務所の扉が何度もノックされたことも、終いには扉が開いて人が入ってきたのにも、全く気づかなかった。

そんなことになっているとは夢にも思わず、小鳥は1曲を歌い終えた。

「はー。久しぶりに歌って踊ったなあ。やっぱり誰も見ていないって気楽でいいわよね」

と、小鳥は今室内に自分しかいないと完全に思い込んでいた。

が！

「あの一」

「うっひゃあああああ！！！！？？？？」

いきなり声を掛けられ、小鳥は飛び上がらんばかりに……いや、本当に飛び上がってしまった位に驚いた。

「あ、あの。大丈夫ですか？驚かしてすいません。幾らノックしても全然答えてくれないので、鍵も開いていたから入ってきちゃいましたが、まずかったみたいですね」

「い、いえ！こちらこそ、気づかなくて申し訳ありません！……それで、どちらさまでしょうか？」

ようやく落ち着いた小鳥は、やってきた人物をマジマジと見つめる。おそらく20代半ば。眼鏡を掛けた好印象な青年であった。

(プロデューサーさんになんともなく印象が近いわね。けど、どこかで見覚えがあるような)

会ったことは無いはずなのだが、どうしても既視感を捨てきれない小鳥。その答えはすぐに彼自身が答えてくれた。

「ああ、失礼しました。自分是我那霸一樹と申します」

「我那霸？もしかして、響ちゃんのお兄さんですか？」

我那霸響は765プロに所属するアイドルの1人で、沖縄出身で動物大好き。現在は倒産した961プロからの転属組の1人だ。

(なるほど、だからどこかで会ったような気がしたのね。確かに、どことなく似ているわね)

「はいそうです。響は自分の妹です。妹がお世話になってます」

「いえいえ。とんでもない。ところで、その響ちゃんのお兄さんがどうしてここに？ま、まさか！？真ちゃんや雪歩ちゃんのお父さんたちみたいに、連れ戻しにきたとか！？」

「あ、それは違いますから御安心を」

その言葉に、とりあえず小鳥はホッとす。

「よかった」

「自分がここに来たのは、ずばり響に会うためです」

「あら？けど、お兄さんなら響ちゃんに連絡位出来るんじゃない？」

小鳥の素朴かつ常識的な質問に対して、一樹は呆れ顔で答える。

「それがあいつと来たら、新しい住所や電話番号を一切連絡してきてないんですよ。あいつの方から電話もしてくるんですが、言うことだけ言って聞く前に切っちゃうものでして」

「ああ、響ちゃんらしいと言えらしいですね」

「3ヶ月前の転移以来、家族全員ずっと心配していたんですが、あいついくらこつちから聞いても大丈夫の一点張りですから。自分が会いに来たわけです」

「けどもう転移から3ヶ月も経っているじゃないですか。どうして今になって？」

当然の疑問であったが、一樹は極普通に答えた。

「なにせ転移直後は航路も航空路もストップしちゃいましたし、その後も中々チケットが取れない状態が続きましたし」

「そう言えば、転移したばかりの頃は大混乱でしたからね」

小鳥にとっても、転移直後の様々な混乱は記憶に新しい。その後この新世界の状況が少しずつわかり、ロクシエやサクラスとの貿易がスタートするなどして、大分転移前に近い状況になった。

「それに自分も仕事がありましたから。実は東京に来たのは、仕事

の件もあるんです」

「お仕事は何をされているんですか？」

「自分ですか？警察官です。沖縄県警で自ら隊（自動車警邏隊）の隊員をしています」

「え！？警察ですか！？」

「父がそうでしたので。実は自分と響が一人称を使うのは、父が家でも自分のことを自分と言っていたからなんです。お陰で大学入学時の面接試験の時は、私と言うのに苦労しました。標準語の方は本土の大学を出たのでこの通りですが、この一人称だけはどうしても直りませんね」

「そうだったんですか。響ちゃん自分の家族について話すことが少なくて」

「まあ、話す必要もないでしょうし。ところで、その響は今日はどこへ？」

「ああ、すいません。そうでしたね。ちょっと待ってください。すぐに調べますから」

小鳥は慌てて先ほどまで見ていた皆のスケジュール表を確認しなおす。

「ええとですね。響ちゃんは今日、歌番組の収録に出かけていますね。ただ、午前中だけなので、多分午後には戻ってくると思います。それまで事務所で待ちますか？お茶とお茶菓子くらいは準備します

から

「はあ。それは、ありがとうございます。しかし、アイドルはそんなこともやるんですか？」

「え！？アイドル？私は事務員ですけどね？」

「そうなんですか？そんな格好しているから、てっきりアイドルかと思いました」

「え！？……キャアアア！！」

小鳥はようやく自分がアイドル用の衣装を着ているのを思い出し、叫び動揺した。

もちろん、いきなり小鳥が叫んだので一樹もビックリだ。

「ちょっと、音無さん大丈夫ですか？」

「恥ずかしい！こんな格好で歌って踊っている所を見られるなんて！？お願いだから、イタイ目で見ないでください！」

「いや、別にイタイ目で見えていませんから。それに、そこまで恥ずかしいことないでしょ？中々似合っているじゃないですか？」

「え！？？」

「それに歌と踊りも上手でしたよ。アイドルとしてそのまま通ってもおかしくない位でしたよ」

「そんな、お世辞なんて結構です」

「お世辞じゃないですよ」

一樹は微笑みながらそう言った。

「さっきのあなたは確かにアイドルでした。それも心の底から楽しんでるように感じられました。恥ずかしがることは何もないですよ」

男性からそのような声を掛けられたことのない小鳥は、急激に顔が熱くなっていくのを感じた。

「あ、ありがとうございます。と、とにかく着替えてくるので待っていて下さい」

「ええ」

小鳥はまるで逃げるように、更衣室へと飛び込んだ。

「はあはあ。な、何この気持ち？こんなにドキドキするなんて！Pさんと一緒にいてもこんな気持ちになったことないのに……けど、ちよつと嬉しかったかな？ウフフフ……ていけない。早く着替えないとー！」

小鳥はちゃっちゃと着替えると、部屋から出た。

「お騒がせしました」

「いえいえ。お気になさらず。その服も似合っていますね」

ズキューン！

「あ、ありがとうございます！」

「大丈夫ですか？さっきから少し様子が変わってますか？」

「い、いえ！何でも無いんです！」

「はあ、そうですか」

「と、とにかく。お茶を入れてくるので……キヤ！？」

緊張していたついでに慌てていたので、小鳥の足がもつれた。

「危ない！」

転びそうになった小鳥を一樹が受け止めた。

「大丈夫ですか？音無さん？」

「え、あ、はい」

小鳥はそれどころではなかった。何故なら。

（嘘！？私今男の人に抱きしめられている……嘘でしょ！？こんな都合のいいことが起きる訳、私の妄想でもないわよ！）

と突っ込んでみるが、体を感じる感触はまぎれもなく今の状態が事実であることを物語っていた。

「あ、あの音無さん？」

「……」

あまりのことに言葉が出ない。困惑する一樹を他所に、小鳥はと言えば。

(もう少しだけこのまま……)

と考えていた。

しかしながら、それがこんま数秒後にその場の空気を激変させるとは思わなかった。

「ただいま！ピヨ子帰ったぞ！」

「ただいま戻りました、小鳥殿」

事務所の扉が勢い良く開き、入ってきたのは我那覇響と四条貴音であった。意気揚々と入ってきた2人であったが、もちろんすぐに抱き合っている(ように2人には見えた)小鳥と一樹の姿を目にしていまい、固まった。

「「……」」

「「……」」

気まずい空気が数秒、いや数分か。とにかく、4人はしばしの間沈黙に包まれた。

その空気を唐突に破ったのは、響の絶叫だった。

「あ、兄貴がピヨ子と抱き合ってる!?!」

さらに貴音も口を開いた。

「め、面妖な!」

もちろん、誤解なのですぐに一樹が反論する。

「いや違うぞ響!こ、これには理由があつてだな!」

「響ちゃん落ち着いて!」

が2人の声を全く聞かず。と言うより聞く耳持たずの響は、一樹に襲い掛かった。

「こんのバカ兄貴が!?!」

「うお!?!」

いきなり蹴りを繰り出した。幸いにも2人は一樹が咄嗟に避けたので何を逃れたが、後にあつた事務机が吹き飛んだ。

さらに、2人が以前抱き合ったまま（に響には見える）なのだから、彼女の怒りは治まらない。

「ゆ、許さないぞ!事務所では抱き合っているなんて絶対に許さないぞ兄貴!」

「だから話聞け！！！！！！」

2時間後。

「で、2人で本気で戦った拳句事務所がめっちゃくちゃになったと」

滅茶苦茶になった事務所を背に、帰ってきたプロデューサー兼アイドルの秋月律子が呆れながら言った。その目の前には、正座した我那覇兄妹がいた。

「ごめんなさいごめんなさい！妹共々ごめんなさい！」

何度も土下座する一樹。対して響は多少反省の色は見えるものの、ブスツとしていた。よっぽど兄が小鳥と抱き合っている（ように見えた）のが腹に据えかねたのであろう。

「いや、お兄さんがそこまでして謝らなくても」

Pが恐縮しながら言う。

「いや！理由はどうあれ、事務所を滅茶苦茶にしまった責任はありますので。弁償でも何でもしますから」

「まあ、特に壊れたものは無かったからいいんですけど。騒ぎにしたくありませんし。ただ、仕事がこれじゃあ出来ないんで、良かったら片付け手伝ってください。明日には新しいPも来られるので」

「喜んで手伝わせていただきます！」

律子の言葉に、一樹は土下座しながら答えた。

1時間後、何とか事務所の後片付けは終了した。

「全く。東京に来るなら来るって言って欲しかったぞ」

「お前が連絡先教えないから来たんじゃないか！だいたい、お前アイドルになってから一度も沖繩に帰ってないじゃないか！俺や母さんがどれだけ心配したか！」

あまりにも激しいお説教を見かねて、小鳥が助け舟を出す。

「まあまあお兄さん。響ちゃんだって辛かったんですよ。前の事務所をいきなり解雇されたり、その後も故郷を離れて一人でがんばっていたんです。もちろん、家族に連絡しなかったのは褒められたことじゃありませんが、響ちゃんも響ちゃんなりに苦労してがんばってここまで来たんです。今回は大目に見てあげてください」

小鳥に続いて貴音にP、律子も言う。

「その通りですよ一樹殿。響だって何度も壁に突き当たりました。しかしながら、ひたすら自分の夢に向かって突き進んでここまで来たのです。彼女のそのがんばりだけは、認めてあげて下さい」

「響だっていい加減な気持ちでやっていたんじゃないんです。これ

からは、ちゃんと連絡させますから」

「皆の言うとおりです。妹さんにはちゃんと私たちが言うておきますから」

「……わかりました。響はいい仲間にも恵まれたみたいですね」

「フン！」

だが響は恥ずかしいのか、それとも兄に対する反抗心からかソッポを向いた。

「素直じゃないな。まあいいさ。これから2ヶ月は毎週見に来るかから楽しみにしているんだな」

「……毎週？」

「具体的な任務はお話できませんが、実は昨日付けで2ヶ月間警視庁配備になりました、既に官舎に入っただんです。毎日はむりですが、週1位なら顔を見に来ることは可能です」

「な、72……じゃなくて何!？」

響の叫びに対して、一樹はイジワルな笑みを向ける。

「覚悟して置けよ響」

「認めないぞ自分は!！」

「勝手に言ってる。それじゃあ皆さん。御迷惑をお掛けしました。」

特に音無さんにはすまないことをしました」

「い、いえ。トンデモナイ。むしろ楽しかった位ですから、お気に  
なさらず」

「それこそトンデモナイ。今日の埋め合わせに、今度どこかで食事  
でもいがかですか？」

「え！？いいんですか？」

「はい。あなたが良ければですが」

「い、行きます行きます！喜んで！」

「ありがとうございます。それじゃあ、携帯を持っていたら出して  
下さい」

「は、はい」

小鳥は自分の携帯を取り出した。そして一樹も取り出すと、赤外  
線通信でアドレスを交換した。

「それじゃあ、また具体的なことはメールしますので……それじゃ  
あ皆さん。お騒がせしました。今日は失礼します」

一樹はその言葉を残して立ち去っていった。

残されたのは、啞然とする響らと、少しばかり嬉しそうにしてい  
る小鳥だけであった。

「み、認めないぞ！」

数分後、響が搾り出すように言った。

「え、響？」

律子の声に反応することなく、彼女は叫んだ。

「兄貴とピヨ子が付き合うなんて絶対に自分は認めないぞ！！！」

その心の底からの叫びも空しく、小鳥と一樹は順調に交際を重ねて、小鳥は我那覇小鳥となってしまうのであった。つまりは、目出度く響は小鳥の義妹になったわけだ。

もちろん、彼女がウェディングドレスを着て彼の隣に立った時、嬉泣きしていたのは言うまでも無い。

番外 音無小鳥誕生日記念 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

新世界暦5年7月16日 北アフリカ トブルク

ロマーニヤ軍とオリュンポス軍が自分の占領地域を広げ、その既成事実化を狙って戦闘を続ける中、枢軸軍の主力とも言うべきドイツ北アフリカ軍団は早々と中立を決め込んで、トブルクに引きこもっていた。

この裏切りとも取れる行動に、ロマーニヤ軍は当初力による接收も考えはしたらしい。しかしながらイギリス・フェアリーランド軍（実際にはこれに新国連軍が加わっている）との戦闘を考えた場合、燃料や弾薬に既にストックはなく、精強なドイツ軍と万が一戦闘になった場合とてもではないが対処できなかつた。

加えてドイツ軍自身も余分な燃料・弾薬のストックは持っていない。さらに言えば、本国を失った彼らにしてみればロマーニヤのためにイギリスやフェアリーランドと戦う理由などそもそもなかつた。

なおこの世界では、統領が史実（日本が元いた世界での歴史）よりも真面目に働いたことや、ロマーニヤがゴーラ（フェアリーランド王国が元いた世界での中東の大国）から石油を買い付けていて海軍の動きが活発だったなどび理由が絡み合い、DAKはそこまで深刻な物資不足には陥っていなかつた。

またロマーニヤが主敵としているフェアリーランドに対するドイツ軍の感情は良好であるため、とても戦闘を起こす気などなかつた。フェアリーランドは第一次大戦前から、軍民間わずにドイツに多数の留学生を派遣しており、そのため両国国民の感情は極めて良好だ

ったのだ。

実際の所、北アフリカ戦線を含む全ての戦線においてフェアリーランド軍はドイツ軍（を含むローマーニヤ・オリュンポス以外の枢軸国）との戦闘を避けていたし、ドイツ軍も戦闘行為を控えていた。

こうした諸々の事情の結果、ロンメル元帥率いるドイツ軍は中立を維持することは出来ていた。一方で、だからと言って何もしないわけにはいかなかった。本国無き今、彼らは今後の身の振り方を考える必要があったのだ。

もつとも、実際の所既に各国からロンメルを含むDAKに対して亡命受け入れの打診が申し入れられており、特にフェアリーランドと露西亞、ロクシエの動きが顕著であった。

これはDAKにロンメルやバイエルライン大佐と言った名だたる名將たちが数多くいたことに加えて、DAKの場合は厄介なSS部隊を抱えておらず、しかもその騎士道精神は折り紙付であったからだ。

もちろんフェアリーランド以外の国々は、日本経由で得た別世界のDAKの情報しか持ち合わせていなかったから、初動こそ出遅れたがフェアリーランドからの猛烈なアタックを見て、すぐに動いた。

なおローマーニヤとオリュンポスも自分たちの国への受け入れに動いたが、代償として「一緒にフェアリーランドと戦ってくれ」と言うバカな条件をつけたために「ナイン！」の返答をいただいている。

だがこれにカチンと来たのか、ローマーニヤとオリュンポスは徹底的にドイツ軍が外部の国家と連絡をとるのを妨害し始めた。

無線の送受信はなんとか維持できたが、トブルクへ入港する艦船や着陸を行うとする航空機に対して目を光らせて、それこそ蟻の子一匹たりともトブルクには向かわせんとした。

しかしながら、トブルクのロンメル軍を四六時中見張るだけの兵力の余裕は既になく、加えてそもそも北フリカ戦線自体がそもそも虫食い戦線であるから、ローマーニヤの監視網を抜けるのは比較的簡単だった。特にローマーニヤ軍が最後の攻勢を目論んだ7月以降は顕著になった。

この日も、連合軍占領地から飛び立った1機のロクシエ製輸送機が海上の機動部隊から発進した戦闘機の護衛の元、トブルク郊外の飛行場へと向かっている。

輸送機はロクシエ製だがJu52に瓜二つの機体で、しかも塗装は白色で胴体には赤十字マークを入れた念の入れようであった。

その機上には、今回ロンメル元帥と交渉を行うべく派遣された新国連職員の姿があったが、その中に炎のような赤と空のような透き通る蒼の髪を持つ2人の少女の姿もあった。

「どこまで行っても砂の海ね。これで反対側に海が見えなきゃ嫌になるわね。そう思わない？タバサ？」

「私には新鮮で面白い。ただ、日に焼けるのは嫌かな」

笑顔でそんなことを言うタバサに、魔法学院以来の友人であるキ

ユルケは微笑ましい気持ちを抱かずにはいらなかった。

母国の消失、家族との別れ、さらには失恋と精神的にも手痛い打撃を短時間に被った彼女であったが、現在はそれを微塵も感じさせない程、いや以前にも増して明るくなっていた。

「確かに、タバサの白い肌を焦がしちゃうのは犯罪よね。ちゃんと日焼け止めを塗っておくのよ」

「わかってる」

転移後のトリスティンはいきなり南の島になってしまい、日差しも強くなった。そのため、日本から輸出されるようになった日焼け止めは、女性にとって必需品になったと言っても過言ではなかった。

もちろんタバサも愛用していた。

「トブルクまで後30分ほどです。乗客の皆様はベルトの準備をお願いします」

機内にアナウンスが流れる。

「やっと到着ね」

「けど、ここからが大変」

タバサの言ったとおり、間もなく機内が騒がしくなった。

「前方に戦闘機らしい機影！」

操縦室内の機長の声が機内へも伝えられた。

「何!？」

「ロマーニヤか!？それともオリュンポス!？」

慌てる職員がいる一方で、キュルケとタバサは冷静な方であった。

「護衛戦闘機が動いたわね」

「うん」

窓から見える24機の護衛戦闘機の内、半数が前に出て接近する機体へと備えた。

しかし、程なくしてそれは杞憂であったことがわかった。

「接近中の機体はドイツ軍機。出迎えの戦闘機隊とのこと」

その放送が流れると、機内の全員がホッとした表情になる。

が、すぐに表情は驚きに変わった。

やってきたドイツ空軍の戦闘機は6機。キュルケやタバサも知らなかったが、その機体はMe109戦闘機であった。

そしてその内の1機が編隊から外れると、見事な旋回技を披露して見せた。空中での妙技に、職員達の口から歓喜の声が漏れる。

「へえ、やるわね。才人や才吉、武雄よりも上手そうだわ」

その戦闘機は空中での実演を終えると編隊に戻り、そのままこちらの護衛戦闘機と並進して飛んだ。

「黄色の14番」

タバサが突然そんなことを言った。もちろん、キュルケには何のことだかわからない。

「何？」

「黄色の14番。あの機体にペイントされていた番号」

「ふーん。それにしても良い腕ね。どんな男が操縦しているのかしら？」

ミーハーな発言をするキュルケに、タバサは釘を刺す。

「浮気はダメだよキュルケ」

「わかってるわよ。私はジャン一筋だから。今のは単なる興味本位よ」

「ならいいけど。それにしても、編隊から1人だけ抜け出すなんてよっぼどね」

「確かに。軍隊で言うのは集団行動が原則だって言うのに、あんな1人だけ勝手なことして。後で怒られるんじゃないかしら？」

「よっぼどのバカか怖い者知らずだと思う」

「アハハハ。確かにね」

タバサの言葉に、キュル家は笑った。

新国連職員を乗せた輸送機が、ロマーニヤ軍に襲われることもなく飛行場に到着したのはそれから35分後のことであった。

この新国連とロンメル將軍を含むドイツ軍との交渉は、はつきり言ってフェアリーランド王国の大勝利で既に確定しており、無駄骨に近いものとなった。

やはり親フェアリーランドのドイツ兵士の多くが、今後フェアリーランドへの移住を希望もしくは容認しており、新国連を構成する各国の出る幕ではなかったのだ。

結局の所、新国連とドイツとの間で交わされたのは、今後ともに両者間は中立を維持することの再確認と、今後のロマーニヤやオリエントとの協議に際しての必要あらば仲裁役となることを検討してもらったことだけであった。

この結果に、各国では落胆が大きかったが彼らが元いた世界での勢力バランスや友好関係を考えれば仕方が無い結果であった。

新国連職員は1週間ばかり滞在して引き上げる予定であったが、その間にロマーニヤ軍による最後の反攻作戦やロマーニヤ本土での異変などの事態が重なり、結局1ヶ月近くもトブルクに足止めを喰らうこととなった。

もつとも、さすがに海外からやってきた賓客だけに、ドイツ側はそれなりのもてなしをしてくれたので、当の職員達には悪いことばかりではなかったようだ。

ただし、ロンメルが「中立国として戦闘の様子を観戦する」とか言い出してマンムートで前線視察に行ってしまったり、一部の部隊が独断でフェアリーランド軍を助けるためにロマーニャ軍と戦闘をしたりと、冷や汗を掻く場面も何度かあったが。

そんな中で、職員連中の中で一番若いキュルケとタバサはドイツ兵士達から注目を浴びることとなった。ただし、キュルケが既婚であるとなると彼らの目はタバサ1人に注目した。

空のような蒼い髪に蒼い目、体型も良いと来ているから注目を集めない方がおかしかった。

しかしながら、彼女自身は異性に対して醒めた目をしており、ドイツ兵たちのアプローチを尽く断ってしまった。

そのため、彼女が帰るまでに食事の誘いを成功させられるかさせられないかがドイツ兵たちの間で一種の流行となった。

そんな中、ある日タバサは他の職員達と一緒に空軍基地を見学する機会を得た。

その折、キュルケと共に先日目の前でアクロバットをしていた黄色の14番を見つけた。

「この飛行機のパイロットはどんな人物？」

「この間私たちを出迎えた時に勝手にアクロバットをやっていたわよ」

彼女は案内役の兵士に訪ねてみた。すると、すぐに笑いながら彼は答えた。

「ハンス・マルセイユ中尉ですね。彼ならば納得できる行動です」

「一体どんな人物なの？」

「気になるわね」

2人の言葉に、その兵士は苦笑いしながら答えた。

「非常に腕の立つパイロットです。ただ、少々性格に難がありましたね」

「構わない。一度会ってみたい」

「わかりました」

すぐにそのパイロットが呼び出され、タバサたちと御対面した。

「第三帝国空軍中尉のハンス・マルセイユです……」

「!?!」

「あはあは」

キュルケが見詰め合う2人を見て、微笑んだ。

目と目が（クドイ！）

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 6 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

今回もジョン・ドー先生には感謝です。そして、ごめんなさい。

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 7

新世界暦5年7月17日

「次行つくよー!」

「オラオラ行くぜ!」

「よし行つて!」

「レッツハンティング! BANG!」

4人の少女たちが呼吸を合わせて戦車を動かしている。彼女たちが狙った演習用標的は見事に吹き飛んだ。

少女たちはメアリー少尉率いるフェアリーランド陸軍ダイナスティー大隊クリス小隊所属の5X号車の乗員達、通称カ〇タデリバリーズたちであった。いずれも16〜18歳の少女達であったが、この時代難しいとされた行進間射撃を見事にやっていた。

「ほっ」

「やるなあ。行進間射撃なんて」

「こりゃバカに出来んな」

と彼らの訓練の様子を見ながら感嘆の声を上げているのは、国際派遣旅団に所属する新国連軍の兵士達だ。今日彼らは互いの練度を披露するために、合同訓練を実施中であった。

新国連軍の兵士たちは装備の質や、やはり少女兵が多数の割合を占めるフェアリーランド軍に表立ってこそ言わなかったが、最初は内心軽んじる気持ちを持っていたのだ。

しかしながら、それを裏切るように練度だけ言えばフェアリーランド軍は非常に高い能力を有していた。だから新国連軍の将兵たちは認識を改めていた。

「おたくの軍隊も中々なものですね」

訓練の様子を見ながら、新国連軍国際派遣旅団司令官（旅団長）の池田末雄中將はフェアリーランド軍のベルタ中將に言う。もつとも、身長差があるので少しばかり滑稽な絵になっているが、もちろん当人たちは気にしない。と言うか気にしてられない。

「誉めてくれるのはありがたいけど、数じゃイタ公の方が断然有利だし、この広い砂漠の虫食い戦線じゃ、いつでもどこから敵が襲ってくるかもわからないよ」

「ちょ、ちよっと軍団長。失礼ですよ」

ベルタの素っ気無くかつ無遠慮な物言いに、参謀長のピゴット大佐が慌てるが、池田の方は全く気にしていなかった。

「気にしていないよ。確かに、英軍も一部を除いては部隊を動かす余裕がないようですし」

「まあそれを言ったら先生たちと戦わないだけマシだけどね」

先生。それはフェアリーランド軍の人間がドイツ軍を表わす時に使う言葉だ。

「先生ですか。確かあなたはあのロンメル元帥に教えを請うたんですよね？」

するとベルタは頷く。

「そう。あなたの世界でも、ロンメル元帥は有名だった？」

「ええ。砂漠の狐と呼ばれてその名は世界中に轟いていました。そんな人物に鍛えられたとは羨ましい」

「昔の話よ。それよりも、あなたの所の部隊もやるじゃない」

そう言うベルタの視線の先では、ロクシエ軍の槍のマークとロシア軍の双頭鷲の紋章マークを施した四式戦車がやはり行進間射撃をおこなっていた。

フェアリーランド軍に負けないとばかりに、こちらも命中弾を次々と演習用標的に叩き込む。

「あんな強力な戦車があるなら、是非ともうちの部隊と一緒に戦って欲しいんだけどね」

ベルタが残念とばかりに言う。

到着後の打ち合わせで、新国連軍はフェアリーランド軍の事実上の味方として戦うことが再度確認されている。しかしながら、共同で戦うと言う話は出てこず、それぞれの受け持ち戦区を決めただけ

であつた。

これは両軍がまともに共同訓練をしたことが無い（当然である）ためだつた。しかも使う戦車をはじめとする兵器の性能も違つので、そもそも共同で戦うことに無理があつた。

そのため、両軍は互いの車両や航空機のシルエットや国旗などのマークを提供し合い、無線の周波数を決め、戦闘が起きた場合の最終的も目標をすり合わせるに留めた。

「直接共同出来ればそれに越したことはないでしょうが、そればかりは何とも。後は実際に戦つてみないことには……まあ戦わなければ一番良いのですが。先日の海戦で、ローマーニヤが講和に傾いてくれれば」

「うーん、どうだろう。意外とイタ公にも骨のあるやつがいるしね。それにローマーニヤ軍はこつちの5倍はいるし。はっきり言つて五分五分ね……ただ今回はあなた達がいるからあまり心配してはいないわ」

ベルタは不敵な笑みを浮かべた。

「おや？得体の知れない軍隊に対して随分と信頼してくださいませね？」

「まあ海戦のこともあるけど、見たところ随分と我が軍の兵士と打ち解けているから」

フェアリーランド王国軍と新国連軍の兵士が意外と早く親密な関

係を作れたのは、それは新国連軍を構成している各国やフェアリーランド軍がそれぞれに持つ異民族に対する感覚が大きい。

フェアリーランド王国は国民の多くに亜人を抱えており、その多くがウサギのような耳を持つ。しかしながらそれはあくまで多数派の話であつて狐のような耳を持つ者や、犬の様な耳を持つ者もいる。また長い歴史の中で色々な血が混じつた者もあり、それでも普通の人間もいる。

こんなお国柄であるから、そもそも外見だけで相手を差別すると言つて観念自体が持ちにくい国であつた。これゆえに転移前に彼らが生きた世界では、多くの植民地を短期間に取り込むことが出来ていた。

一方新国連軍の内、数の面で主力を努めるロクシエ軍は多くの民族の集まりであつたが、長年スー・ベール・イルという共通の敵に対して一つの連邦を構成してきており、やはり民族差別と言つて問題を人々が感覚として有していなかつた。

また露西亞帝国の場合も国内に露西亞系、ドイツ系、イギリス系、日本や朝鮮などの東洋系に加えて土着の民族やユダヤ教徒を抱えた多民族国家であつたので、意外と他民族に寛容であつた。

今回の新国連軍にはあまり参加していないが、サクラスの場合も国内にいくつかの民族やドラゴンなどを抱えている関係上、こうした問題はあまりないだろう。ヘルベチアも、そもそも民族が滅茶苦茶になつた世界の人々なので、この点を心配する必要は小さい。

問題なのは長年に渡るメイジ至上主義だつたトリステインと、よく島国根性を例に上げられる日本の二国であつた。

これに関しては、今回は両国から派遣されている兵士の数があまり多くないことに加えて、これまで異国への派遣期間が長い兵士らを意図的に選抜することで凌いでいる。

実際今回トリスティン軍で最上位のアニエス少佐は平民出身で異民族に対して差別意識は持っていなかったし、陸自にしても空挺所属の友澤をはじめとしてトリスティンやヘルベチアなどへの派遣経験を持つ兵士で固めていた。

ただし、実際の所兵士たちが短期間で友好的なムードを醸し出せたのは、言葉が通じると言う点が大きかった。

日本人が異なる民族を嫌う島国根性を持つ傾向にあるとよく言われるのは、島国という地理的な条件に加えて、自分たちと話せない人を信用しないとと言う部分も大きかった。

実際言葉が通じるようになったせいも、前世界に比べて日本人は社交的になったと言われている。

それはともかくとして、諸々の要因が絡み合った結果、両軍兵士は意外と短期間で良好な関係を築けていた。

さて両軍による演習とその見学が行われる中、陸自の友澤はある光景に啞然としていた。

「あ、悪夢だ……」

彼の言う悪夢とは、今彼自身が乗るフェアリーランド軍の自走砲の上で繰り広げられていた。

「そこだ撃て！」

「いいぞ！中々よい手際だ！」

前者のセリフがトリステインから派遣されているアニエスのもの。そして後者のセリフは現在演習中のフェアリーランド陸軍第666部隊、通称「バツカニアンズ」の隊長を努めるジャンヌ少佐のものだ。

「何でこうなるかな……」

新国連軍の各部隊の兵士たちは、それぞれフェアリーランド軍の各部隊を視察することになった。そして2人の場合は、この666部隊の訓練視察に回されることとなった。

なお、今回派遣された新国連軍において日本の自衛官は観戦と連絡役を兼ねた数名が派遣されているだけだ。トリステイン軍に至っては、アニエスと彼女の副官だけであった。しかしその副官は、この時別の部隊を視察するようアニエスに命じられていた。

自衛隊の場合陸自の直接派遣（戦後復興を除く）を嫌ったため、お披露目程度の90式と10式、その支援部隊を派遣するに留め、主力は海自の機動艦隊となった。空自も参加したが、それは主にC130輸送機などの輸送部隊であった。

トリステインの場合は、そもそも軍隊自体が再編の途上にあるため、まとまった部隊の派遣などそもそも不可能であった。彼の場合陸軍の戦車は各国のお古。軍艦も中古品。空軍に至ってはレシプロ機を中心にわずか80機あまりで、その運用のほとんどを傭兵に任している始末であった。

まあそれはともかくとして、何故に友澤が悪夢と言ったかと言えば、それは目の前の一番苦手とする女とジャンヌ少佐が息を合わせ、部隊を指揮しているからだ。

最初アニエスはただ見ていただけなのだが、すぐにジャンヌらとる豪快な戦術に引き込まれ、思わず口に出してしまったのだ。そして止せばいいのにジャンヌ少佐も止めないから、何時の間にかアニエスとジャンヌが共同して部隊を指揮しているような状況になった。

それが友澤にしてみれば悪夢であった。彼から見れば、まるでアニエスが2人になったように見えたのだ。

(そう言えば、ジャンヌ少佐は以前乗っていた自走砲が被弾して、ポロポロになりながら1人で対戦車ライフル抱いて戦車1両を撃破したとか聞いたな。メイジに躊躇わず向かっていくアニエスみたいなもんだぜ)

と溜息をつく彼に、アニエスが顔を向ける。

「何をやっている？お前も立ってちゃんと見たらどうだ？」

「へいへい」

友澤はダラダラとであるが立ち上がり、666部隊を見回す。

(ふむ。激しい動きをするわりには統制が取れているな。訓練が行き届いている証拠だな)

と隊長の人格は別として、666部隊の腕は認めるところであった。

そして訓練が進んでいく中で、彼は1回だけ口を開いた。

「そこに伏兵がいますよ」

「何!?!」

その時3人が乗る自走砲は、わずかな窪みの側を通り過ぎる所だった。そして実際そこに、敵役の兵士がカモフラージュしていて、演習用手榴弾を投げてきた。手榴弾はオープントップの自走砲の中に落ちた。

「はい、全員戦死と言うところですか?」

「おい友澤!何故もつと早くに言わなかった!?!」

「あのなアニエス。俺たちは観戦武官だぜ。実際の戦闘に参加出来るわけではないだろ。……ま、今のはさすがに危ないからついつい口に出ちまったがな」

「ほう。では君はあのカモフラージュした兵士が見えたのか?」

「まあ」

「そうかそうか。大いに結構」

とジャンヌは怒るわけでもなく、ただ微笑んだ。

（嫌な予感……）

彼の予感は的中する。この数時間後、彼は池田中將からアニエスと共に、第666部隊専従の観戦を命じられたのであった。

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 7 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 8 (前書き)

ごめんなさい。なんか面白いので、まだ続きそうです。

新世界暦5年 7月18日 北アフリカ戦線上空

「こいつはいよいよだな」

晴れ渡った砂漠の空を轟音を轟かせ、一条の飛行機雲を残しながら、日の丸を付けた1機のプロペラ機が飛んでいく。三式艦上攻撃機の「流星」である。

「流星」はズバリ旧海軍の「流星改」の流れを組んでおり、発動機を出力3600馬力のターボプロップである「希望」エンジンに換装しているものの、逆ガルの翼を持つなど遠めに見れば「流星改」に見えなくもなかった。

もちろんただエンジンを換えただけではない。無線装置や航法装置などの艤装は、現代日本の飛行機が必要としている物を搭載している。また機体素材も超々ジュラルミンではなく、カーボン材などを多用している。また主翼の形や風防なども空気を抵抗を抑える形に再設計されている。

ロクシエやサクラス、露西亞でもライセンス生産されているが、いずれもターボプロップエンジンの出力が低かったり、機体素材が違うなどしており、その性能は日本製の物には及ばない。

純日本製の機体であれば、武装を搭載しない偵察機状態で最高速度は700km。大型増槽搭載での航続力は最大4000kmを誇る。また日本製の機体の場合、武装は基本的に搭載せず、必要であれば機銃や爆弾を搭載する。また同機の設計時点でのコンセプトが

汎用性を高めることであつたため、カメラなどの偵察機材を搭載しての偵察任務や、電子機器を搭載しての簡易電子戦機として使用することも可能であつた。

「流星」は新世界において、急速な防衛力拡充に迫られた（国内的にも国外的にも）日本が「ある程度数が揃えられるローコスト機」として同じく製造した「烈風」と同じく、海自や帝国海軍などの主力艦載機になりつつあつた。

また前述した2機種以外にも、第一（第二世代のジェット戦闘機を参考に設計した四式ジェット艦上戦闘機「震電」が既に実戦配備されつつあつたが、今回はサクラス帝国軍が試験的に4機を陸上基地に持ち込んだ以外はなかつた。

それはともかくとして、空母「白鳳」から発艦した「流星」を操る橋本敏男三佐は、眼下の砂漠に見える光景を見ながら、ローマニヤ軍が最後の攻勢に出るのを感じ取つた。

実際に多くの戦車や砲が最前線に配備され、夥しい車両や歩兵の移動が確認できれば誰にだってわかる。しかもそれは飛行機で直接確認出来なくとも、偵察衛星で確認することができる。

航空機での偵察を行うのは、解像度の低い衛星（初期に打ち上げた物は良かったが、後から打ち上げた物は各国からクレームがついたため性能が低い）を補完するためであつた。

と、その時後方の偵察員が叫ぶ。

「敵機！MC202と思われます！」

自衛隊出身のその兵士は、初めて見る敵機に多少狼狽しているようだった。だが、太平洋で米機動部隊相手に雷撃をした経験もある橋本の場合は、落ち着いていた。

「了解。全速離脱するぞ」

橋本はスロットルと入れ、希望エンジンの出力を上げた。見る間に「流星」は速度を上げていく。それまで巡航の450kmで飛んでいたのが、あつと言つ間に500km、そして600kmを越えてまだまだ上がる。

追尾してきたロマーニヤのマツキ戦闘機も全速力で追ってくるが、600kmを過ぎたあたりから徐々に引き離され、最終的に後方へと置いてかれてしまった。

「畜生め！あいつは化け物か!？」

ロマーニヤのパイロットは視界から消えた「流星」に悪態を吐いた。

もつとも実際の所は彼だけでなく、この日偵察に出撃した「流星」や「烈風」は追尾したロマーニヤのMC202、Re2001などを簡単に振り切つてしまい、ロマーニヤ空軍パイロットを驚かせていた。

この日の偵察の結果、ロマーニヤ軍が近日中に最後の反攻を行うことが確実となった。

そして2日後、ロマーニヤ軍の最後の攻勢が開始された。

その攻撃はセオリーどおりに始まった。

まず、ロマーニヤ軍は戦線全体に渡って配備していた砲兵と航空機による攻撃でフェアリーランド軍の前線に対して攻撃を開始した。

枢軸軍側にはD A Kが抜けており、またオリュンポス軍も一部しか配備されておらず、その主力はロマーニヤ軍であった。

一方のフェアリーランド軍も、本来の主力であるはずのイギリス軍がエジプトの防衛など様々な理由をつけて後方へと移動してしまった（もつとも全てではないが）ために、ロマーニヤとの戦力差は5対1にまで膨らんでいた。

モクスター州とラ・デューン州の奪取には失敗したが、こちら（北アフリカ）だけはなんとしても自分の手にしておきたかった。特に、戦争を始めた統領にとっては切実な問題であった。

だが、この第一波の攻撃は新国連軍によってまたも邪魔されることとなった。

同軍が最前線に持ち込んでいた長距離用野戦対空レーダーは、奇襲を行おうと画策したロマーニヤ軍機をことごとく捕捉してしまった。その結果数が少ないフェアリーランド軍と新国連軍の各機体は有効な迎撃を行うことが出来た。

この迎撃にはロクシエ空軍オリジナルの1年式戦闘機（新世界暦1年に正式採用）や前述したサクラス帝国空軍の四式ジェット戦闘機も参加していた。ちなみに両機種合わせて出撃機数15機で、未

帰還は0。対して撃墜50機を記録している。

さすがに被害0などと言う虫の良い話にはならなかったが、フェアリーランド軍は効果的な迎撃によって空襲に関する被害は最小限に抑えている。また砲撃に関しても、前日までに集まった情報によって予め陣地変えや部隊の避退をしていたので、こちらも最小限の被害で乗り切っている。

ただし神出鬼没のコマンドによる攻撃によって、少なからぬ損害を受けた部隊もあり、ロマーニヤ軍が決して弱小な軍隊でないことを見せ付けた。

そして事前攻撃が終わると、戦車を中心とした部隊がフェアリーランド軍の前線を突破するべく前進を開始した。

一方で攻撃を受けたフェアリーランド軍と新国連軍も黙っていないかった。

真つ先に動いたのは前線飛行場に配備されていた爆撃機や地上襲撃機のグループで、制空権が獲得されるや否や、前進を開始したロマーニヤ軍の頭上に爆弾やロケット弾、対戦車砲弾の雨を降らせた。

特にわずか数機であったが、強力な対戦車火力を誇る陸上自衛隊のヘリコプター部隊はロマーニヤ軍に大打撃を与えた。

続いて陸上でも反撃が始まった。

「全車出撃！イタ公のケツをぶっ飛ばしてやるわよ！！」

指揮下にある全ての車両に向かって出撃命令を下したのは、同オアシスに駐留するダステイナー大隊大隊長のアルメリク・トパーズ中佐だ。

彼女らはこれから、第三オアシスへ進撃してくるロマーニヤ軍の大部隊に正面から反撃を挑むのである。

もつとも、その指揮下にある第5中隊を任されているダリア・コノリー大尉はあることが気がかりであった。

「メイアたちは大丈夫かしら？」

本来彼女の指揮下にあるメイア少尉率いるクリス小隊は、現在彼女の指揮下を離れて別行動中であった。

「ダリア、あのノーパンたちの心配をしているのか？」

彼女の無線機のヘッドフォンに、突如若い男性の音が飛び込んできた。

「ちよつとアスコット大尉！いきなり話しかけないでよ。今は作戦中よ、場を弁えなさい」

彼女に交信して来たのは、今回臨時にコノリーの指揮下に入った英軍戦車小隊を率いるジェリー・アスコット大尉であった。彼は今回、指揮下のマチルダ4両でダステイナー大隊を支援する。

今回数少ない英軍よりの援軍であるが、彼は以前コノリーと共に戦闘を行って以来、彼女に惚れていた。その惚れ具合と来たら異常な程で、婚約指輪を送りつけながら剃刀入りの手紙を返されても諦めないくらいだ。もちろん、今も諦めていない。

「悪い悪い。けど、ダリアが随分と心配そうにしているからな。こっちからも良く分かるぞ」

「うー!? そんなに顔に出ていたかしら?」

コノリーは今戦車のハッチから頭を出している。しかしながら、アスコットの乗るマチルダからはそこそこ離れている筈であった。なのに表情を見られたことに、気恥ずかしさを覚えずにはいられなかった。

「ああ。だけどあんまり気にしすぎるなよ。士気に関わるぞ」

「そうは言っけど、今回戦うロマーニヤはこれまでで最大の数なのよ。いくら幸運続きのメイヤやフラワーたちでも心配よ」

「けど彼女らの部隊はあの「バツカニアンズ」なんだろう? しかもその指揮官はダーブロウ少佐に一発かましたって言うじゃないか?」

第66部隊通称「バツカニアンズ」の隊長であるジャンヌ少佐が、英軍戦車隊指揮官のダーブロウ少佐を殴りつけた話は、既にフェアリーランド軍のみならず、英軍内にまで轟いていた。

そのせいなのか、2人は知らなかったが、ダーブロウは現在後方にお呼び出しを喰らっていた。

「それにあの日本とか、他のよくわからん国の新型戦車もいるし、航空支援もあるって言うじゃないか。なんとかなるぞ」

「……そうね。もっと前向きにならないとね」

「安心しろつて。もしイタ公がダリアに何かしようとしても、俺が守ってやるから」

「フン！イタ公から逃げていたあんたが何を言うんだか」

「うっ、それを言われるとつらい」

途端にアスコットの表情がシヨボンとなる。

「フッフ。気にしているなら、しっかり働きなさい。それ次第じゃ考えてもいいわよ……」

「え！？」

「もう、で、デートのことよ。その、1回位なら……言っておくけど、この戦いが終わってからよ！」

コノリーは顔を真っ赤にしながら返した。

「……了解。その約束、忘れるなよ」

「当たり前でしょ。一端切るわよ」

「ああ。それじゃあ、お互いに健闘を」

「そつちもね」

2人は交信を切った。

「それじゃあ、私たちも行くわよ。戦車前進！」

コノリーが乗るハイドライドMK？戦車、そしてアスコットの乗るマチルダも前進を開始した。

ちなみにこの会話、無線機を介していたので当然他の隊員にも聞かれていた。そのため……

「きいい！中隊長とデートですって！？」

「生意気よあのササナ野朗！」

「戦場でそれとなく撃ち殺しちゃいましょうか？」

「それがいいわ。装甲の薄い後ろからバンよ！」

アスコットはコノリーに心酔する彼女の部下から、いらぬ殺意を買っていたのであった。

「あ、あなたちねえ……」

コノリーは一気に体から力が抜けて行くのを感じた。

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 8 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8870u/>

---

交差する世界 番外

2011年10月9日16時30分発行